

平成十一年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻八六八号

川柳塔



日川協加盟

No. 868

九月号

第5回 川柳塔まつり

<役員会>

と き 10月9日(土) 午後1時-2時半
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車)

<同人総会>

と き 同 日 午後3時-4時半
ところ 同 会 場
議 事 平成10年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成11年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

<記念句会>

と き 10月10日(日) 午前10時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛城
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

兼 題	「つかむ」	(和歌山)	川 上 大 輪 選
	「時計」	(広島)	森 井 菁 居 選
	「人柄」	(青森)	小 寺 花 峯 選
	「おかしい」	(島根)	原 章 峰 選
	「五」	(大阪)	高 杉 鬼 遊 選
	「追う」	(事前投句)	橘 高 薫 風 選

◎各題2句・出句締切正午・4時半終了予定

会 費 1000円(当日いただきます)

<懇親宴>

と き 同日午後5時-8時
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金剛
懇親宴会費 7000円(会席料理)
宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8000円(朝食付)

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌最終ページの申し込み用紙に明記の上、8月31日(火)までに本社事務所までお願い申し上げます。
懇親宴・宿泊の御送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願いいたします。

主 催 川 柳 塔 社

不易流行

橘高 薫風

国立文楽劇場で「曾根崎心中」を見た。

これは近松の世話浄瑠璃の第一号で、実際に心中のあった日から二週間目に初日を出したキワ物だったが、作が良かったので興行的にも当り、竹本座の借財を弁済出来たという。ここで竹本義太夫は座本引退を声明したのである。

世話物の人気は心中の流行を招き、衰微して昭和の代には床本だけ残り、曲は途絶えていた。

昭和三十年の正月、四ッ橋文楽座の舞台上に、この「曾根崎心中」が公演になる。西亭脚色並作曲であった。西亭とは、三味線の野澤松之輔師匠の別号である。

松之輔師匠とはしばしば麻雀を囲んだお仲間の一人であったので、その新曲を聞きに行った。麻雀では物しずかな小柄の師匠の芸の上のお姿に接して、深い感動を覚え、以来お初、徳兵衛は欠かさず

見ることにしている。

二十五と十九の共に厄年の相愛の男女が、金と主従の恩の葛藤にさいなまれての心中行である。

「天満屋の段」では縁の下で徳兵衛がお初の足を取って押し戴き、息を殺して焦れ泣く場面がある。

ペディキュアの足を仏足頂礼す

の私の句を思い出し。江戸時代も今も愛の形は似たものであると思ったり、見るたびに新しい感慨に浸る。

新しい感慨はちりちりと興味を起させるが、不易の感動はずしんと脳天から心の内へ訴えてくる。

いわば「さわり」のくだりである。

「この世の名残り、夜も名残り。」

死に行く身をたとえれば、あだしが原の道の霜。一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ。

あれ数ふれば暁の、七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の鐘の響きの聞き納め。

寂滅為楽と響くなり。

語る太夫五人、三味線の師匠も五人、高ぶる声、重く沈む三味、聞く私も一

体感でいやが上にも昂ぶるのである。

人形を遣うのは吉田玉男と吉田文雀、それぞれ徳兵衛とお初を生き生きと、人間文化財の貴族で堪能させて下さる。

昭和三十年のときも平野屋徳兵衛の人形は吉田玉男であった。天満屋の段を語った竹本綱太夫は先代であつたらう。今回も綱太夫であつた。

総合芸術は多くの個人技の集合体で、すばらしい調和が感銘を深くする。

四十年前の意識を甦らせながら国立文楽劇場を後にした。

川柳は、文楽のような総合芸術ではなく、個人技に近いものだが、選者と作者との微妙な連繫もないではない。

師匠という秀れた人との出会いが、いつまでも胸の底に沈んで、テクニク以上に心情の上で影響を受ける。

伝統の芸の「不易流行」、文楽も川柳も変りはない。

作品

八月の花火 九月に曼珠沙華
あわててもあわてなくても熊の顔



座右の句

なんとなく頼りにしてる守り札

(狸村)

私の句

母さんの急所はずれている小言

原 苑子

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 不易流行

川柳に見る江戸庶民の歴史観

川柳塔(同人吟)

佳句感想

自選集

川柳の群像 伊志田孝三郎

誹風柳多留二四篇研究 9

水煙抄

大空のこころ (104)

秀句鑑賞 同人吟

水煙抄

澎湖抄

橘高薫風 (1)

阿萬萬的 (2)

橘高薫風選 (4)

橘高薫風 (52)

東野大八 (56)

河内天笑選 (62)

橘高薫風 (91)

宮崎シマ子 (60)

千葉風樹 (99)

八木千代選 (88)

川柳に見る

江戸庶民の歴史観

阿 萬 萬 的



江戸時代の庶民は、謡曲や講談などから得た知識で歴史上の人物を観察し皮肉りもした川柳が柳梅の中にあるので、そのうちの一、二を紹介することしよう。

○ 小腕でも長刀ばかり二本しめ
うえを下へとく

牛若丸は、まだあけない少年だのに、五条橋では弁慶の薙刀を、そして謡曲「熊坂」では、熊坂長範と戦い、二人ともやつけたと言つ。句のうち「しめ」とはやつつけたと言う意味。

○ 清盛の医者をはだかで脈をとり
はつめいなことく

平清盛は火の病で「臥し給える所四五間が内へ入る者は熱き堪えがたし」と平家物語にある。また比叡山から汲んできた水をたたえた水槽に浸したときは

○ 湯にはいる時入道はじゅうとゆう
(前句不詳)

○ 通盛は寝まきのうえへ鎧を着
うるさかりけりく

茴香の花

「X(エックス)」

一路集「茄子」

「楽しい」

初歩教室「地」

閑人閑話 住宅管理組合考

柳都全国川柳大会に参加して

エッセー 私と川柳

八月本社句会

各地柳壇(佳句地十選/嵯峨根保子)

柳恩(本田恵二朗先生を偲ぶ)

柳界展望

九月各地句会案内

■編集後記

宮西弥生選 (92)

古久保和子選 (94)

岡本花匠選 (94)

傍島克治選 (95)

吐田公一 (96)

田中正坊 (98)

嵯峨根保子 (100)

酒井輝 (101)

田辺灸六 (102)

田辺灸六 (106)

田辺灸六 (121)

田辺灸六 (122)

田辺灸六 (125)

田辺灸六 (126)

みつ子・金太

座右の句

悔いるだけ悔い悔いなしと言いきれる

(林ふじを)

私の句

七坂をこえて菩薩の風にあう

原みさを

平通盛は、能登守教経の兄で、一の谷の陣

屋に船から小宰相と言う愛人と呼び寄せ、

睦言の最中、敵が攻めて来るぞと教経に怒鳴

りつけられ、あわてて寝まきを着かえる間も

なかったと言うのである。

○ 夜が明けて狩場へ外科を呼

曾我兄弟が富士の裾野の巻狩りに忍び込み

工藤祐経を討った時、多数の死傷者が出たの

で、翌朝各陣屋では外科医を呼んだらうと

○ いのし、やむじなのわきで工藤死に

謡曲「鉢の木」の中から生れた句もある。

○ 源左衛門鎧を着ると犬がほえ

もつともな事く

佐野源左衛門が干切れた鎧を着た姿を見た

時、飼い犬までもが怪しんで、ほえた事だろ

うと

○ 鎧着て乗るとよろつく佐野の馬

くたびれにけりく

馬の栄養不良の状態をよんだもので、次は

○ 佐野の馬かんのろのような豆を喰い

久しぶりなりく

○ 伊豆ぶしも八代まではだしがきき

うやまいにけりく

伊豆の北条氏は、八代までは伊豆節のよう

にだしが利いていたが、九代高時になってか

らは力なく亡びてしまった。伊豆産の鯉節と

北条武士を掛けた句なのですね。

ともあれ江戸の庶民は勉強家ですな。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

岡山県 小林 妻子

仮の世の寒いドラマと夕暮れる
雑魚ばかり集めて幟立てている
気に入らぬ言葉をしもう長持だ
無駄めしを少し喰うたという自慢
荷くずれを直すがむしろおな
企みの背なに波しぶきが沁みる

呉市 榎田 英詩

お互いに刺を抜こうよ若くない
落ち鮎を待っていたのは飢えぬ人
ひとりっきりの叛旗は風も味方せず
枯れた身の瞑想過去を追いつ
勝ち名乗り懸賞金を驚掴み
今日も又凡夫は妻に言い負ける

豊中市 安藤 寿美子

沙羅の花 私は無駄に歳をとり
歩きケータイ同行二人とでも言うか

犬も女も叱るとツンと横を向く
そうですねん預金は危険水域に
文五郎の遣ったお園を忘れない
美しき第二楽章始まり(祝 某氏再婚)

竹原市 小島 蘭幸

おふくろの横顔ばかりある祭り
東京タワーのてっぺんにいるのは猿か
カラオケも七十点と出た父だ
自転車の日傘サーカスではないぞ
暗証番号いつか忘れるときが来る
晩年の父の笑顔がある雲だ

東大阪市 谷口 義

消毒をするとわたしが消えそう
理屈ではない物がある冷蔵庫
親切にしてもらった黒電話
誰が言うても同じだと思えない
お弁当を作っただけで褒められる

むつかしい顔で暑さに耐えている

八尾市 宮崎 シマ子

何もできぬ夫も産休とっている

腰かけた石を拝んで遍路立つ

素っぴんは素っぴん同士お付合

横にいる妻がちつとも邪魔でない

仮面脱ぐ下にも一つこわい顔

うつの日のうどんたつぷり葱きざむ

東大阪市 森下 愛 論

はぐれ蛾を叩き落としてナムアマミダ

老眼鏡掛けて見直す年金表

十五夜のあの時僕は上等兵

酔う程にだんだん僕の席がない

急ピッチまた晩酌のひとりもの

杯交わすたんびに増える嘘の数

京都市 山海 友 熙

ちよっと手をつないでくれた古都の風

もう少し歩いて見たい女坂

女坂下れば森の中に出る

旅に出る出たい夢みる朝の冷え

虫が鳴くわたしもそつとそつと秋

何もかも捨てて別れる夏の雲

岡山市 矢内 寿恵子

無明長夜の道に情けの月明り

人間の優しさ怖さ風の道

母なれば迷うてならぬ道ひとつ

呑みこんだ愚痴をプラスにして生きる

残り火を大事に辞書を繰りながら

朝毎に死者も生者もなく祈り

和歌山市 木本 朱 夏

たましいを宥めるように本を読む

リーダーが捉えた恋の迷走図

賑やかなバラの隣の疲労感

イチジクが繁るわたしの出生地

温かい拍手だなんて欺瞞だろう

お抹茶を一服視野が広くなる

和歌山市 古久保 和 子

甲虫電池を入れるところがない

猫の子を産んだ隣のお婆ちゃん

やどかりの転居通知がまだ届く

ジャンケンを決してしない長女の手

素通しのメガネで見えている世界

ビルの窓から練習中のジャズが降る

吹田市 山本 希久子

海の青さに命洗われ佐渡の旅

佐渡金山いのち削った跡がある

朱鷺の里の山ふところに抱かれる

虹消えなんとす風まかせの旅路

二十一世紀の足音高し電子音

執着を小さく包む恋蜜

宝塚市 嵯峨根 保子

曼朱沙華 恋に枝葉は捨てました

ため息を吐いたらそこで終っちゃう

あみ笠のうなじが若いさどおけさ(旅 4句)

相川に立つ浪風は旅人へ

優優のどじよっ子いそう田が揺れる

もっと花咲かそ訣れのペンライト

吹田市 古川 喜美子

泳げない私にすぎる人がいる

更衣飛機かるがると飛びあがる

鉛筆が散らす火花を見ていよう

傷口を拭けば噴き出すのは弱気

シャボン玉と一緒に消えたやせ我慢

斑鳩に仏と出合ういのち今

堺市 山本 半 銭

緊張も緩和も枝雀から学び

遁世の私にも吹く不況風

妻だった日々に重なる寡婦の時

昔裂亡母は袴の女学生

楊梅の一つぶ遠い日に遊ぶ

西瓜素麵夏瘦せなんぞ程遠い

寝屋川市 高田 博 泉

若人よ白黒急ぐことはない

落ちこぼれ母にやさしい子に育つ

クサリ解き犬と日溜り分ち合う

逝く人へうらやましいと手を合わす

説教をする先生の小さい声

年寄りと言われ度くない酒を呑み

松江市 舟木 与根一

民謡の里に山彦まだ残り

山越えて谷で眩暈を起こしてる

老兵は消えず一番風呂が好き

飯粒が同じところに何時も付く

酒呑みの美学 十人みな一緒

鈍行がゆっくり荒れた故郷を見せ

吹田市 野下 之 男

神様が気紛れで抜く桶の栓(豪雨橋)

神様が顔を出しそな熊野道

蛭呼ぶ柄でもないが父の声

大同土飼主同士品定め

言うただけお返しされる弾の数

子燕もこんちきちんを聴いてる日

箕面市 唐 住 実

銀行もコンクリートも信じない

落書きの相合傘のようになり

かくや姫 竹が光ったフィラメント

俳優の素質もあった大芝居

ブロードの娘にブロードのロマン聞く

スーパールの胡瓜でくつわ虫となり

羽曳野市 田 中 透 太
背きたい指もあろうに掌を合わす

口髭を生やし口笛吹いている
夏風邪が女を連れていったまま

途中下車遠い記憶の人に会う

ドクターも分らぬことがあるらしい
もういっぱい欲しいと言えぬ病み上がり

箕面市 岩 津 ようじ

一周忌のお布施故人の貯金から

日本は無口にて候 G 8

ほのぼのと故人の艶話聞くお通夜

よき日かな巨人惨敗トウは勝つ

巨人嫌 巨人の好きな人も嫌

カルチャーの師と割り勘でおでん屋へ

和泉市 岡 井 やすお

エルツイン氏足して二で割る手を知らず

自殺者をよそに他国へ二百億

同盟で凌ぐ政界相撲界

移植より脳死を救う方が先

絶対に買わぬお宅にまでチラシ

田舎から孫が帰省の夏休み

豊中市 田 中 正 坊

君が代を戦後歌ったことがない

日の丸よ老兵はまだ生きてるぞ

軍服のはらから集う白昼夢

捨てかねる物がまだあり我が命

これが済みあれが終わった日が余生
人いろいろ川柳塔を読み終える

東大阪市 指 宿 千枝子

受話器から妻のやさしい声をする

公園のベンチ身分は問いません

スピッツに私の弱気わかるらし

子供には私ひとりも重からう

ハハハハひとり暮らしは無言劇

ふるさとへ私は元気ですと書く

和歌山市 桜 井 千 秀

愛嬌を振り撒きすぎて人嫌い

裁ち台のへらあと若き日のままだに

鈴ついた握り鉄が錆びてくる

不合理な脅威自分の影法師

古伊万里の茶碗で食べる紀州粥

ペンダント肌身離さぬ子の遺影

和歌山市 楠 見 章 子

とうもろこし一粒ずつもみな元氣

エンドレス テープを蟬に貸してやる

騎馬戦のように肩くむぶどう棚

とつても人なつっこい丸い鼻

おぶっぱんだだけになったよ天こ盛り

燕が孵った娘も嫁にいく

倉吉市 野口節子

ジェラシーも祝儀袋に入れてある
定刻に日本のバスはやって来る
うわ言で五臓六腑をさらけ出す
嘘がさらさら別注の脳らしい
学舎を発つまちな羽の音
美しい嘘を包んで病母にあげ

加古川市 吐田公一

仏との距離を埋めゆく遍路笠
距離おいて初めて知った妻のよさ
年金をタップリもらうまで生きる
姑となる人がしつかり者と聞く
海山で友と遊んだ広い肩
飲んで食べて遊びゆつくり死ぬとする

富山市 酒井輝

子ども部屋無いかから育つ思い遣り
痛ければ痛いと言えはラクになる
迷子札じみた電話を持たされる
三世代それぞれ違う音で明け
小さいが服れ物じみた怖い国
亡き妻が通せんぼする庭の薔薇

鳥取市 岸本宏章

びつたりの役と金庫を持たされる
ローンみな返した肩が寂しがる
波に乗るこつを覚えて生き残る

結論を急いだ裏がきな臭い
切り札を握った顔が慌てない
自分史に誇るものなし小石積む

和歌山市 堀端三男

謹聴と一喝したくなる会議
女系三代若奥さんは大学出
数え唄の替え唄だけは覚えてる
逢う人によりほくろの位置を変えている
一升空けてほんの嗜む程度とは
七月十六日 僕に赤紙来た日です

和歌山市 福本英子

スパイスの一つは母か山椒の実
罪の無い花にもバラと犬ふぐり
草の根を分けても捜し出す絆
マンボウの泳ぎ見ている優越感
亀に餌をとられる鯉を飼っている
それ以来亀とは競わないことに

寝屋川市 太田とし子

織姫に献上したいバスポート
手火花がはねても笑えぬ一人っ子
宝くじそんなに私おきらいか
話好き種の多さの切西瓜
佗しくてワインは赤に替えてみる
おかげさま今日もキリンがヤッチャうまい

和歌山市 榎原公子

原色のままの記憶よ八月忌
特別な日が八月の真ん中に
三角形大事な人を滑らせる
チューハイの氷鳴らして君のこと
ナンキンの花 子を抱いてふくぶくし
ゴーギャンの交響曲と夏を往く

竹原市 石原淑子

学歴詐称他ソクラテスの妻
ときめきを蛍の乱舞小宇宙
人恋しカサブランカのひとりごと
石ころに遊ばれてます蟬しぐれ
学ばねば下りの坂が加速する
アドリブに笑いの種を台所

鳥取県 吉田孔美子

一分間 用を足すのに空白む
目的は踊りにあらず礼習う
実力はボーダーラインのど真ん中
人情も若い形のボランテИА
留守電は満タン母に術はない
姑はもうわたしの年で病んでいた

枚方市 栗林光夫

カラオケもピアスも無縁魚板打つ
赤ちゃんの目から瞳が溢れそう
恥ずかしや園児に席をゆずられて

ケイタイへ頭下げたり怒鳴ったり
昨日生き今日生き明日の敬老日
風鈴の風に七癖あるらしき

熊本県 高野宵草

種の危機になり殿様にされた朱鷺
叱言ごとと妻天敵の如く居る
鏡から昔の亡父に見つめられ
ああ運命僕の短所が遺伝した
てっぺんで尺取虫の風あたり
年金になってもランチタイム好き

下関市 石川侃流洞

転んだらおしまい杖を持ちなはれ
お汁粉で腹を割れとは無理でしょう
火葬場へ行くだけ金ピカ霊柩車
昨日の夢の続きを見たり酎の酔い
トキよりも鶴増やしたい政治
媚を売る野良猫がいて餌を置き

西宮市 林はつ絵

病院がみんなで自慢する先生
お遊びで乗るのではない車椅子
呻吟の頭の中でピカソの絵
リハビリの向こうに見えて来る出口
自我捨てたわたしの殻の行方とは
杖一本貰い病院後にする

時計草 六月の雨降りやまず

枚方市 森 本 節 子

犬と蛾の勝負 擬死で蛾の勝ちに

目覚めるとすっぱり消えた今の夢

鳩時計私の頭も遅れ気味

一匹の蠅 ストーカーのようつきまとう

沈みゆく鐘の音僧の読経のごと

芦屋市 黒 田 能 子

回収の出来ぬ蒔かれたままの種

波静か底の深さに気付かない

大勢の中でポツンと淋しい日

今はもう誰も私を叱らない

弱気になると待ってたように風邪を引く

風鈴をしまってから残暑なり

町田市 竹 内 紫 鏑

自分史は寡黙な亡父の言葉から

七夕祭りが華麗で夫婦はぐれたり

結晶模型 算額に似て師は奥に

吾輩は電池あるじは不眠症

骨粗鬆めくコンクリの剥げ

飾らぬ人の髪が白すぎ

鳥取県 山 本 正 光

親娘孫 共に暮らせてありがたし

何故揉める国旗国歌を騒ぐなど

大山の四季の姿に救われる

みぞおちのあたりが愚痴の耐えどころ

どっこいしょよっころしよとて気は達者

雑踏に忘れたこと捨てて来た

鳥取県 上 田 俊 路

二千年の歴史を秘めた妻木晩田（妻木晩田遺蹟 2句）

古代の謎解けるか四隅突出墓

報われぬ汗でも生きるため流す

光る汗男は今が旬である

やり直す夢へ乾杯してあげる

自己流に泳ぐ余生にあるゆとり

香川県 成 重 放 任

宴会の僕の座席はこの辺り

朗朗と詩情豊かな吟に酔い

今日も雨散髪にでも行こうかな

不景気もよそに競りあうお中元

住む世界違うが酒が縁をもち

豪邸を見て笑ってるカタツムリ

可児市 板 山 まみ子

我が家から二十四時間やつと宿（スイス旅行より 6句）

教会の鐘と駒鳥鳴いて朝

目覚めればアイガードしりそそり立つ

ミレーの画にいてるような農夫の手

五歳児の羊飼いく大通り

十代のようにはいしゃいで旅終る

熊本市 永田 俊子

身を焼いて乱舞す螢の恋かなし

近く舞う螢は亡夫かも知れぬ

生一瞬恋一瞬の螢の火

螢火万灯 彼岸明るい浄土かも

命あるものみな恋をして輪廻かな

熊本県 岩 切 康 子

朝市の七時は遅い品切れた

中元の訪問販売顔馴染み

その口に騙されまいぞお人好し

自業自得 自省苦しい日がつづく

何気なく話したくなる秋の風

唐津市 山 門 幸 夫

敗戦日灼きつく基地の茜雲

故郷恋し二〇〇万柱盆帰り

南溟もツンドラからも翔んで来い

車座で故郷恋うた俘虜の日々

この辺で時計を一寸止めたいな

唐津市 山 門 タ ミ

鯨店雑魚をみんな呑むかまえ

梅雨の鬱リフレッシュする美容院

経上げて若気の至り亡母に詫び

よろけても手を引く夫がいてくれる

通夜の客ずらり身内の名乗り合い

唐津市 田 口 虹 汀

一生に一度でつかい嘘をつく

夕立に濡れて学生楽しそう

七夕の笹を担いで孫が来る

これが梅雨 雨天 晴天 風七日

昂奮すると皆敵艦に見ゆるなり

唐津市 久 保 正 剣

貸し店舗の紙が破れている不況

旅好きの地図に未完の詩がある

修飾語ばかりが満ちる金屏風

シュレッダー女房の愚痴を刻み捨て

出世払い女将に深い恩がある

唐津市 井 上 勝 視

誰よりも自分を知っている不安

竿頭へ乾涸らびながらカタツムリ

シルバー産業ポックリ寺がハシリだろ

割を食う親父頑固になつてゆく

自画像はどう眺めても漫画だナ

唐津市 市 丸 晴 翠

薄氷の上に建つてるマイホーム

算盤で弾けぬ余命介護料

汚された地球を嘆く埴輪の目

ただいまと押せば留守電はしやぎ出す

二千年に向けて私も調整中

唐津市 仁部四郎

国難や例えば子らのパソコン化

国難や外食産業大はやり

国難に備え今日から七分掲ぎ

国難に備え歴史の本を買う

国難のシナリオ民は嗅ぎつける

唐津市 山口高明

含むとこあるのか何も仰有らず

難聴の老母へ地声が太くなる

雲の上歩いた気持ち園遊会

先約を反故に男の出世欲

国民の期待が重い雅子さま

唐津市 樋口輝夫

古希の今どうしているだら恋敵

天敵のように吞む友睨む妻

下校待つ犬に振舞うパンの耳

逃げ水を追うよに下五定まらず

耳元に可愛いチューの孫の息

唐津市 宗水笑

トンネルは曇り時々石でしょう

考えるだけで生きてるロダン像

中学の数学とんと歯が立たず

生涯を卑弥呼に惚れて老いた友

まやかしの強壮剤が売れている

北九州市 梅田宣司

酸欠の町に笑いの詩がない

行こか戻ろか七十九にも思案橋

郵便受け覗くある日の人嫌い

光陰の流れに妻の苦勞じわ

よく聞けば日本語だった娘の会話

高知市 北川竹萌

朝なきな雀の声に床あげる

朝顔の二輪嬉しいただの人

忘れずに今年の糸瓜ぶら下がる

手を伸ばし岸にとどかぬ五月闇

里菜園西瓜五本へ二十五

高知県 赤川菊野

一期一会モンゴロイドの好笑顔

自分への土産を買って旅を終え

目標があるから一人で生きられる

バスデー今年も亡夫と二人きり

嫁ぐ娘に川の深さも教えとく

松山市 丹下美津子

夫もきつとあきあきだろう五十年

窮地に立つと女不思議に知恵が湧く

無駄足でなかった今夜はいい話

束の間の安らぎ母のレモンティー

糊びんと父子浴衣の奴隷

松山市 宮尾 みのり

親逝つて巢立ちの子等も老いている
割り切れぬものを残して姑が逝く
七つの子親のカラスは強かった
高い木の上のカラスに馬鹿にされ
屈託なく育つてレモン丸齧り

今治市 越智 一水

国宝のない寺 牡丹で名が通り
御見舞へ病みには触れず花のこと
大空を信じて松の芯はのび
サングラス掛け老妻よどこへ行く
夏草や戦火を偲び友偲ぶ

今治市 野村 京子

なやみあり酸っぱい今日の胡瓜もみ
妻の座に甘えアサリが砂を吐く
金魚がゆらり終着駅がない
白い雲ひらり揚羽が去つてゆく
夏空へ麦藁帽子飛びなさい

香川県 工藤 吟笑

号笛も高らか瀬戸のミカン船
野仏の笑顔に曳かれ寺詣り
もう無理は出来ぬと心電図が動く
はるばると天山越えて絹の道
竹竿で鯨を狙う太公望

香川県 木村 あきら

北辺の守り山を越え^た谿を越え（万里の長城）
下り坂ブレーキのない縄電車
飽食が茶漬の方へ箸を向け
生き抜こう水をおカゴで汲んででも
断崖の松 健気さを見せて立つ

香川県 神保 坊太郎

老人力出せば冷や水だと言われ
よい嫁だ老い疎外せず踏み込まず
八十すぎて私心体不満足
神童のどこで狂いしホームレス
鬼が笑うあすの約束いたしかね

香川県 川崎 ひかり

無口多弁娘に恋人のいる気配
昼食の用意して行く母の旅
望まれぬ草も花咲き実を結ぶ
たかが犬の死 絶対誰にも言わせない
不況風私の十指まだ動く

香川県 池内 かおり

詩人にはなれずじまいのお母さん
キャベツ選る夫の手つきが頼もしい
美しい人にも同じ座りだこ
大根の太過ぎるのも疑わし
青春が埃かぶっている詩集

柳井市 弘津柳慶

賞はなし罰なら掃く程ありました
退職のそれから妻の意のままに
孫達の新語へ返事とまどつて
五七五もうろくせずに指を折り
処方箋書き書きただの風邪ですネ

美祢市 安平次 弘道

五時からの男やっぱり首になり
決断するには腹が減っていた
雑兵の血筋か手足大きすぎ
途中下車する気にさせたある事件
個性的な表現ですと世辞を言い

広島市 森田文

きりのいいところで放す子も孫も
ウインクを返して空気やわらかい
流された橋のあたりへ虹が立つ
生かされて蜻蛉も蜘蛛もいとおしい
また雨か疲労の色が増してくる

竹原市 三宅不朽

神棚が仏壇がある遠花火
よく笑いよく泣きたやさない灯
鳩尾にネクタイ尖りゆれやまぬ
シャガールがすてき携帯よく喋り
笑みそうでけっして笑わぬ鉢金魚

竹原市 森井菁居

羅漢さんと握手癒しの旅終わる
にんげんは非力豪雨へ佇ちつくす
はるばると我が家を頼って来たつばめ
リフレッシュしてマイペース取り戻す
分からないままにオペラへ手をたたき

竹原市 岩本笑子

時計台の下 裕次郎いませんか
枝豆とキュウリで夏が通りすぎ
リンとしてアユ一匹が皿の上
いつか素足に泣くな泣くなと波の音
恋百句野バラの知ったことなし

竹原市 時広一路

掌で受ければ雨の色が消え
野菜好きなのは分かるがなあ虫よ
昼の月お前も手持ち無沙汰だな
お陽様が島から昇り瀬戸が明け
そして夏みどりますます光り出す

竹原市 古谷節夫

四捨五入プラス思考の四で生き
スランプを知らない亡父の鎌も錆び
居酒屋の話題がうまい酒にする
銀行のバランスシートが許せない
携帯へうれしいニュース飛んで来る

広島県 藤解静風

自立する蜘蛛の勇気が風に乗る
子を産んだ女に勝てる筈がない
酒好きに一番うまいこぼれ酒
遍路みち道は寺なり寺は道
終点に据えたい石が見つからぬ

岡山市 井上柳五郎

肩書きも仮面も外す定退後
老鶯のなめらかに啼く青葉道
梅雨冷えに老父セーターまだ残り
焦らない見てろ今にが遠くなり
あちこちと不調をかこつ老い仲間

倉敷市 田辺灸六

柳恩に捧ぐ涙の梅雨しとど（悼 本田恵二朗先生）
後押して押されて夫婦共稼ぎ
差し上げて孫よ望みは高く持て
人工雨そんなに自然甘くない
介護役頼むとみんな知らん顔

倉敷市 井上富子

他人の飯食って磨いてきた大器
年配の茶筌シツクな泡を点て
引出しを閉じる煙草を押し込んで
お銚子が出ると陽気になるカモメ
紙おむつたつぷり買って看るつもり

悼 本田恵二朗師

岡山県 江口有一朗

おん礼に参上病床の師に對す
話し掛けて下さる言葉にならぬ声
川柳とはつきり一言胸を打つ
想い足らぬ悔いを残して宅を辞す
一筋の道歩まれて老師逝く

岡山県 二宗吟平

電話ぐらい確かめてきな休み札
戸締りをすれば車の空気抜き
嫌がらせして知らぬ振り民主主義
民主主義大人子供になりさがり
同じ釜食べたOBまた消える

岡山県 富坂志重

曾孫弾くピアノにあわす雨の歌
腹の虫吐くの涙ボロボロと
善人を演じる仮面ひび割れる
お茶の間で針を持つのは老母だけ
ごみも私もやがてしずかに土になる

岡山県 荻野 鮫虎狼

真っ直ぐに雑草は伸び古稀近い
晩酌の後一本を頼む顔
番犬と話がしたい梅雨の雨
凡人の遺伝が続く国平和
軍配は猿に揚がっているコント

岡山県 福原悦子

飾らない私はわたしなりの彩
立派だな百歳近い夫婦箸
永遠の化粧に紅がまだ足らぬ
幸せの遠い時間を掃きよせる
ためらいの隙間に福が逃げそうだ

岡山県 山本玉恵

鉛筆に急ぎ立てられて句に正座
つまりたあの日の石と語り合う
弥陀の掌にのり切るまでの善を積む
まんだらの川の流れに添う命
手つかずの明日へはずむ毯を抱く

松江市 川本 畔

握った言葉切り出せぬまま陽は西に
足許をすくわれ叫びそうになる
ずぶ濡れになって勇気が湧いてくる
ぬれながら走るあなたへの返事
グラスから這いあがろうとする記憶

松江市 佐野木 みえ

梅雨最中満ち足りて今梅漬ける
清張の本にひかれて夜が更ける
ふつくと豆を煮ながら句を作る
民芸の店でインド綿の試着する
うとうととして風呂の湯を溢れさせ

松江市 安食友子

蔵の壁化粧したそう梅雨最中
塵が舞う群がるようにあどけない
想い込め化粧している片思い
陽が射すと茶飲み友達現れる
不可解な気分で胡瓜をちょん切る

松江市 浦辺 静江

忙しい時に限って長電話
気分転換しよう大きく深呼吸吸
手ついでにあれもこれもと整理する
梅雨晴れ間老いも若きもサーフィン
酒に飲まれとかく無口にされる人

出雲市 竹 治 ちかし

善人の顔で眺めている夕陽
平等に育ててみても出る違い
制服は制服なりにものを言い
自己主張影も大きくなってくる
策士かも知れぬ遊んでばかり見せ

出雲市 吉 岡 きみえ

ライバルの足の長さに負けました
月下美人月の雫で化粧する
ロックした扉を月がのぞきみる
一期一会 風に感謝の掌を合わす
しばらくは尼僧になって仏守り

出雲市 富田蘭水

柱時計私自身のネジ巻けと

カレンダーなぜあせるのか見詰めてる

X線余命まだまだありますか

ミニトマト少子化しきりに嘆いてる

幸せにするかワインのグラス呷え

出雲市 園山多賀子

悲喜劇の混淆それも人生か

偽善者にならないように蜜飼う

雨の鬱夫婦の対話噛み合わず

天を指しうつむきません葱坊主

行間に女の愚痴がうずくまる

出雲市 小玉満江

クレーン車で大邸宅の庭造り

風呂上がり風を待ってる洗い髪

マンネリになって番茶がなまぬるい

尾瀬沼に熊まかり出て水芭蕉

さくらんぼ十個かぞえて口にする

出雲市 久谷まこと

風流のお点前月も少し欠け

ぬるま湯に浸っていては目もかすむ

それぞれの愚痴が溜った瓶の底

思う事勝手に言える自由席

言いすぎてしつくりしない酒の味

出雲市 小白金房子

つい本音箸からぼろり転げ出る

来るひ孫老いの楽しみ浴衣縫う

宵蛭一匹宿る窓辺の灯

恩情に生きる墓前の花手桶

止り木で男同士のうまい酒

出雲市 岸桂子

捨てられぬ過去を秘めてる欠け茶碗

ライバルの塩に黙って甘えよう

故郷に素足で歩く道がある

最近の森は笑った事がない

夕映えが手からこぼれて梅漬ける

出雲市 石倉芙佐子

満たされて朱よりも赫い彼岸花

風祭りとくに離れていた心

さらさらと書く砂文字に秋近し

君が代日の丸散った命は還らない

スクリーンの愛にも似てる雨後の橋

島根県 小砂白汀

世の中がどうであろうと髭が伸び

竿竹と選挙のよび声からみ合い

梅雨が来る屋根屋が屋根を叩くから

顔を拭く監督あれがサインかも

こんな時ちよきんちよきんと言われても

島根県

堀江正朗

ひとときを苦勞忘れているジョッキ

極楽か地獄かもしも見えたなら

力瘤もう歳ですと笑いそう

爽やかな夜風に秋よう来たか

いい事も寂しさも聞く耳いとし

島根県

堀江芳子

元氣出しなはれ師の声耳元に

正座して亡父の写真に道を聞く

在りし日と言う語の寂し姉の忌よ

庭に來たトンボ宝のよう見つめ

どの孫と背をくらべても爺の負け

島根県

松本文子

美しい思い出があり生きられる

拾われた花からそよ風が生れ

また巡り合えるか星の王子さま

ご褒美のように夕焼美しい

面倒になりそう判を押しながら

島根県

伊藤寿美

夏風邪の孫にリングを煮て冷やす

カレンダーの魁夷の青を見る計報

携帯をかける振りして席譲る

土石流森の呻きが流れ出る

車座の法話 蓮如の人間味

島根県

榊原秀子

トロッコ列車誘い誘われいい旅路

延命の水いただきに途中下車

食べごろの枇杷するするとむける午後

宵待草いつもの土手に咲いたかな

舞茸の調理法きく梅雨晴れ間

島根県

西村早苗

蟬が聞えるきのうも今日も秋

ビヤホールに誘いあれ以後のお話

平行線のあちらも立派なご意見だ

虫が鳴く二坪の庭の草刈らず

どこ迄の青空クレオン短くて

島根県

森茂美

制服の少女が駆ける風の音

世話やいてやがてお世話になるわたし

次男坊はずんで見せる通信簿

鶯が美声あげたりばやいたり

子育ての終えてつばくろもの静か

鳥取市

石上悦子

心配をよそにふとってボチ戻る

降りそうとくせ毛の娘予報する

お仲間が轢かれていたよ雀さん

句会用おやつの試作しこしこと

貝ボタン母の話をしたくなる

鳥取市 岸 本 孝 子

先頭にびったりついていて強み

家計簿がびったり合つてへそくれず

決断がついたらしいなよく眠る

米作り昔話にしてならぬ

ほんとうに悲しいときは出ぬ涙

鳥取市 倉 益 一 瑤

きんとん雲呼びたいような弾む日だ

思春期が等身大の帆を揚げる

聖書には許してやれと書いてある

峠から敵もわたしも喘いでる

命燃やした落鮎にある誇り

鳥取市 植 田 一 京

飛行雲眺め平和を思う夏

万緑に雲白くして歌が出る

悟るにはもう少し遊び足りぬよう

電話ではあまり怒れず赦しちゃう

負けん気の口紅あかく赤く塗り

鳥取市 近 藤 佳 子

片減りの靴がゆっくり行けという

鈍行が趣味ですねんと老夫婦

傘ひとつ買うにも女夢をあむ

鳴き砂の語を聞いて波は去り

テトラポット一期一会の波たちと

鳥取市 美 田 旋 風

真つ直ぐな道にも地雷埋めてある

不況などどこ吹く風かゴミの山

六法をかじるうかうか喋れない

頂上に立つと刺客が忍び寄る

遅咲きの花がわが家に根をおろす

鳥取市 西 村 黙 光

暇潰しの畑に根気を培われ

スプリングラー畑くるくる走馬灯

作物の審査野鳥が買つて出る

取り立ての野菜園応えたまらない

実を結び野鳥奏でる祝い唄

鳥取市 杉 本 孝 男

手遅れに外科だ内科と揉めている

一発に沈む相手と見た誤算

卒業はしたが続いて脛かじり

へそくりが貯まると旅へ出たくなり

逢いたがる親にちつとも会いに来ぬ

鳥取市 武 田 帆 雀

人の疵掬って食べる銀の匙

だあれにも渡さぬボスの尻尾持ち

音立てずたくあんを噛む禅修行

盤中を隅々読んで嫌な人

口にくわえて両手に持つて猿が逃げ

鳥取市 春木圭一郎

妻の手で安サラリーが生きてくる
子ら巢立ち妻とテニスの球を追う
何よりも妻の管理はむずかしい
手抜きでも妻の弁当美味だった
俺のため無休の妻よりがとう

鳥取市 両川洋々

陰口へ罪な人差し指である
消去法で行くとやっぱり僕が消え
遺言は故郷の青い空に書く
成仏をするまで仮面外せない
今度こそ恋の残り火だけは消す

鳥取市 岩原喬水

轟沈の渦を夢中で泳がされ
手の内は見せぬ女の罌に落ち
隠し子にいま一度遺書書き直す
厚化粧落すと別の顔になる
定退で青空肩の荷を降ろす

鳥取市 坂田和歌子

折ってから花の重さを知らされる
十の指善に尽くすは僅かなり
油断してショートケーキで喋りだす
清楚なるすずらんが持つ毒すこし
文字のない絵本にニコリ自閉症

鳥取市 福田登美

梅雨空の紫陽花はみ出す青葉道
夏帽子ぴったり似合う蟬しぐれ
嫁姑程よい距離を身につける
貧乏の中にも見栄が生きている
何事もない幸せの有難さ

鳥取市 富山檳榔樹

水面下絡む水藻の怖さ知る
朝の蜘蛛好い事きつと来る予感
若き日の買った辛苦に花開く
朝もやの可愛い野花紅が澄む
曙に梢の花が燦と映え

米子市 政岡日枝子

向日葵の高さに妥協点がない
姫ひまわりがサイダー壺に挿してある
敵陣を一度も踏んでない戦車
まだ欲があつて金魚の眼は動く
金魚の死 夏をはやばや終わらせる

米子市 鷺見正子

七色の涙の雨が降るこの世
眠る前楽しい事を考える
通勤が楽しい五十五歳からの職
月光へピアノが架ける縄梯子
宇宙葬したいお寺の次男坊

米子市 光井玲子

ひまわりのような隣のお嫁さん
炎天のお姫さまだなひまわりよ
緑日の金魚は躁になっている
機関車に青春かけた父も老い
ひとりよがりになってきた母の笛

米子市 林瑞枝

蘭鑄の泳ぐ医局のコンピューター
落葉松の彩は真摯な少年期
悩みひとつ笑い飛ばしたのは親友
半跏思惟ひとり謎解きやっている
曇天をはじいて駅のジャンプ傘

米子市 茂理高代

一周忌狂いたい程愛おしい
待つて見る待つても無駄と知りながら
待ちわびております蔦が延びるよに
悲しみのない場所探し歩いてる
人生が変る汽車なら飛びのろう

米子市 石垣花子

稜線が見えた頃から気力萎え
雨の音聞いて安らぐ梅雨の紫陽花
ゆつたりとひとひと日花愛で車椅子
花回廊花の盛りの過ぎたのも
大山と杉山借景花回廊

米子市 木村富美子

ありすぎてもなくても困る自家用車
殿様のように車をやり過ぐす
車には最後の時も世話になる
城跡は昔を偲ぶ花の宴
城内は味方ばかりで大の字に

米子市 澤田千春

泣きたいがほほ笑んでいる姫だるま
宇宙人 鳴り物入りで降ってきた
オルゴールの曲が聞えるごみ袋
屋外劇 星も仲間のパフォーマン
ス
クレヨン町の町からとばそ夢風船

米子市 青戸田鶴

どこから来てどこへ行くのか青いさぎ
船のかたちで東京湾の海ぼたる
桃の木の下で子供になっている
姉のお下がり着て温もりの中にいる
菩提寺の鐘いつもより近く聞く

米子市 中井ゆき

ひまわりが落日送る一斉に
チャポチャポと金魚夢売の旅に出る
ばあちゃんが楽にと決めたフールドア
花達も好きな住所を主張する
蘭虫の尾ひれにいやす夏のウツ

米子市 木村 春枝

風の声風鈴に聞き朝の膳

時どきの兄の仕草に亡父がいる

ひまわりの弱音は聞いた事がない

声かけたこわい顔とも連れとなり

霞草いやな花でも共に揺れ

米子市 門脇 晶子

ふところに終着駅をもっている

犬ざらい犬があとからついてくる

金魚とも猫とも話す日本語で

うわさ話は浅いところから流れ出し

四つ角で車が餌を狙ってる

倉吉市 山本 玲子

しゃっくりを不意の脅しに呑み込んだ

太陽が超ビキニ見て真っ赤っか

総入歯これが最後の永久歯

もう泣かぬブラス志向に切り替えた

招待の酒には酔った振りもいる

倉吉市 米田 幸子

小ちゃくても愛をぎっしり盛った皿

夢にまで見た制服に手を通す

一徹で情けに脆い父の貨車

大鉦を振るう役目を買うてでる

玉手箱開けた続きを子がせがむ

倉吉市 山中 康子

老木を労りながら明日の風

すずらんへ私の過去がうきばりに

不器用も初々しさがさまになり

荷を下ろす酒ほろ苦くほろ甘い

仏心の夫に恐れるものはない

倉吉市 松本 よしえ

毛並のいい割にお行儀いまひとつ

ナンセンスまたテンションを上げ過ぎる

仰向けは視野いっぱいに青い空

妹は優しいすぐに涙ぐむ

あご髭が立派毎朝リンスする

倉吉市 淡路 ゆり子

雲海の幽玄にそそのかされる

どうせとは生きる努力を否定する

よろよろと檣山登る罪背負い

勇み足昨日のことは過去のこと

溢れる品に押し潰される子供達

倉吉市 最上 和枝

よれよれのタオルお世話になりました

梅雨明けのカンナの赤に負けそうだ

無に還り黒梓の笑み残るだけ

アルバムに恋を競った顔がある

恋仇の笑顔に軽い胸騒ぎ

鳥取県 新家 完司

春句会ふつと目が合う佳人あり
離婚するほどのイライラではないが
両耳が同時に遠くなってきた
梅雨寒やぬるめの爛で人を恋う
いただいた句集忍耐強く読む

鳥取県 土橋 螢

爺さんが二度もおんなじことをいう
ありがとう二度ある事は三度ある
正露丸一粒癌じゃあないらしい
緑陰に忘れた恋のものがたり
どうせ止む雨だ辛抱してあげる

鳥取県 乾 隆風

拾い読みして本屋からバスを待つ
横にふる首を数えて策を練る
自己批判しといて胡麻をする男
眷族として仏縁を結ぶなり
満遍なく照らす光明をいただく

鳥取県 原 みさを

癌告知されよく笑う妻でいる
特養の母四次元を行き来する
霊標にわたしの場所が空けてある
紹の女びつたりそばに来てすわる
キスのうまい女 啄木の女なり

鳥取県 橋本 多哥由

羨望が嫉妬となつてひた走る
歩け歩け風と大地と語り合う
欲捨てて生きて楽しいくらいあり
耳よりな話に乗って銘茶のむ
花は花やさしく心なごませる

鳥取県 さえき やえ

生きた目で仕事するよになった子ら
売れている店の笑顔はすばらしい
好きだった御簾を早目にかけておく
辻で別れた遠い昔の花をつむ
人にまだ貸す手があつて幸せに

鳥取県 石谷 美恵子

辞書にない言葉を生んでゆく若さ
ゲームセット熱い口惜しい涙拭く
末席は下戸と音痴で占めている
臆病な帆柱へ帆が焦れている
両の眉同じに描けたことがない

鳥取県 土橋 はるお

爺さんの嫁にきたんじゃありません
二回目の結婚式だそわづくな
そわづくと浮気がばれるかも知れぬ
帆をかけた自転車に乗り居酒屋へ
我が輩は暑い君は涼しいか

鳥取県 林 露 杖

万緑の杜にはためく高嶺
生きんとす足手纏いにならぬよう
饒舌と寡黙が醸す夫婦仲
豆ばらばら鳩と戯れ列車待ち
恋を追う男の胸が薄過ぎる

鳥取県 土 橋 睦 子

山盛りの苺に弾む長ばなし
紫陽花に角出し遊ぶかたつむり
仏飯をいただく姑が呆けてくる
花も実も爆ぜて答を出している
生き上手柰榴の花も落下する

鳥取県 岩 崎 みさ江

群がつて咲いているのは小さい花
もんしろ蝶の眼に光る風が視え
庭隅に葱一群れのある安堵
薄墨で描く人生の余白かな
若鮎のごとく流れに逆らいし

鳥取県 塔 寛 子

ほどほどに惚けて我が家の温い日々
帆柱を支えた自負で生きている
富弘の詩画集開く風邪の床
国歌と国旗急に国中ふりまわす
ピアノ曲流れ絵手紙嫁と描く

鳥取県 西 川 和 子

仰向いて青い空気の中にいる
打てば響く三男坊の知恵に負け
雑魚の声に応えてくれるから選ぶ
一心不乱譚言にまで言っている
この海に錨沈めて動じない

鳥取県 田 村 きみ子

父の日を忘れていない二輪草
私をよく笑わせるのはテレビ
ミニトマトこぼれるように熟れて愛
味噌汁とパンさえあれば足りる朝
いくさ始まる前だ桜を見ておこう

鳥取県 鈴 木 公 弘

夏が来て老いたとおもう平泳ぎ
ひと筋に走って視野が狭くなり
ときどきは背なを映して見る鏡
毎日が小首かしげたまま消える
健やかに生き抜く朝の水を飲む

鳥取県 乾 喜 与 志

蝶々もおいしいように蕎麦の花
散歩するお連れの方はトイレ中
いつまでも仲よく君と僕のだ
錨曳きながら生きてる御老人
頭が軽うなり立腹を忘れる

鳥取県 西原 艶子

一汁三菜 命の泉涸らさない
青じその香に箸すすむ姑の膳
見つめれば姑妖怪に見えてくる
老いてまだ明治生れにある気骨
葛藤の月日卒寿へ遠くなる

鳥取県 太田 幸枝

手作りの皿をお膳の真ん中に
海の荒れ下ろす錨の時を待つ
選挙戦古い先祖を掘り起す
口止めの酒だたっぷり飲んでやる
ときどきは女でいたい靴を買う

鳥取県 石尾 かつ乃

夕焼けがきれいと言いか突然に
先生も好き絵も好きと言う仲間
チャージングな彼女が好きで踊りの輪
心配でかけた電話の長話
欠点をさらけ作戦しています

鳥取県 羽津川 公乃

ジャガ芋とわたし似たもの同士だな
カイロ迄貼って流れに鮎を追う
記憶力確かめながらプッシュホン
視力落ち迂闊に書けぬ趣味読書
思い出し笑いに夫のプロポーズ

鳥取県 奥谷 彩子

グーチョコキパー両掌に幸を溢れさせ
忘れ上手妻の笑顔はさわやかで
知恵の輪のほどけぬままにフルムーン
潮の流れ昨日の夢を追いかける
幸せ芝居いつか緞帳降ろさねば

鳥取県 国森 武子

私の此の脳消毒してみたい
海の子が書いた錨は生きている
錨より重たいものと生きてゆく
御馳走をのせるの惜しいいい模様
才ありて才に溺れる人惜しく

鳥取県 谷口 次男

野良犬はよろよろ歩き隙がない
よろよろと見せては男惑わせる
考えるロダンの像に似て非なり
日本の母なる海が悲鳴上げ
Xはコンピューターも分らない

鳥取県 近藤 春恵

女の城鍋も茶碗も光ってる
助け舟風が渡してくれた薬
大きくて広くて温い母の胸
母からの教えは今も生きている
青天井だから気ままな西東

鳥取県 黒田くに子

セクハラを出来心ですでは困り
空瓶がごろごろ眠くなつてゆく
しきたりの軋む鬼瓦の真下
暇だから休まなかった皆勤賞
天高し金さえあればなおよろし

神戸市 中村 ゆきをを

幸せはあなたが気づかぬだけのこと
構うと怒り放つとくと拗ねる夫
人の好きな人集まりて昼の酒
父の忌やマンドリン弾く父写り
三流を出て一流の嫁もらい

神戸市 山口 美穂

バーゲンセールここらで妥協試着室
路地裏で素敵なゲーディングに会い
秋の色映した水の声をきく
お留守番犬は不服な顔をする
絵てがみに添えた一言がきらり

尼崎市 春城 武庫坊

少々の毒は時どき食べてみる
風鈴が部屋の空気を入れかえる
脱いだ靴心そのまま表われる
推理作家の机に謎が積んである
祇園ばやし吸って京都は暑くなる

尼崎市 春城 年代

バカにしたナイフで切れた指の先
梅雨小康洗濯物のだんだんども
凌霄かずらは縋る樹を知っている
うるさいと思う日もありピアノ
梅雨のどん底くちなしの花うなだれる

尼崎市 長浜 澄子

まなうらに故郷があるハーモニカ
しなやかに命継ぎたし沙羅の花
守護神を信じています蒼い天
眉を描きショートコントを演じている
いざと言う覚悟はしてる花ざくろ

伊丹市 山崎 君子

アルバムと乙女にかえるひとときよ
友いかが梨の礫になったふみ
再会^{リサ}旅の言葉の懐かしさ
蟬鳴いて夏は庭からやってくる
すれ違い古都の匂いよ蛇の目傘

伊丹市 小熊 江美

底ぬけに明るい嫁で可愛くて
夜なか吸う睡眠剤になるタバコ
用意した言葉が言えぬ片想い
大阪の夜景見とれた観覧車
七夕に願いは一つ健康よ

西宮市 奥田 みつ子

夏が来て座る人なき藤の椅子
はじらいのフツとこぼれる肩の線
ベランダにしのぶもじずり可憐なり
少年よ走れつまずき転ぶとも
秋立ちぬ時間を止める術がない

西宮市 西口 いわゑ

露草を見つけてはつとする散歩
吸取紙多量にほしい今日の鬱
用意ドンたら踏む蟻進む蟻
八月の空へムンクの絵のように
クレーン車の威力ばんやり見えています

西宮市 牧 淵 富喜子

はつたいこ添えられている餅を買う
目移りの果てTシャツとうまが合い
アンケート一事が万事遅過ぎる
短冊の願いはもはや祈りのみ
家ごとに紫陽花のある山のバス

西宮市 緒 方 美津子

砂山を崩すばかりの孫といふ
平泳ぎだけで生きたい折り返し
子だくさん草のびられず母の墓
友の訃に急に気弱な夏椿
亡母さんの下駄に急かされ盆踊り

西宮市 秋 元 てる

何時よりを余生と言うぞ誕生日
傘寿なり肩の力は抜きました
出る幕が無いと拗ねてる草むしり
大袈裟に痛い痛い子に還り
母さんはこの世で一人と持ち上げる

西宮市 山 本 義 子

旅がえりタクシーチップ少しあげ
尼寺でこころ安まる雨やどり
指一本のけがで昼食抜いておく
工事現場 鹿兒島弁がよく聞こえ
独り居は最大のわがままらしい

西宮市 亀 岡 哲 子

妖精のわたし舞い込むガレの壺
ガレ展の夜中花揺れ蜻蛉とぶ
美人湯の効果確認する鏡
帰り道やつと山あり信濃旅
遊び過ぎた微熱覚られないように

西宮市 井 上 信 子

往々に弱気が当てる宝くじ
世の中の怖さを知らぬ泳ぎっぷり
死ねません宇宙遊泳するまでは
馬車馬の如く働き母は逝く
競馬好きやたらとたらのつく話

西宮市 井上松煙

梅雨しとど友の訃悼むクラス会

人波を犬かきながら溺れずに

たわいない話に笑うだけの酒

襖貼り自分の下手は気にならず

リストラがエリートもつい弱気にし

西宮市 菊池トミエ

ゴミ回収太ったカラス屋根で見る

繋かれた犬も欠伸の梅雨に入る

すばらしい出会いであつた足袋の白

ボタン押すだけの文化にベンが錆び

部屋中にレール夢中で走らせる

西宮市 刈田泰司

美人ではないが笑うと品がある

美人妻雑な使いはさせられぬ

美人でも長生きさせてもらてます

平均の歩幅で終の道までも

美人ではないから笑顔絶やさない

宝塚市 黒台伊佐武

平凡で何にも無いが平和です

同窓がまた一人逝く梅雨の鬱

父の日の祝を受けて大散財

久潤を酒一献で吹き飛ばす

好奇心古稀迎えても尚盛ん

川西市 松本ただし

背番号十桁 名刺に書き込むか

虫食わぬ野菜を人が食べている

戒名も名前も選べない自分

老人をリストラしたい医療代

タクタクと余白を埋める字を探す

相生市 中塚礎石

ど忘れを平気でおれる果報者

騙されているとは知らず杯を受け

そのうちに余白は夢を埋めにいく

友達のまんまで今日も喫茶店

三世代満員になる縄電車

姫路市 古川奮水

看護の手透き間は置かぬ二十四時

病床の寝返り乳児より劣る

雨の日に始まり雨の日に終る

締切りが迫り空白加速する

皆揃いゆっくり弾む五目飯

大阪市 西出楓楽

旅艱亡夫の写真しのばせる

今年また買い過ぎましたかもめーる

浮世とや猫派犬派がいて楽し

一歳の孫に遊んでもらってる

美しい人で生活感がない

大阪市 松尾柳右子

帆船も漕ぎ出したいよ瓶の口
二人して船旅しよう停年後
書かないが手紙貰うは嬉しいよ
幼児からジグソーパズルの手紙来る
路地裏に猫が集会する夜道

大阪市 北勝美

君が代に素直が欲しい法制化
無意識に腰に手の行く八十路生き
老いの贅 水蜜桃を一個買つ
米寿生きビール的美味さ知らぬまま
洗面器に顔つけ朝の生き心地

大阪市 河井庸佑

細やかな心遣いに広がる輪
真の友ならばの苦言聞く心
注意してくれる真意を噛みしめる
親月の話まとめて飲み仲間
糸瓜忌へことさら句集など広げ

大阪市 本間満津子

八十路 指の先まで有る歴史
お茶漬二ぜんおいしい朝の正常値
言わんでもええのに舌が回り過ぎ
やさしさに溺れ流れてしまえ
虹の色変らぬうちに暇乞い

大阪市 津守柳伸

船渡御の活気落ち合う場所決めて
積ん読の定位置にある広辞苑
湯島に歴代名士偲ぶ石
草津の湯 西の河原の蒸し饅頭
夕暮れの鬼押し出しをつつ走る

大阪市 榊本落児

どぜう屋ののれんに哀愁よみがえる
釧路原野ニホイが限りなくねまる
恋のプリズム初めはきれいに映ります
横っちょにかぶって帽子たしかめる
死ぬなんて夢想だにせず生きている

大阪市 小林周信

寂しいと人もメダカも群れ泳ぐ
奥歯が抜けると弱気になってくる
遠泳の果てのゴールは彼岸だな
適齢期過ぎて弱気は親ばかり
月の出を待つて人魚が泳ぎだす

大阪市 大塚節子

朝おそいうちの植木はもらい水
けんたいで仏の供養と飲んでいる
老 若の松の名並ぶ古い町（今は西天満）
亡母の指思ひ出しつつ水菜
幼馴染くせで分った遠い席

大阪市 神夏磯典子

真ん中は目立ちたがりに空けてある

売れ残る鮎は値引きの札つけぬ

遠出する靴にクリームたっぷりと

人形になって諍いなくなつた

濁り水の中で目だたず生きている

大阪市 辻川慶子

紫陽花も菖蒲も雨に濃むらさき

ボンボンと西瓜の味を説く八百屋

約束の日が近づいた蟬の声

小一も少し泳げたプール焼け

平凡に生きて気負いのない暮し

大阪市 渡部さと美

若者に揉まれ喜ぶ祭神

雑木山せせらぎ歩く右ひだり

おしゃべりの盛んなあたり手薄です

けなしてた老父がはまったテレゲーム

夕風と遊ぶ草の群れが待つ

大阪市 町田達子

土曜の夜が賑わうトワイライト コンサート(三室戸寺)

小雨の庭暗がりにひよつと山頭火

油彩画の魅力奈良の小半日(遠藤剛熙展)

神秘さもふつと象牙の彫刻展

老いも若きも立読みずきが居る本屋

大阪市 杉澤汀

鈍行の男に終の駅で会う

酌み交わし諭すつもりの愚痴話

忸怩たる思いであると胸をはる

暮らしの節目にネクタイの白と黒

迷子呼ぶマイク太鼓と笛の間

大阪市 稲本凡子

よく進む時計に従いて行きにくい

明日の為目覚まし時計二つ置く

齢に合う服が私に似合わない

鍋五つみんな焦がした跡がある

愛を編む二人の糸はもつれない(孫結婚)

大阪市 川原章久

雨続きお年が逝って子が生れ

この辺に覗きからくり出てたとこ

大騒ぎ渡って帰っただけの橋

舌だけのまだぜいたくが喜寿余徳

甘い水探して歩く蝸牛

大阪市 板東倫子

団塊の世代はいつも傍観者

税務署と破れかぶれで喧嘩する

人里を蛇熊猿が散歩する

原罪の十字架背負うている医療

髪すこし明るく染めて喜寿の宴

大阪市 井上白峰

愛憎の狭間で揺れる心の灯
ロスタイム何時まで続く老いの坂
均等法妻が舵取る夫婦船
足して二で割れば男女の歩が揃う
方円に従う水が岩砕く

大阪市 川久保睦子

長雨に意気揚場の花菖蒲
獣道抜けて大きな海に出る
風のうた聞きに行きたや北の国
一周忌虹色一つ塗りました
夏帽子やたら気になるイヤリング

大阪市 清水絹子

席ゆずる夫婦を寡婦は見とれてる
子だくさんそれぞれが選る箸の色
先生の先生へ出す手紙の字
ゴキブリにここまで来いと笑われる
スーパールの葱に八百屋へ回り道

大阪市 宮本欣史子

自立とは終着駅のない孤独
我が影にゲンコツ溜めて朝がえり
分別をつけた野獣よ何処へ行く
助太刀はすべて善意と思いたし
しあわせを誰にもあげず一人じめ

大阪市 清水利武

夏祭り浪花の空を真っ赤にし
年をとり子供見る目が変つてる
可愛さは魚見る子の笑い顔
搗きたての餅より柔い曾孫の手
阿波踊り明石大橋一跨ぎ

大阪市 玉置英子

釣竿に凝っているほど釣ってこず
散りながら咲いて人待つ萩の花
桃ジュース家で使わぬストローで
一日は命日丸める草団子
呼出しが扇面読んでるように

大阪市 奥田良子

一つ家に表札二つ老女一人
ひとまわり小さくなつて半夏生
アカシヤの匂う隣の診療所
病む身には働き蜂が羨まし
バーゲンを又のぞいてる更衣

堺市 桑原道夫

たこ焼の空洞味わいながら食う
おいと呼べば西瓜応えてくれそう
電柱を抜いて帰ろうかと思う
ムヒを塗る順位でもめる団欒や
寝転んで家具の脇など見ていたり

堺市 宮本 かりん

やすらぎがほしいと花が咲いている

大雨を降らせて誤解とけました

一人旅に方向音痴あこがれる

炎天にわたしの影が転がった

どうしても越せぬわたしの前の影

堺市 神原 文

身のうちに人と神とが住んでおり

仲の良いふたりへ神も嫉妬する

とんとんと昔へノック気は逸り

裏側に炎隠している日記

心の糸さわやかに揺れ五十年

堺市 志田 千代

I M Y M Eすべて私の意のままだ

このごろは私の好きな赤烏帽子

弱気な日弱気な友へ電話する

幸不幸 姑にはなれない私

川の字に寝る猫いつも私寄り

堺市 柿花 紀美女

見守ってやる青い実の熟れるまで

君が代を素直に聞ける老いの年

寡婦の意地貫き子等を皆巣立て

老いに合う仕事こなし仕舞い風呂

ベテランの主婦で手抜きがうまくな

高石市 浅野 房子

先ず乾杯よろこびごとく無いけれど

自分はさて人の矛盾はすぐ気付く

ステーキが旨い生きててよかったよ

名水を買ってコーヒー入れている

探し物やっと見付けたのは日暮れ

和泉市 西岡 洛醉

頑なに両の拳を振って見る

老いの背をぼそぼそぼそと日向ぼこ

人間が好きで仕事の靴を履く

影法師一足飛びに夏の声

愛という絆金婚へ持ち続け

泉佐野市 山本 蛙城

君が代の君はわれらでよいものを

日の丸をいま血の色と言われても

香水の後ろ姿も気功らし

土用浪お茶だけの仲触れ回り

七の月やはいろいろな落下物

貝塚市 池田 寿美子

志摩の旅星に願いを叶えられ

黄昏れてあご湾クルーズおだやかに

燃えつきて凌霄花ぼとり落つ

シーソーゲーム エラーもあって又愉し

財布のひも一寸ゆるめてプラスの日

岸和田市 高須賀 金 太

虹の橋妻と私に架けてあり
輝いていたのはバブルまででした
居酒屋で愚痴のつづきを聞かされる
コスモスのデリケートなり花ごころ
参道の花は浄土へつづく途

岸和田市 長谷川 呂 万

古里は水も空気も添加なし
古稀過ぎて老いの身削る義理は欠き
プールではゾンビのようにただ歩く
長寿国地縁人縁義理呪縛
ラストダンス約束したが忘れてた

岸和田市 岩 佐 ダン吉

ミサイルの在庫しばらく無いらしい
大穴も当てず本日佳き日なり
多数意見さみしい僕が拍手する
八月の時計止まったままにある
坂道の章で自分史熱くなる

岸和田市 芳 地 狸 村

絵ハガキの一筆描きに彩がある
これからの余生たのしむ絵の手紙
どの顔も生き生きはげむトレーニング
理屈などあとからつける口喧嘩
地図にない島で生きていたいくさ

岸和田市 田 中 文 時

深呼吸する環境に程遠く
カタカナの名前漢字に変える祖母
濡かじる息子遺産の前倒し
亡き父の跡追い庭木立ち枯れる
変化ではない進化だと躲される

岸和田市 原 さよ子

すうどんと決めても覗くウインドー
孫や嫁に老いかばわれて寺参り
青い目も手を合わしてる古都の寺
晩酌の小瓶夫のエネルギー
泉州の土があったか水なすび

岸和田市 原 苑 子

お祭の寄合いですと早仕舞
初孫にだんじり囃子の洗礼を
だんじりの雑踏が好き岸和田っ子
響かせた太鼓を腹に受けとめる
かげろうを背なに地車ゆれて飛ぶ

岸和田市 井 齋 一 齋

銃撃戦ガイドラインが調子付く
急いでと臓器が叫ぶエアポート
バンクより立派に果す古タンス
内緒ごと大声を出す電話口
親子電話盗聴している嫉妬心

八尾市 宮西弥生

酒とろり北の赴任がまだ解けず
家族たち揃う何でもない事に
生きるのもほどほどがよい検査食
山小屋でこころ許した人の群れ
梅雨空の鬱吹つ飛ばす小鳥たち

八尾市 吉村一風

糸切つて風は身のほどよく分り
面とりもきれいに白い髪も梳く
真つ白いにぎりで孫とピクニック
いい人をやめると食がよく進み
冗談もこたえるこころ激むとき

八尾市 高橋夕花

山のあなたの亡父の声する父の日よ
藤いろのTシャツ匂うもと少尉
愛染さん恋のふたりも朧なり
酒吞めぬ夫婦にメロンマスカット
スタートがすこし遅れた後すきり

八尾市 村上剛治

こころに灯明くともして闇を行く
生きてゆく姿勢ハンデイの子に学ぶ
黙々と大志を抱いてかたつむり
ストレスがほどほどにありいい調子
待つことをおぼえ懐深くなる

八尾市 村上ミツ子

神さまと仏さまとに囲まれる
すきやきの味付けずばりお父さん
朝顔の花と早起き競い合う
石橋をたたきとなりの橋渡る
まん中の席でみんなの視線浴び

八尾市 神原まさと

夾竹桃天を目ざして切り取られ
横綱がぶつ飛ばされる下剋上
沙羅の花人の生死はままならぬ
ハイハイは廊下のごみを見逃さぬ
梅雨晴れの散歩老犬足軽く

八尾市 高杉千歩

オンフルール働く人が見当らぬ
一日の流れゆったりヨヌヌ川
シヴェルニーモネの家なり紅き蓮
七回忌さよなら言いに瀬戸の橋
五十年未だ夫を測りかね

八尾市 長谷川春蘭

まぬがれぬ老いには触れず冷や奴
老い集う杖と日傘のにぎやかさ
何色が我が子の未来虹の橋
時々は覗いてくれる息子たち
ばら好きの人越して来たバラの門

八尾市 篠原 いつふみ

言い負けて男らしゅうに拗ねている

精一はいお洒落している一年草

立呑屋詰めて斜めで飲んでいる

年寄のギャグに若者超白け

羞恥心酒で薄めて持つマイク

藤井寺市 高田 美代子

門を外して人を待っている

甘口のカレーで今日は母子家庭

定刻にバスが来たのも珍しい

高い樹に登って欲が深くなり

こんな筈でなかった君が代も日の丸も

藤井寺市 中島 志洋

悪友の誘い待ってる秋夜長

損得を忘れて尽くす好きな人

先生が教えぬなぜが多過ぎる

さり気なく愛の言葉を散歩道

手紙より会って聞きたいプロポーズ

藤井寺市 福元 みのる

針に糸通す仕草を孫笑う

針の穴程の振り仮名読む自慢

弱音吐く親を子供等元気づけ

地下鉄を出たところで待つ通夜の友

買い得と言う買い方を身につける

松原市 玉置 重人

シベリアを憶えば好きになれぬ国

サンパツは妻が上手にしてくれる

雑兵の流した汗に嘘はない

横綱とおんなじとこにサポーター

花の芽がふくらみ妻の掌が荒れる

松原市 小池 しげお

最初から大阪弁を使い出す

おじいちゃんの振興券は記念品

ティッシュペーパー貰ってお人好しになる

毛を分けた妻にも見せてない写真

走り書き渡してなにも言うて来ず

羽曳野市 吉川 寿美

深い処で赦し合ってるつまおっと

有頂天の足をすくいに来た笑顔

ぼろぼろと友が欠けてく茄子の馬

一枚のハガキが冬を連れてくる

咲いて散る掟の中の起き伏しや

羽曳野市 酒井 一 壺

地下鉄の優待券はありがたい

動物園どうぶつえんの匂いする

羽曳野に住んで知らないところがあり

歓声が溜息となり諦めに

イヤリング溜息みんな聞かされる

羽曳野市 福田満州

路郎忌や茅の輪くぐりをして出かけ

切り売りの西瓜せわしい供えよう

胃カメラのあとはそろそろ冷や奴

満点でなくてもいいの元気なら

たどたと書いております葉書主義

羽曳野市 榎本吐来

達観の酒に医薬が従いてくる

枕辺の辞書が忙しい呆け鳥

悠然と三々九度に挑む下戸

党名の自由が嗜せている不況

泥酔の帰路に男が甦る

羽曳野市 三好専平

交脚の媚態が悟り妨げる

明日のことわからないから生きている

夏の虫炎のなかへ身を投じ

身は老いて憂しと四十の達治の詩

フェアプレーホームベースを蹴つとばし

富田林市 藤田泰子

異文化の国にも丸いお月様

殻破る鉛筆の芯失らせて

テレビ見て泣いてるところへ客が来る

男と女臍々の鬼ごっこ

嫉妬心によきによき伸びる夜の爪

富田林市 片岡智恵子

つらいなら笑えと言った父だった

太陽をにらみ返してさす日傘

保険満期屋根ふき替えて壁を塗り

琥珀色になるまで待とう梅酒瓶

待ちぼうけ電池の切れた花時計

富田林市 松本今日子

玄関に孫の忘れた玉手箱

中年の恋高々と旗掲げ

夕映えの宍道湖畔は夏の色

旅帰り私の枕待っていた

月光に照らしだされた事故現場

河内長野市 植村喜代

雨少し止んで下さい孫が来る

コマーシャル孫の笑顔とだぶらせる

曲りなり胡瓜も自由ほしいから

相談に乗ってる方が聞いてほし

寝たきりを置いてさぞかし無念の死

大東市 児玉蛙

らんかんに助けをかりる試歩の杖

犬に道ゆずって転ぶ試歩の杖

本流にのってオールが軽くなる

正直に言うから話もつれ出す

門を外し情けに添うてみる

交野市 山川 日出子

枚方市 海老池 洋

亡父の弓 亡母のお琴は宝物

人生の足しと引き算末はゼロ

亡母の道物語風日記帳

リストラとサルにご注意東京都

黄金にヒカル宇多田は十六歳

吹田市 瀬戸 まさよ

敗戦の夏薄れゆく半世紀

そうめんの季節買い込む缶のつゆ

透析の友の愚痴聞くうんうんと

センサーがあるのよ燕躲す術

日の長さ白夜を想いビール飲む

吹田市 石原靖巳

灯がつくと人が湧きでる戎橋

織田作がひよいと出そうなせんざい屋(夫婦善哉)

古希過ぎて弾みたいから赤を着る

君が代を知らぬ横綱それでよし

税務署で溜息吐いて役者だな

枚方市 前 たもつ

六十七お金で買えぬものもでき

気の弱さ寸分見せぬ蟻の列

菜園の土もしばらく夏休み

そこのけそこのけ若者の靴お通りだ

十津川のお湯もまったり夏の雨

あつものに懲りて底値もよう買わぬ

児童公園 子らの遊ばぬ世の移り

髪染めてカムフラージュしたお歳

紅一点 雌しべのような目立ちちよう

足音と励まし合つた影法師

枚方市 鈴木政子

親を看ぬ親を見ている子供の目

姥捨て山へリコプターで連れてつて

ずるい癖 無血でコソボ入りロシア

お寺の子幼稚園からカトリック

仏さん勤務時間があるらしい

枚方市 寺川弘一

東大を出るまですんなり行つたのに

無言電話無い日も少し落ち着かぬ

大切な命をしまふ金庫が無い

借りたいと言うのにただでやると言う

私より信じられてる免許証

守口市 結城君子

ベガのぞく望遠鏡は罪ならず

梅雨弾く「生物図鑑」にまた向かい

モルツマーメイド白髪青年颯爽と

おりひめへお願いがある九時の夜空

「なら燈花会」あの世へ通じる川光る

茨木市 藤 井 正 雄

母さんが泳ぐ少女の顔になる
父の酒自分で自分ほめて飲む
真ん中の横の笑顔が次期社長
表向き噛み合わせとく嫁の知恵
飛火野の散策レタス色の風

茨木市 井 上 森 生

エコー画面に愛のかたちの小さな手(次女懐妊)
紫陽花の誘いは多彩多チャンネル
蓮池の風大らかに釈迦の声

定年を賞味期限と読み替える

ふるさとの森の癒しが欲しくなる

茨木市 堀 良 江

みんな出たみどりの窓を開け放つ
軽々とブランコを漕ぐ孫は風
母さんは狡い子すぐに見つけます
陽に祈り月に祈りの祖母の日々
少年の小指ビーズがよく光る

高槻市 川 島 颯云児

同年の計に身辺の整理する

凡人でよし打たれる釘になるよりは
恩着せるつもりはないがそれつきり
以心伝心 夫婦離婚を考える

老いたるかすぐに涙が込みあげる

高槻市 井 上 照 子

咲く野ばら容赦なく切る大掃除
大卒に希望捨ててな辛い世だ
中一の孫声がわり春が来た
片言の英語で孫と日曜日
口出しはすまい娘の教育論

高槻市 傍 島 克 治

人気度を測る目安の生前葬
挨拶も以下同文ですませぬか
迷彩色塗って欺く杜の事情
善を積み天国からの招き待つ
み仏の腋をくすぐるお身拭い

寝屋川市 籠 島 恵 子

居心地はもう言いません真珠婚
淋しがり屋だろう言い出しつべえになる
母がまた無理したらしい荷が届く
希望どおり贈りましたよお中元
究極のはしやぎだろうなヘソピアス

寝屋川市 堀 江 光 子

恍惚の母の針目の乱れずに
膝のものふるい落して針探し
地下鉄に四季あり目立つ白い色
地下鉄のここが京都といわれても
お互いに正義をかざしいがみ合う

翻身魚が目を瞑るとき哲学者
森

茜

気後れをせぬ性格も武器であり
梅雨しとどうす墨色に暮れるなり
幼馴染みの顔にありありあばれん坊
摺り鉢の底に沈めておく焦り

酒屋井 勇太郎

あと幾度海外いける夫婦旅
ソムリエは諦めました皆うまい
お茶だけで済まぬを承知ついて行く
上達を諦めてから腕あがり
卒寿母指輪を買えと駄々こねる

酒屋川市 江口 度

自転車強く軋ませ妻帰る
客待ちの車 診察待ちの患者
麦藁帽出せと鳴き出すきりぎりす
どんぐりの代表決めるあみだくじ
福耳にほくろお金が溜らない

酒屋川市 柴田 英壬子

白髪になっても夾竹桃の赤
ピーポーがまた来て止んだ窓の下
退院後も糖尿食の朝のパン
目を病んで足も弱った散歩道
声だけは元気電話魔生き生きと

酒屋川市 平松 かすみ

一言の元気の種を上げましょう
赤ちゃんに好かれる顔でありがたい
こんなもの出来た鏡が笑ってる
卓球をします相手は冷蔵庫
ピーポー私の保険一覧表

酒屋川市 坂上 高 栄

ぼた山に草ぼうぼうの夢の跡
ほうえ駕籠 愛染さんに雨が止み
早死の母を3倍まだ生きた
源平と名付けて螢ランデブー
猿知恵がどうやら一枚上らしい

酒屋川市 北岡 波留吉

八十路坂鐘については過去洗う
お見事なゲームでしたと金婚日
どん底から奮い立たせた妻の愛
嫁が来て切り抜けられた農繁期
敬老日の祖父婆様の墓まいり

豊中市 吉田 あずき

新世紀わたしの方が宇宙人
メダカ廃校雀の学校大繁盛
日めくりの数だけ御飯炊いて来た
愚図いのは途中で夢を見てるから
謎とけた女眩しさ消え失せる

豊中市 湯浅馬洗

発祥の地に鎮魂 供養 戦車之碑（久留米 戦車第一連隊跡）

祭文を読む声 気骨老い忘れ

足腰は衰え声の鬼軍曹

キャタピラの絆を語り明け易し

記念写真古い序列の顔になり

豊中市 井上直次

通勤車首をかしげて盗み読み

老妻がソフトな口調で釘をさす

老いたれど時代（とき）の動きに敏い耳

世を渡る加減乗除は欠かせない

年金の傘の下にて足るを知る

豊中市 滝北博史

源平やグラジオラスの二色咲き

久しぶりハイビスカスがひっそりと

アイラブユー言えないうちに総入歯

リーディングサービス受ける身の幸よ

強い心だけ生きられるのだろうか

豊中市 松岡久留美

シャープさが欠けて手を出す高金利

何事も聞こえないふり波たたず

鼻ぐすりまかり通って世が乱れ

資産家に生れ感謝を知らぬ人

秘め事を明かしたあとの爽やかさ

箕面市 出口セツ子

お地蔵が夕陽に焼ける原爆忌

十の内九の言葉を呑む大人

嘘の無い汗が輝く甲子園

失ったものなつかしい遠花火

負けん気が強くていつも損をする

大阪府 粂山隆盛

新涼の風さわやかに古希後期

浅草のほおずき市に見るいなせ

この雲をどこかで君もきくと見る

飽食のクラスお山へ帰らない

天才のジョッキーからの流し買い

大阪府 米澤俣子

その時々の流れに乗って生きて来た

来し方の貌それぞれに持つ庭木

ポプリの香爽やかに変え夏の風

抽出しをあげると風が起きあがる

落款の重み掛軸夢一字

和歌山市 牛尾緑良

釣銭のように時々雲がくれ

鯨幕そろそろ二幕目が終わる

閉店を「お休みさせてもらいます」

天井も人生 まして冷麺も

罰ゲームだろうか酷暑との予報

和歌山市 川上大輪

恐ろしいことにジョークが通じない
絵に描いた時計が少しずつつ動く

二言など無いと言うから損をする
妻のメモ通りに動き恙無し

和歌山市 川上富湖

溜め池が溢れてだだっ子になった

角砂糖貴男も堪え性がない

花言葉知って悲しい金盞花

終身雇用突然遮断機が降りる

寝返りを打つと忽ち新世紀

和歌山市 吉村さち子

生活の垢を隠して飛び回る

旗色を見て冗談に切り替える

輪の中で三猿真似て耐えている

満中陰志開ければひよいと師の笑顔

不意の客へ亡父の浴衣が短すぎ

和歌山市 池永正匍

子煩悩ピアノが置けてほっとする

蟹気楼なのかも知れんわが新居

遠方の出張とみる飲み菓

ファッションが教えてくれる季節感

進化論ヒト科も未だその途中

和歌山市 田中みね

あなたいい人だって余りに嘘が下手
丹精の花盗まれて盗まれて

螺旋階段一挙に降りて来る若さ
糠に釘そんな妻です平和です

限りある命希望を絶やすまじ

和歌山市 堀畑靖子

未体験ゾーンの前にある茨

蓄えのじょうずな蟻に聞く老後

蓄えの目減りを嘆く蟻に会う

不透明な時代守りに入る蟻

コントロール出来ぬ自然よ茄子キュウリ

和歌山市 細川稚代

天才が競うて球場華となる

人愛しひとを傷つけ渴く胸

見え隠れしながら闇に飛ぶ螢

中傷に疲れ切ってる花菖蒲

切りかえが下手でスイッチばかり押す

和歌山市 岩本美智子

草引かぬ庭の自然をいとおしむ

冬布団かぶる夫と過ごす夏

人声が恋しくなつてテレビ聞く

浜木綿の甘い香りは夏の恋

一日の終わり交響曲を聴く

和歌山市 山口 三千子

蹟いた小石形状記憶する

衣替え子の居ぬ部屋もステレ吊る

おおそうかそうか夫の目はテレビ

子は誰に似たのか親は井の蛙

黙許してストレス溜まる梅雨ごもり

和歌山市 山田 高夫

追伸にさり気なく書く憎い文字

潮が引くように静かに母眠る

思慕つのる胸をゆさぶる火の記憶

無口でも芯の太さを眉宇に秘め

あの時の借りはきっちり返します

和歌山市 青枝 鉄治

手みやげを餌に優雅な天下り

役付きとなつて本音を差し控え

参加して枯れ木の役に甘んじる

圧勝へ不問となつたちさなミス

ホツとした顔も混じつた通夜の席

和歌山市 玉置 当代

青田風そよぐ不況はまだ続く

その時の出逢い回転寿司まわる

仕来りを破る嫁さんきて平和

半世紀添うても歩調まだ合わぬ

許さねば達磨の目にも睨まれる

海南市 三宅 保州

その人の立場になれば許せます

まあ座りたまえと言われ身構える

今あなた財布に幾ら持ってます

金持も貧乏もない手術台

前半は僕と差のない立志伝

海南市 谷口 義男

少数の意見通さぬ多数決

嫌な事直ぐに忘れる生き上手

政治家にだけはなるなと子に諭す

無理しても大学卒にしたい親

努力した結果知らずに運と言う

奈良市 米田 恭昌

医療ミスまたかと嗤っている鴉

夜の居間電化蜚が舞うような

よつぼどの事があつたか下戸が酔い

亡父母おわす里は心のユートピア

白鳳の伽藍に偲ぶ大和人(斑鳩の里)

奈良市 天正 千梢

現代っ子縄を沢山つけられて

タンポポのいく度ふまれてひらきしや

石畳 人力車のさつそうと

屋台骨腐蝕していて粉飾し

両の手で顔を洗えるしあわせよ

生駒市 麻生 アート

香芝市 大内 朝子

まひるの静謐さんげの性を孕み居り
リンゴむき上手になった悲しけれ
禁酒やめて最後の砦守らんか
それにしてもよく雨の降る艶歌かな
お浄土へゆくも道草喰いながら

生駒市 北山 悟郎

炎天に気迫の汗が輝いて
襟正しその日来るのを待ちこがれ
空耳か亡き戦友の声耳をさす
しがらみが体からみ縄解けず
地に足をつけてひたむき前進し

大和高田市 岸 本 豊平次

故里の川に螢がUターン
カラスには曜日判るかゴミ置場
趣味が合い初対面とは思えない
側に居るだけでよいのがよくしやべり
飲むもよし反発もよし父を越せ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

恋再びコスモス揺れる始発駅
沖縄へ行こうサミット来る前に
夏休みパパも財布もグロッキー
熱帯夜明けて朝顔涼しげに
飲み過ぎを叱る胃の腑に詫びて吞む

生と死を葉っぱのフレイディーから学ぶ
相槌の下手なおとこの一本気
月の夜にハラリ散りたいなと思う
その時は愛の鞭とは気づかない
合掌へ鬼と仏がてをつなぐ

京都市 都 倉 求 芽

稲妻へあじさい一瞬夜叉になる
季節感ばこぼこころ枇杷の種
草花が歩け歩けと誘う道
鉛筆を削る迷いを剥がしたく
男料理下手でも手抜きなどはせぬ

京都府 稲 葉 冬 葉

怖い夢見ていたらしい南無阿弥陀仏
梅雨最中十九歳のお弔い
老人のパワー男尊女卑がまだ残る
老いて今悔いはなかったことにする
愛おしき螢袋の散り際よ

富山市 舟 渡 杏 花

生真面目が思い余った昼の酒
悪役がトンボ切ってる名舞台
大それた望みをもたぬトレーニング
言いようのない距離と思う別れかな
目刺し焼きながら借金返さねば

富山市 島 ひかる

遠き日のちははは在す大文字
飯の世の川で情けに流される
登山靴 雲の機嫌を見て歩く
泥の舟あなたと共に生きる川
朝な夕な祈り実って姑となる

富山県 増田 紗弓

逢いたいと大きく書いて書ききれず
数ミクロン違っただけの目鼻立ち
ロマンかな夜行列車にひとり乗る
失意すこしレールの音がなぐさめる
白湯は白湯これからミルク溶かします

犬山市 早川 盛夫

配合は秘密左官も和菓子屋も
若鮎を活かす笹葉の二三枚
山へ来て小鳥と同じ空気吸う
アリンコを気にしだしたら歩かれず
後先を考える程歳となり

静岡県 薮田 獏 杏

密航のように真夜中ドラもなく
吾が事と知らず一緒に笑いこけ
螢火が何カラットにも見えてくる
太鼓練習 梅雨の向こうで鳴り始め
おしゃべりの好きな床屋で時が過ぎ

横浜市 菱田 満秋

砂丘から見てる夕陽を海が呑み
先生と呼ばれて背筋伸ばされる
古稀過ぎてまだ夢がある広辞苑
好きな人通る時間に花鋏
美食極めて糖尿に辿り着く

横浜市 清水 潮華

マーケット八百屋一軒だけ残り
本降りの中を救心買いに行く
快速に抜かれいよいよ眠くなる
授業参観孫と一緒に学ばされ
授業参観かかさぬことを胸に決め

横浜市 菊地 政勝

朝顔を善男善女が買い求め
新幹線車掌も時計を見る仕草
万歩計もらった訳を考える
日の丸が駄目なら白旗あげてやる
ルーキーが右腕となるプロ野球

横浜市 後藤 早智

日本列島思う人あり暴れ梅雨
梅雨見舞昨日は北で今日は西
キャスターに洗濯日和教えられ
しきりなる雨音を聞くエコライフ
子の育ち重なる庭の花木立

八王子市 播本充子

子を抱いてから公園が好きになる
母さんと呼んで定食ばかり食べ
心して亡母の針目を解きほぐす
還暦の未だ大人になりきれず
金で済む事ならと手を挙げておく

大宮市 八田敏

二人して七十路を辿る車椅子
ベランダと老いにふさわし菊五鉢
癌と呆け防ぐ料理に凝っている
勢いに乗って頻張る回り寿司
返事だけする癖孫もつけて来た

仙台市 川村映輝

老衰はじわりじわりとやってくる
老衰に負けじと頻張るのも楽し
真実は裏付け無くも真実よ
犬猿も恐れるほどの嫁姑
下手な字は読めても上手な字は読めぬ

弘前市 斉藤 焔

りんご翁の胸像りんごに語りかけ
立佞武多威風堂々と堂々と
自衛隊佞武多作っいて平和
無病息災茅の輪くぐりの列にいる
住職のコーヒーに酔うあやめ寺

弘前市 小寺花峯
鳴り終えた時計に責任などはない
腹一杯ミエを食べてるクラス会

マルクスの理論が消えたポーナス日
正直な心に戻る酒二合
悲しみにふれてはならぬ終電車

弘前市 高橋岳水

指間からこぼれ根付いた現住所
老人に格差を強いる介護法
散髪の手定が狂う祝儀不祝儀
ふる里の良さに目覚める歳になる
人並みという物差しが見えて来ぬ

弘前市 相馬銀波

母に逢い亡父の墓参になるねぶた
ライバルも浴衣日傘と妻の夏
スランプの僕を食欲おし測る
真夏日は日陰日影の雨蛙
結論の中に小骨も刺もある

弘前市 櫻庭順風

うれしけれ死なねば叙勲されぬのを
拝謁へ訓練のよう隊伍組む
拝謁の死角を埋める人いきれ
拝謁に人工弁が動き出す
長和殿夫唱婦隨の撮る叙勲

弘前市 福士慕情

身長計少し背伸びをした気分
フカフカと血圧計の絞める音
体重計ぐるんと回る肥満体
右左上下視力落ちている
検診を終えてすっきり靴を履く

弘前市 佐治千加子

樋陀多の声曳いてゆく夜の蜘蛛
うたせ湯はこころ打たせる行ならむ
露天風呂 真昼の老いを曝しつつ
象無き岩を見ていた画家も逝き
こめかみに鬱という字がはつてある

弘前市 高瀬霜石

僕の名は野草健康優良児
金のないことが存外武器になる
父さんの掌からこぼれるかぐや姫
友達を親を泣かせて夏が去る
コスモスが咲きあひのひとの一周忌

弘前市 中山雅城

九輪塔古都の隅まで知っている
九谷焼朱の色いまも変らない
九尺二間戦後の日本復興期
九献の儀孫の船出を見届ける
九九を読む孫と一緒に声上げて

弘前市 今愁女

雨の日の宵宮はやたら花火上げ
神様も書き入れ時を心得る
縫い上げた浴衣ねぶたが待ち遠し
ねぶた祭り夏と秋とが一緒に来
近づいてゆけば向日葵に見下ろされ

弘前市 一戸ツネ

彼の人もこの人もいる番外地
春夏秋冬津軽の粹でそれなりに
はればれと白寿を名乗るのど自慢
砂時計孤独を許すピコグラム
反省の味は苦いねこぼれ酒

弘前市 須郷井蛙

割勘をその場その場で笑う旅
老骨に鞭打ち原稿間に合わせ
畑用鋏になって生きかえる
一回の旅で年金さつと消え
人間がよすぎて酒に誘えない

十和田市 阿部進

自決した友と時々夢で逢う
手作りのおはぎ供えて墓参り
不況風馴染みの老舗店閉じる
五月晴 緑まぶしい露天風呂
いざの時役立てて居る津軽弁

黒石市 相馬 一花

気が弱い男の好きな力水
押売りが来ると女房に一任す
中味より服で勝負をする詐欺師
一服のお茶が媚薬のように効く
若い振りしても湯割りに見抜かれる

青森県 諏訪 柳 々

『自選集』八十年も水の泡
白内障眼は口ほどに物言わず
元禄の世から遊女の手紙くる
梅雨におり漢詩紀行にくれるかな
サッチーと真須美に思う罪悪感

青森県 西谷 大吾

ふる里の風が恋しい茄子の花
貧しさの磁針はいつも北を指す
人生に仕切り直しがなくて老い
自己主張ばかりしているきりぎりす
船頭の喉の渋さよげいび溪

砂川市 大橋 政良

しゃぼん玉一つくらいは消えないで
それぞれの思惑がある汽車が発つ
夢がある現実がある人の波
手の届くあたりに運がとんでいる
シルエットお前も道化師のひとり

香川県 山地 マツエ

可も不可もない一生だ急ぐまい
妻がまたいらいらしてるドアの音
茶を入れて妻の出方を待っている
修羅いく度越えたか母の背が丸い

宇部市 平田 実男

職安でどうにもならぬ歳の壁
診察券五枚自慢のように見せ
冷戦中だけとアイロン掛けてくれ
ローン完済家も私も老けました

倉敷市 小野 克枝

限り無き夢ふくりますもみじの手
ゼロに戻して再出発の席を蹴る
加減乗除をあやつり歩く夫婦道
風呂に浮く首に家長の気負いなし

岡山県 大石 あすなろ

なくて七癖そのひと癖をもて余す
策士家にもなれずこつこつ石を積み
ブライドが重荷になった二度の職
さぬきうどん食い気ばかりの女旅

出雲市 板垣 夢酔

門札を替えて年齢若く見せ
夫婦して互いに笑う物忘れ
大雨に頑張り切れず土砂崩れ
たまにはと昼のビールに上にぎり

鳥取市 徳田ひろこ

一陣の風も裂けない恋淡し
師を囲む劣等生のままでいる
ガス灯の炎に父を抱く鮎の川
カーテンに足四本もかくれんば

鳥取市 前田一枝

顔を見て彼が一番良い男
宿題は横目でマンガ見て居った
雀まで味見を先にしてかかる
未来まで生き延びそうな氣にもなる

米子市 神庭詩郎

スタートの構えで待たす信号機
やる事が無いので少し惚けた真似
日照権ビルの谷間の一戸建て
飽食に慣れてか猫が爪研がず

米子市 白根ふみ

朝日さす簾にねむり刻まれる
七夕に牽牛花が高く売れ
暑い日に熱いお茶のむ繋ぎ目に
カーテンが真つ白風がおいしくて

米子市 永井三津子

波瀾万丈読めぬ男が多過ぎる
おおよそは涙の顔に書いてあり
減ってゆく母の小言が氣に掛かる
今やっと亡夫のバトンを子に渡せ

米子市 本吉宗光

あと十年生きたい俺の予定表
九十七生きた男に香をたく
首都移転口先だけの夢なのか
神戸生れ米子よいとこ五十年

鳥取県 権代康女

軒先のつばめ飛び立つしぐさする
朝つゆの滴り落ちてなす光る
動きよい回転鮎に目をくばり
年重ね言葉上手で世を渡る

鳥取県 津村八重子

平和な日ふと君が代を口ずさむ
溪流のヤマメひっそり人を恋う
此の幸も神の恵みと日々あおぐ
太陽のめぐみかうまい米がなる

鳥取県 幸家單車

世知辛い世の中手柄ランク付け
くつろぐと腹の底から出る笑顔
孫生んだ嫁の手柄を誉め立てる
くつろげば心の刺も取れて来る

神戸市 池田善守

白杖の手をとり信号引きかえす
車椅子乗って介護のコツ覚え
喜びも感謝も表に出さぬ妻
ハイビスカス傘たたむよに咲き終る

尼崎市の場 十四郎

三代代続く家紋のお人柄
老いらくの恋うつかりとしておれぬ

熟年の妙薬歩く朝の道

近道を知ったばかりに蹴躓く

西宮市 門谷 たず子

シナリオが少し狂った車椅子

つまり愛の絆のあたたかさ

水枯れの菊が夫を恋しがる

仮の旅湿りかげんの日記帳

西宮市 長谷川 淳

迎え火に久方ぶりの薄化粧

朝顔の蕾数えて床に就く

朝顔の花小さくなり秋の朝

浜風に旗だけ元氣タイガース

兵庫県 大谷 幸次郎

生まじめに生きて肩の荷下ろせない

客のないワンマンバスが不愛想

妻の友味方らしいと気を許す

爆撃のニュース見ながら粽食う

大阪市 田中 節子

やさしさに飢え身ひとつの崖っ淵

月下美人夜目に妖しくましろなる

カラオケになじめずいつも弱気なり

追伸にちよっぴり弱気見せている

大阪市 中田 あい子

ありあまる資産かかえてつぐ子なく

何事も手早い嫁の長電話

濁り酒愛するおじは元樽師

秘めた恋あばきニュースにする新聞屋

大阪市 鈴木 トヨ子

これも資産嫁のやさしさ貰う幸

世相にも上澄みほしいにこり酒

家族会議旗色わるくまたトイレ

墓まいり強く生きよと励まされ

大阪市 川端 一步

一万歩歩けば十の宝もの

遅咲きの花でしつかり実をつける

絵馬の願ヒントに迷路から抜ける

春なんてあったかしらと膳を引く

大阪市 寺井 東雲

一点にしぼる願いがまとまらず

母の顔飛び出し注意看板に

絵に描けぬ人のこころの複雑さ

毎朝の楽しみの水伸びるつる

大阪市 川内 叭笑

溜めました苦勞もせずに体脂肪

過疎進み里は荒れてる泣いている

定年後晴耕雨読妻の夢

知らぬ間にチャン抜きで呼ぶ仲となり

大阪市 岡 本 久 峰

阪急のくじ引き化粧液当たる

鷗外邸明治を語る石畳

ドロ船の頭取ワルに食いつかれ

貸ししぶり借りたくもなし小商い

大阪市 津 村 志 華 子

まな裏にいつも描いてる母の顔

囀りのシャワー浴びてる森の精

嫌われぬようにとノーがつい言えず

童唄うたえば里が近くなる

大阪市 安 達 は じ め

男性の手前ビールは飲み残す

我が家まで持って帰った寄席の洒落

過ちを笑って許す父も歳

ライバルも同じ神社で願をかけ

岸和田市 藪 野 け い 子

日の丸がお子様ランチに立っている

父の日を食卓囲み手巻きずし

一万円やっと当った宝くじ

美人ママ若さをちらり売りに出す

岸和田市 井 伊 東 吉

嫌な雨でも水やりをせずに済む

政界にはや生臭い秋の風

習い事一息つける夏休み

機能増え操作に迷う携帯電話

八尾市 生 嶋 ま す み

電子音ビピビピ呼んで忙しない

老年の臓器役たつものがない

いとおしく義歯でいねいにみがいてる

嫁のメモ通り夕げの買物に

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

弱気な日やさしくされて勘違い

玫瑰の花に鉄は弱気なり

泳いでる魚生臭くはないか

唇がこころ細くてむらさきに

藤井寺市 楠 昭 子

定年後拘束されている地獄

もたれ合いながら本音はまだ言えず

お見舞いにこれが長女と書く最後

向い風耐えるよろこびだつてある

河内長野市 井 上 喜 酔

台湾のうなぎで日本の土用丑

人間の汗をロボット見て笑い

コツコツと汗で磨いた鬼の腕

あの顔が目ざわり火種だいている

河内長野市 加 島 由 一

蟻になり熊野の藍の中にいる

木の中に菩薩を描いてみる仏師

誘ったら危ないことになる予感

夢を追う時給二千のバブ勤め

枚方市 二宮山久

ボーナスもなんとか出ました不況風

三世帯くらすふる里過疎でなし

幸せを妻とあじわう万歩計

ふる里の無事 父母の電話ベル

池田市 藤井計光

老婆の心の鉛吐き出させ

まどろみの中で遠のく虹の橋

野球音痴へノムラ 松坂 耳にたこ

目出し帽悪のためには売りはせぬ

池田市 岡本吉太郎

貧乏でストレスためて強く生く

海行かば唄いし頃の純朴さ

含む所ありてか妙に当りよい

午前二時稲妻光って豪雨来る

和歌山市 福井桂香

恨みごとさらつと逃がす日記帳

背信のそれから雨になる手紙

流れ藻の呼吸はきつと稚魚になる

うつむけば故里の樹に叱られる

和歌山市 山根めぐみ

痛む傷かくしにつこり空元氣

正眼に構えすぎたかチョンボする

しからはゴメン鰻の腹をさいている

九条を守る素直に伸びた足

和歌山県 中後清史

ひと口に一兆円というけれど

指定券買えば空いてる自由席

メガネよく拭いて娘の彼と会う

謎めいた妻の相槌引つ掛かる

静岡市 安本晃授

一病を背負って渡る夏の橋

パニックの死角で笑うカタカナ語

出る幕はまだある父の夏帽子

人を斬る言葉は持たず羊雲

富士宮市 渥美弧秀

諍いを富士も見たかと笑い合う

富士ヶ嶺の藍を求めて余生いま

咳五日庭の桔梗に励まされ

投句終えピアノと語る小半日

弘前市 岡本花匠

日光り凡夫いざなう檀那寺

朧風 子安ほほえむ風車

まこととの出遇いと知らず十二光

今生の軋みが残るラムネ玉

弘前市 蒔苗果林

一人分洗う食器の音気まま

もらい泣きそのあとたのしうれし哭き

うるわしいことにふれたい歩度おさえ

ネプタネプタ ジョンカラ節の顔競う

(小笠原敏人氏はP 87に掲載してあります)

佳句感想

橘 高 薫 風

味のある句

今回は味のある句と題したが、これは味わ
い深い句というより、味な句というか、洒落
た句を含めて、一寸した趣向や表現の形の上
で工夫を加えたという意味合いで取り上げた。
平凡な句と紙一重といったところもある。

恋の畀あの眼だろうか眼だろうか

麻生 路郎

「目も口ほどに物をいう」との諺がある。

女の秋波は男を虜にするのは衆知の事実だが、
それをこのように提示されると、うなづいてし
まう。並みの句とはんの少し違ふその効力は
「眼だろうか」のありふれた言葉ながら、リ
フレーンさせた手柄による。無論、その前に
恋の畀という語の適切さがあるのだが……

浮き草は浮き草なりに花が咲き

中島生々庵

浮き草は緑白色の小さな花を咲かせるのも
あるが、ほとんどは葉のような形の茎が分裂
して増殖する。目立たぬ草の目立たぬ花は下
積みのひそやかな存在で、憂き草と呼んでも

過言ではあるまい。

大毎も止まり豆腐屋も止まり

須崎 豆秋

昭和九年の室戸台風のとときの句で、大会社
と小商人の対照を際立たせて一句にしたもの。

この時、朝日新聞社は自家発電の装置で、
印刷をし、新聞が発行出来たのであった。

動物園どうぶつえんの句いする

酒井 一壺

動物はそれぞれ体臭を持つ。犬もそうだ。
猫は臭いがしないというのが麝香猫の分泌物は
香料となる。狸だつて熊だつて変りなく臭う。
それをひっくりくるめたのが動物園において、

具体的には言えぬが、概念の上でも実際にも
存在する。それを味な表現と思うものだ。

おおよそは涙の顔に書いてあり

永井三津子

涙を流しているのは女か子供か、何一つ具
体的な示唆はない。しかし、想像をたくまし
くして、女なら、また子供であれば子供で、涙

のわけありをある程度察することが出来る。
ほんやりと言われて理解出来ぬ句もあれば、
納得のいく句もある。この句がその例である。
腰かけた石を拝んで通路立つ

宮崎シマ子

お遍路は常に同行二人、お大師さんに感謝
の札の行である。だから巡礼というのであろ
う。ひょっとして、俳句にもありそうな堂に
入った内容だが、故里が阿波の句主なれば、
深くうなずけるものがある。

白湯は白湯これからミルク溶かします

増田 紗弓

白湯というものを見据えている。原点の白
湯からさまざまな展開がはじまるのだ。お茶
を淹れたり、消毒に用いたり、昔の行水もな
つかしい。ミルクを溶かすのもその一つで、
新生児の面倒を見る句主の職場を思わせる句
でもある。

銀行もコンクリートも信じない

唐住 実

銀行のトップの醜態にもあきれるが、新幹
線のトンネルの手抜き工事によるコンクリー
ト塊の剥落も、末世の様相を帯びて、庶民の
鬱屈につながっていく。銀行とコンクリート、
この取り合わせが妙に句趣を高める。
乱暴なほどの措辞に力感を覚える。

自選集

金井文秋

難聴に惜しいと思ういい講話

出す勇氣ない反論が胃にたまる

耳が遠い印象だけを置いて来た

百まで生きられますと他人は軽く言う

崩れてしまう老骨に鞭打てば

小林由多香

柳号で呼び合い切磋琢磨する

訃報また卒業写真継せてくる

燃やしても捨ててもならぬごみの処理

よろこびかわさびか涙ころげ出る

大正の頭物忘れがすすむ

西田柳宏子

病床五句

何糞負けるか病院Uターン

血小板激減何でや何でやネン

梅雨明けにどっと聞えた蟬の声

行きたいな病床今日の句会恋う

消灯のそれから軒大合唱

月原宵明

不機嫌な石鎚梅雨がまだ晴れぬ

赤だけで得心出来ぬ爪の彩

薔薇の棘花を愛する人刺さず

挨拶はどうもどうもで偉い人

紫陽花で何考える雨蛙

松川杜的

手を握るまるで充電するように

リストラは未だ無いだろう天国に

午前午後コーヒのタイムは決めてある

雨の日のポスト雨の音で落ち

信楽の狸も汗かく陶器市

遠山可住

山吹に出合うひとりの雨やどり

一流という前職がものを言う

鳥の目にパラグライダーのんびりと

ごちゃごちゃの温みに溶ける三世帯

古いかも知れぬがケジメ言うておく

高杉鬼遊

ことばにもならぬ会話で用が足り
口出しはしない正座の足の裏
ゴキブリもゴキブリなりに子をはらみ
平成は大和魂など知らぬ
病には負けぬが老いにはかなわない

恒松町紅

方便が下手で真面目な割烹着
大病院必ず知った人に逢う
禁煙車ライターお持ちかと聞かれ
旅靴トンネル通過した安堵
日々好日老人力の夢を抱く

藤村女

弁解をするので怪しくなる噂
口実が整い過ぎて怪しまれ
水すましリズムに乗せる郷の川
告白を聞く公園に月さえる
雲も旅人いつか別れる運命なり

野田素身郎

たんたんと主治医余命を告げて去り
行き付けの酒場が一つまた消える
蜘蛛一匹殺し寝つけぬ熱帯夜
晴れの日はどこにいいのか蝸牛
戦死という言葉も風化兄の死よ

野村太茂津

野道行くや々と独りの空の下
叢に寝て青空独り俺のもの
野道行く独りアルツハイマーではないぞ
青空深く理屈は後で考えよう
紺碧の空と海しばらく夢を見る

小西雄々

遮断機に愛のリズムを狂わされ
手軽にはできぬ嫁御の荷を運ぶ
快食快眠やがて八起きの風となる
天空の夢 鳥籠で見て飽かず
続編のドラマへ余命染めなおす

辻白溪子

敬えばすぐに味方と誤解され
茶を立てる師匠は味見などしない
面接の机よく喋る人がいる
近づいて話を交わす手話仲間
待たされた時間を短く言うておく

波多野五楽庵

泣きそうな小さな町のプラタナス
妻病んで桔梗も萩も雨ざらし
とつとつと詭弁をつなぐ北の海
あきらめたらしい石榴の熟れる音
雨だれの男をポイと捨てました

正 本 水 客

やせ我慢するなど言えるほどのこと
いさぎよし上段にふりかぶる

雨が降る降る係わりもなく

義妹急逝

風の音笑顔のままで目にのこる

藤 井 明 朗

盆も済み諦めの灯にかわる

大雨へ予感 勇気の要る避難

梅雨前線消える台風製造中

みんな元気でふれあいの和が楽し

外交経済は多忙政界は動く

黒 川 紫 香

乗ってよし歩いてしまなみ飽きぬ道(しまなみ海道)

併行で風も大橋渡りきる(新田尾道大橋)

むかし船今は船型造る島(因 島)

瀬戸田からひよっこりひょうたん島望む(生口島)

激流で船折瀬戸のうまい塩(伯方島)

宮 口 笛 生

三面記事賑わい見せる暗い日々

ハナハトの小学読本最後にて

年金を酒代にしている身分

四回も腹切ってます生きてます

公園にねむるS L うらみ節

阿 萬 萬 的

妻の愚痴聞かされているむし暑さ

四面楚歌鉛筆の芯また折れる

届かない遠吠えをする定年後

政治への不満唇よく乾く

馬鹿になり切れば少うし裏が見え

板 尾 岳 人

いつ来ても母に出合える風の盆

風の盆母も上手に踊るなり

風の盆好きで命のはなしする

風の盆静かに踊る山の中

風の盆踊ると風も踊るなり

八 木 千 代

わたくしの翼を包むハترون紙

ダンボールにまで囲われている翼

右の掌に包むおんなの過去未来

あとがきを包むキャベツも玉葱も

翼たたんで秋の呼吸に戻るべし

河 内 天 笑

あんなだけやあんなだけやと百舌鳥が啼き

水くれ水くれとうなだれるキウイの葉

カラスかあ僕を一喝していった

僕の血を狙ってる蚊と一勝負

おとなりのワンちゃん河内弁で吠え

川柳太平記

(256)

川柳の群像

伊志田 孝三郎

東野 大八

「十月二十二日（昭和十七年）靖国神社大祭に参拝後、富士見町阪井久良伎先生を訪問、かねて腹案中だった我家の庵号『待人居』のご揮毫をお願いした。先生は至極ご機嫌よろしく即時暗れやかに筆をとられた。何時もながら闊達に書き納められ、柳談数刻に及ぶ。名古屋に戻って、大きき頃合の真桑の扁額に収めてあゆち編集室に飾る事ができた。

待人居という意味は、これを家庭的に察すると、さながら独り居か、または佗びしき子無き夫婦が常にたすねくる友はなかつうかと待ち構えている風情とも想われ、何となく力弱き感じが先立つような気がするが、私の意とするものはそんなものではなく、この命名は、川柳の道における待人居であることを力説しておく。新人よ出でよ、より偉大なる柳

人出でよ、この念願の必ず成就するであらうとの望みをかけてのこと。更にまた新しき人より大いなる柳人待望をこそ、常に前途に待望を継ぐものである。

遙かなる足音たのし待人居 孝三郎

この伊志田孝三郎が悲願をこめた『待人居』は、彼の死後、あゆち川柳会を継承した、若い同志による中日川柳会から昭和48年10月、A5絹張り三百四十頁の箱入り美本、伊志田孝三郎句文集として発刊された折、その美本の豪華本の表題としてとりあげられている。

伊志田孝三郎は、明治29年3月16日父友方、母かくの三男として、東京市本所区石原町に生れた。父友方は明治維新の頃は、江戸から東京と改称された頃の幕臣で、明治42年死去するまで東京市麹町区長（現中央区）の区長

を勤めた有力者であつた。

孝三郎は早稲田大学商科在学中に、白石張六主宰の紅クラブ（川柳結社）同人となる。当時は角帽の柳人としてもはやされたものである。早大卒業とともに羽田調帯（ベルト）株式会社に入社。大正12年2月同社の名古屋出張所（中区新栄町）長に栄転、赴任直後の同年9月、関東大震災が突発、この天災によって母と姉妹の三人の肉身を失ったが、妻帯して名古屋永住を決意したものの、病身の妻を失い、孤独の身を名古屋市幸栄町の『待人居』に過す。

こうした暮らしの中で、養女と共に奔放な独身生活に浸り、川柳も一時中断していたが東京柳界で風交篤き高須啞三味・山川花恋坊・品川陳居の川柳三人組の来名（昭9）によって、これが刺戟となり柳界に復帰。戦後全国誌と銘打ち果敢に、川柳六大家を選者に網羅して表紙に色刷りの宮尾しげを彩管による柳誌『すげ笠』の常設『明媚集』選者で、華々しく振り返り、中部日本川柳作家協会結成の機関誌中日川柳会会長として昭和47年10月29日腸ガンを病没するまで活躍した。齢76。

伊志田孝三郎遺句遺文集の豪華な『待人居』には、著名柳人達による『思い出の記』をはじめ、故人のエッセイ、雑文集も盛り沢

山だが、その中の悼文の二、三を紹介する。

「亡くなった三太郎氏が『孝三郎は川柳の言葉をよく知っている』とある時の雑談の中で、孝ちゃんをほめているが、川柳用語には一段とやかましかった三太郎氏がほめるだけあってなかなかよき言葉を持っていた孝ちゃんであった。とりわけ花柳界の言葉には練達の士というべきだったろう。」

待人居には、その名の通り、気の合った川柳人がよく足休めに訪れたものである。関西で何かの川柳大会などあり、三太郎、雀郎といった人達もここで一泊したりして楽しい柳談、雑談で過したものである。

この家の小じんまりした孝ちゃんの豪華な二枚折の大屏風など忘れられない。この二枚折の大屏風というのは、当時一流の川柳家の色紙を貼りまぜにしたもので、これをたたむと路郎と霞乃、竹林と柳葉女の色紙が重なってしまふ仕掛けは、孝ちゃんの色好みからきたものである。

とにかく艶福院とでも戒名を贈りたいような孝ちゃん、どこにいても何時でも周囲の女性とねんごろになるこの人だけに、拙宅に泊る時など、洗顔からその手入れに三十分はかかり、身きれいにすること余念なだった。

淡雪はあいにくさせて消えてゆき

という彼の句が頭から抜けないので、淡雪と共に消えたる色男

の一句を弔電にした」（榎田竹林）

「番傘の同人の集りの席で、孝三郎さんの話が出た時、即座に着物のよく似合う人の話が出てみんなそれに合点合点した。孝三郎さんの名披露ぶりは関東調でいつも満堂を陶然とさせたものだ。」

宮尾しげをさんが、昭和十二年『昭和川柳百人一句』を出された時、その中に孝三郎さんの似顔があり、添えられた句は

またそんなみれんがまし三下り

という下町情緒あふれる綺麗な川柳が添えられていた。それに添えられた十句はみなキレイで鋭い句であった。そのうちから

ベルシャ猫頬ずりに飽きキスにあき

シャツも着て寝るよと友も齡をとり

他にあらずいとしは我が身朝の酒

等という孝三郎ならではの作品（近江砂人）

「出不精な私は、未だに名古屋を訪問したことはないが、二、三度神戸へ来られた孝三郎さんの印象は、披露の上手なスタイリストで、作品も洗練されているが、服装や挙動も垢抜けした都会人であると感じた。或いはその頃が氏の全盛時代であったのか、若いハイカラな女性同伴で大会へ来られ、華やかな話

題を置いて帰られたことだ」（三条東洋樹）

「とにかく『あゆち』『すげ笠』『中日川柳』などを通じて同氏の全人格がおりなす情緒と下町ツ子の気風をたたえた孝三郎川柳のよさを名古屋川柳界に植えた功績は大きい。すみれの向うの和服の似合う笑顔はあくまでうつであれかし」（清水旺夕）

孝三郎の遺句遺文集『待人居』には、六大家や東都柳人のリーダー達に吉川英治の顔も混っているが、孝三郎が知人によく「おれの句集の序文は吉川雉子郎で、装幀は山本健吉に頼みたい」というのが口癖だったそうだ。同句文集『待人居』に収録された句は約四百五十句だが、彼らしい作品を紹介しておく。

トゲ抜いてくれる女も痛い顔 孝三郎

余情とは花ある草の露のごと

絶ち難い慕情は石にけつまずき

句箋持つ心のいのち身のいのち

抽出に男やもめの木綿針

寝ころべば女はマフラ膝へ置き

大臣の来る日村長髭を剃り

浮浪児に駅前広場雪になり

愛の巢に自分で髪を結い馴れる

ゆるされぬ女に銀河たゞ白し

白足袋の白というのも色のうち

▼次号は「奥室 数市」

誹風柳多留二四篇研究 9

粕谷 長生・山田 昭夫
伊吹 和男・大野 秀二
小栗 清吾・橋本 秀信

清 博美・佐藤 要人

55 それハ氣の毒と道から医者かへり

粕谷 患者の容態が急変して亡くなった。その患者へ往診に行く途中の医者と出会ったので、事情を説明した。医者も氣の毒に感じたが、お亡くなりになればもう治療の用は無いので、帰宅した。

氣のとくさいしやへつかひが二人り来る

天元義2

橋本 賛。出会ったのであるが、これは偶然ではなく、亡くなったことを医者に告げに行く使いの者が、往診の医者に会った。

清 橋本説賛。礎稿引用例句、その二人の内の後の一人である。

佐藤 同。

56 めてたくもましとかん病あきはてる

粕谷 「まし」は「まじ(否定)」か。

①本来ならば妊娠はお目出度いはずだが、こつも付きつきりて悪阻の重い妊婦の看病をしなければならぬのならば、あまりお目出度くもないと看病に飽き果てた者のセリフだろうか。②正月にまで長期の病人がいる光景か。③長寿の人が寝たきりになつての看病か。いろいろ考えられるが①としたい。

山田 「まし」は「魔事」で③に賛。

小栗 わかりません。否定の「まし」がこついう形でつくものだろうか。

清 不明。誤字があるか？

佐藤 ましはなしの誤刻か。はつきりしないが、長寿者の看病の気配がある。(礎稿③)

57 梅ハよんだか山吹ハはちをかき

粕谷 阿倍宗任と太田道灌。

宗任の梅は問いかけに對しうまく和歌を詠んだが、道灌の山吹は和歌の教養が無かったために恥をかいたというもの。

梅山吹は文と武に手を取らせ

二六 10

梅は即吟山吹は遅吟なり

九四 33

梅は即吟山吹ハサテ解せず

一三七 8

清・佐藤 賛。

58 あら世帯しかしねざめかわるい也

粕谷 庚申待ちか。新婚早々の二人ならば、庚申であろうが何であろうが、いたすのである。しかし、昨晚が庚申と判るとやっぱり氣になる二人なのである。

ゆふべかうしんかへと賑ひよんな顔

安六宮2

小栗 「寝覚めが悪い」という成語を逆手にとつて、単に新婚さんが夜はげむので、朝寝しがちなことをいった句。

清 小栗説賛。

隣から戸をたゝかれる新世帯なのである。

初7

佐藤 単純に解して、小栗説に賛。

59 時／＼顔をちよびと見るほれたやつ

粕谷 惚れると、用も無いのに側へ寄つてみたり、話しかけたり……したいものなのである。まして顔の盗み見は当たり前前の事。

ほれたやつ間がなすきかなおとつれる

安二 4

ほれたともいわれず何も用へなし

安四礼 3

伊吹 賛。現代でも十分に通用する句。

清・佐藤 賛。

60 七文字へらして客を追かける

粕谷 八文字と真一文字の対比。「七文字減らす」とは、女郎の優雅な歩き方である。「八文字」から、同じ女郎が必死になって客を「真一文字」に追いかける、に変わったことを意味する。

八もんじあれハ此世の人でなし

宝十三仁 1

山田 賛。

客をとらまへる時ハ一文字

二四 17

伊吹 この句矛盾している。すべての遊女が

花魁道中をするわけでもなく、花魁道中をするような遊女が一文字に客を追いかけるというような、はしたない態度をとるようには思えない。

小栗 伊吹兄疑問。単に作った句です。

佐藤 大門待伏せ句の一態であらう。

61 式三俵のむとぬけてくはやり風

粕谷 俵屋風邪薬の句。「江戸のくすりや」

に、「京都東洞院通仏光寺上ル町、古沢肥後大掾、江戸店・日本橋通り四丁目 古澤甚兵衛」とある。

句は、俵屋の薬だから、二、三服ならす二、三俵飲むと、さすがの風邪も治つてしまふ、

というもの。

二三俵あたまのわれる人かのみ 三〇 20

杜若ぬすみたわらせんじてる 傍二 13

清・佐藤 賛。

62 くらかりをこそり／＼と下女がいろ

粕谷 誰が真つ暗な中を歩いているのかと思

つたら、下女の色じゃないか!といった句。

内中で無口なやつか下女かい 明七 桜 3

内中でにくまれものが下女が色 安七 信 7

山田 夜這の句でしょう。

ふけて紙帳のおとつれハ下女かい 安七 松 3

下女が色かねて夜ばいと定メたり 二四 39

伊吹 礎賛。奉公人の恋愛は御法度、まるで夜這いのように、暗がりこそり／＼としなければならぬ。

清 山田説、夜這に賛。

佐藤 同。

山田 夜這の句でしょう。

ふけて紙帳のおとつれハ下女かい 安七 松 3

下女が色かねて夜ばいと定メたり 二四 39

伊吹 礎賛。奉公人の恋愛は御法度、まるで夜這いのように、暗がりこそり／＼としなければならぬ。

清 山田説、夜這に賛。

佐藤 同。

63 簞笥ハこれも小判のはして出来

山田 簞紙は「紙を折り畳んで、袋状にして

箸を差すようにしたもの。特に、江戸吉原では、なじみの客の箸を入れるために、その客の名、定紋などを書き入れたものを用いた」

(『日本国語大辞典』)というものが、吉原では三会目から所謂馴染みとなり、専用の箸を用いることになる。だが、それに至るまで、大層な金銀を要したのは言うまでもない。

簞紙というが、まさに小判の端ぐらの金

は掛かっている、という次第。箸と端を掛け

る。

三会目はし一さんのぬしになり 二二 21

主シの手で御はし紙と書きなんし 二四 6

清・佐藤 賛。

4 - 59 -

秀句鑑賞

同人吟 宮崎 シマ子

— 8月号から

海月ふわり頭張らなくていいんだね

川上 富湖

波に逆らわずふわふわと掴みどころのない
海月の姿、それでいて波に負けないちから
海の子で育った私が何をキンキンしてるのだ
ろうと今更この句の海月に教えられました。

深いなあわたしが掘った溝らしい

宮本 かりん

今この溝を感じています。溝を掘るには自分ひとりではないと思いますのに、深いなあで反省の気持が見えます。どうして埋めようかと人様に相談もしたり、自分で埋めるしかないかしらと考え、結局は泥を被るのは嫌なので当分知らん顔をすることに。

胃袋がねじれるほどは怒らない

安藤 寿美子

腹が立つと口は真っ白、舌はカラカラになります。あれはきっと胃袋がねじれていて機能が働かなくなっているのでしょうか。近頃は齢のせいもあり家族も気を遣ってくれるので、のんびりの日が多くなりました。

母さんが万事休したらしく寝る

田中 文時

家事にお勤め親戚の揉め事一度に母さんの肩にかかって来たのでしょうか。のん気者の父さんに相談してもラチがあかず半分やけくそになってしまった母さん、「二、三日ゆっくり休ませて上げて下さい。それを見守る家族の方の優しさが目に見えるようではほえまれます。横向いて出せる器用な舌が無い

石垣 花子

前の句のお母さんにこの器用な舌があれば寝るようなことはなかったでしょうね。何枚目の舌でしょうか、神様私にももう一枚舌を下さい。「器用な舌」が効いています。

悪友の肩もときどき頼もしい

相馬 銀波

悪友とは一番仲の良い友達、困ったとき苦しい時相談にも乗ってくれ肩も貸してくれる。肉親以上の友情がそれも「ときどき」と間をおいたところがいい、うらやましい限りです。

真実は言えず男は捨てられず

小池 しげお

友達のおさんに詰問されているのでしょうか、こんなとき殿方はどう処理されるのですか。女性には却って白々しく嘘が言えるものです。うまく治めて上げて下さい。

「川柳とは人間陶冶の詩」と麻生路郎先生は言っておられますが、何処の句会に行っても人様の嫌な面を見る事が度々です。人間である以上は仕方がない、そして私もその一人です。七十歳をいくつか過ぎたのに恥ずかしいことです。せめて川柳は優しく温かいユーモアのある句を作りたい、また選をするにもそのような句を選びたいと願っております。

極度の乱視と近視その上老人性白内障も加わり活字を見ると眼が拒否反応をして涙が出て長時間は本を読むことも出来ません。川柳塔誌が来てもバラバラと目を通すぐらいでしたが、この度は日数をかけてゆっくりと通読させて頂きました。どの句もどの句も秀句に見えて今更自分の不勉強さをつくづく感じました。次の句を選びまして頂きました。

女文字余りきれいで冷たいな

岡本 吉太郎

水茎の跡もつるわしい人は鼻の高いおすましの近寄り難い美人だと思えます。「冷たいな」でよく表われています。

お芝居のように葬式すんでる

志 田 千代

故人の匂いやら生活のしみ込んである家での葬式はだんだん少なくなり、会場で葬儀屋の脚本通り、市長代理・社長代理の、故人に対して何の悲しみもない人々の焼香が続く、故人は送られる。最近あるお葬式で珍しい物が飾ってあるので感心していると、それは葬儀屋の貸し出し用の小物だと聞いて二度びっくり、まったくのお芝居ですね。故人はどうぞおもっておられることでしょう。

金婚式同じ匂いになりました

寺 川 弘 一

朱に交われれば赤くなります。五十年も同じ家に住み同じ物を食べ同じ話をしてっていると匂いだけでなく考え方もイメージも同じになってきます。似た者夫婦と言う諺もそんなところから出ているのでしょうか。

いい天気でござりますな地蔵さま

田 村 きみ子

ほのぼのとした温かい句です、大好きです。何の欲も求められなくお隣の人に挨拶するうちに。この後、地蔵様のまわりを掃除して、お水お花を上げ、子のこと孫の事ついでに近所の子供の事もお願ひして、腰を丸くして帰られるのでしょうか。

度忘れと誤魔かしただけ知らなんだ

山 口 美 穂

人には厄介なブライドと言つものがあり、相手によって素直に知らないと言え人とうでない人があります。その場を誤魔かして家に帰って勉強をして一つの知識を得ることが出来ます。人として強さがつかえるように感じました。

神様も四五人寄ると難しい

竹 治 ちかし

三人寄れば文珠の知恵、その賢い仏様神様が温泉は九州がいい、いやいや伊豆が、などと言いだしたらさりがありません。日の丸・君が代も人それぞれに意見があり、思い入れがあり、なかなかまとまりません。こんな時天の岩戸から宇宙一の神様が現われて断をくだして下さればいいですね。諷刺の効いた句だと思つて頂きました。

幼稚園のアヒルが死んだ 大事件

前 たもつ

園児たちの友達の一として皆の後からお尻ふりふりついて歩き、大事に大事に飼われていたアヒルがある日突然死にました。病氣だったのか大人のいたずらか、泣き出す児、怒りだす児、なだめる保母さん。幼稚園という小宇宙に起こった大事件、いい所に目を

けられました。

定年後二度目の正札つけてみる

樋 口 輝 夫

かなり立派な地位まで昇りきて定年、第二の人生を一から出直すとなれば、どの位の値打のあるものか、社会では今迄のことがあるので相当高値で買ってくれるとしても、奥さん子供さんはお父さんの付けた正札に納得されるかどうか、ご自分に正札をつけるなんて面白いところに目をつけられました。私なら定年退職された旦那様に、ご苦勞様の言葉と最高の値段をつけてあげます。

気兼ねなどしなくていいよ空財布

山 本 正 光

金は天下のまわりもの、急に大きな出費があり空っぽになった財布、今までも一度や二度ではないのです。だからデンと構えて居て欲しい。その内たんまり入れて上げると財布の持ち主は強気です。嬉しいですね。

呪文唱えるように豆腐切っている

松 本 文 子

お母さんは毎朝家族のために味噌汁を作ります。今日も元気で各自の道で励んでほしいと、掌のお豆腐を九字を切るような手つきで切っています。

豆腐と呪文、面白い対照です。

水煙抄

河内天笑選

八王子市 井上京一郎

堺市 矢倉五月

おしぼりでグイと顔拭くのも男

仇討ちをリベンジと言うカッコ良さ

店仕舞セール半年まだ続き

やっと思き上げた手紙のいい重み

もう一度握手をさせるフライングー

愛媛県 黒田茂代

落ち着いて音楽聞ける雨が好き

目を閉じて平衡感覚を試す

霧囲気で違う街の子田舎の子

お掃除をとて苦手にさす義足

障害年金より失なった足が欲し

米子市 足立由美子

昼寝することもありズムの中にある

親戚に八十代がぞろりいる

気がつくと私の影も老いていた

早送りドラマのように今日が消え

倅せな足でしっかり今日歩く

新刊の帯から一つ夢拾う

昔々ガラスの靴を履きました

枕元リングをアロマテラピーに

米蒔いて雀呼ぶ庭ひとりの日

蚊を供養する気の蚊取線香なり

和歌山市 和田美寿子

全員で電話をとらぬ根くらべ

下手な字も慣れれば読めるラブレター

宴会のかくし芸から名が知られ

捨てるのに買わなきやならぬゴミ袋

朝不調昼まあまあで夜元気

鳥取市 録沢風花

決断をしたら後ろは振り向かぬ

四季移る余生の針が早くなる

大空に四季折々のメモが浮く

寝たふりをして雑音を避けて住む

筋書きの通りにゆかず日が暮れる

横浜市 巖田かず枝

食べ盛りまだ続いている五十歳

喧嘩して家が静かで丁度良い

大声の夫で悪い事出来ぬ

仲裁をしてくれていた子も巣立ち

目標があるから蟻は元気なの

八尾市 與田明

格好よい死に際なんてあるものか

橋の名で大阪の地図教えられ

ひんやりと夏を飲みこむ冷や奴

タイガースサイド蟬よりやかましい

詰め過ぎた脳から記憶もつれだし

京都市 高島啓子

お歯黒もかくや烏賊墨スパゲッティ

だまし絵の街にその上観覧車

喋るだけ喋りお先に帰るなり

顔のない地蔵へさらのよだれかけ

溜息の訳がながと聞かされる

鳥取県 澤裕子

喋り過ぎ浮いてることに気がつかず

突き放すこれも一つの愛の鞭

ほほえみを一つの武器にする女

浮き草に我が人生をだぶらせる

耳遠くなつて平和な日を生きる

綾部市 藤田芳郎

舵も取る櫓も漕ぐ旨い茶も入れる

酒飲んで言う愚痴故に許されよ

独り部屋美味しかったと食べ残す

巡る季へ暑い寒いという怠惰

人文字の中の一人で動けない

和歌山県 坂東和代

手相では金に不自由せぬそうなの

蓋をしていつか消えてた謀反の炎

会議室誰が火中の栗拾う

古ミシンいたわりながらボランテア

あじさいも女も暮しで色変わる

北九州市 岡田幸生

ハードルを少し下げよと聴診器

保険屋のもしもに気持揺れてくる

地ビールをレトロの街で飲む旨さ

省エネとがめつことは違う筈

青田刈り売り手市場も今は死語

愛媛県 中居善信

感性の違いを妻に言つたとして

血の滲む文字がワープロでは打てぬ

恋をした事を汚点のように言う

傷負うて男が酒に咬いた

おっくうで庭木を丸く刈っている

横浜市 北沢街湖

ジーンズのヒップ視線を一人じめ
何回も自慢話をする魚拓

放さないマイク洪々聴く演歌

登頂の榮譽の陰にいるシエルパ

回復の兆し毒舌冴えてくる

横浜市 長島亜希子

無事着いた成田へ荷物置き忘れ

まあいつかいつも自分は許してる

彼の癖許し父のは許せない

保護という自由を奪う種の保存

ワイドショーネタ涸れしない世紀末

横浜市 荒井広和

眼配せの妻に我慢を強いられる

失言をビデオカメラが指摘する

風鈴の音色を盗む熱帯夜

媚を売る名刺に透けている打算

煩惱の海で漂う凡夫婦

横浜市 山下省子

図書館で新聞見てるホームレス

いい人でいよう貴方が好きだから

喧嘩後は馬鹿丁寧に送る妻

半月も夫婦喧嘩をしていない

通夜にしか顔見られない旧家族

横浜市 布山嘉信

武器を売るその口先で言う平和

物知りもはや言葉は孫にきく

口をきくまでは全く可愛い娘

花嫁は男ざらいという噂

新築をすれば転勤命ぜられ

横浜市 山梨雅子

お守りを幾つもランドセルに提げ

長電話夫に椅子をすすめられ

パーティーも間近ダイエツトに励む

知りあいに逢い牛肉を買いすぎた

定年の初日にそばを茹でさせる

横浜市 田中笑子

疲れさせてから見舞客腰をあけ

得意げに旅の話を開かされる

故郷の風は優しく急かさない

旅先は少し派手目の恥も良い

旧友に会えば病気の話から

横浜市 鈴江純子

隠し味こなして調理まかされる

発車ベルパントマイムで待つ二人

愛の花ショートのステイに実を結び

主婦層にまとをしぼって旅が売れ

立ち話物知り顔の独壇場

横浜市 川島良子

通夜葬儀喪主は泣いてる暇がない

初生りの桃ですどうぞ仏さま

銭湯ができて楽しみ一つふえ

一錠の効き目オトコが試される

休診日狙ったように歯が痛み

横浜市 秋元和可

雑草といたちごっこの雨上がり

新築の家に時計がたとある

随いてこい言った男が随いて来る

初対面仲をとりもつ国訛り

受話器置き元のトーンの声になる

今治市 塩路よしみ

デッサンをさらさら太い芯で描く

昼風呂の桶幸せをひびかせる

残り火を信じて燃える恋螢

いたわりのひと言葉に言いそびれ

母ちゃんの抱っこで跳んだ水たまり

今治市 野村清美

駄々こねた孫に今では労られ

カラフルな色で傘咲く梅雨晴れ間

下駄箱に亡母の蛇の目を眠らせる

ピーマンの肩怒らせる空威張り

十橋を渡る車の数珠つなぎ

今治市 渡邊伊津志

本質を見抜く園児の絵に出逢い

雄大な時間の中に入り逝き（矢野佳雲さんを偲ぶ）

灯台の死角で悪が呼吸する

巻き寿司へ気になる海苔の裏表

海の日白帆は僕の心の灯（巡視船勤務三十五年）

松山市 山之内八重美

さわやかな緑の中を試歩の杖

雨の音あきあき独り梅雨ごもり

美しいホテルの命短すぎ

悲しみも日にち薬と言う不思議

デコボコの道も笑顔で耐えて来た

香川県 向山治延

名人は湧水使いウドン打つ

木の陰の位置をかえつつ長話

縁談はないがいい人出来ました

ダイオキシンの野菜農家が悲鳴あげ

一步二步三步 尻もち初歩き

香川県 原賢

下駄箱の靴にも修羅の過去を秘め

借り返すまでは本音を伏せておく

相手まで目線を下げて本音聞く

正論で他人を傷つけ心揺れ

松の木が消える日本の世紀末

愛媛県 安野 案山子

せっかがくるくる寿司にするお昼

機関車の僕がよろける縄電車

作業着の疲れを落とす洗濯機

突然の介護保険に金がいる

爺婆を集めて移動販売車

高知県 近森 功

真つすぐに歩いて蟹は沢に落ち

良心市 鍵が店番まかされる

自分史の完結編は妻が書き

ドクターもナースも負けたはやり風邪

酒たばこ絶って命の修理する

高知県 百田 幸

ふと思うあといくとせを働ける

おだてられその気になって無理がすぎ

白牡丹五分咲き程でいて欲しい

綾ごろもよりも浴衣が似合う女

娘より嫁に気楽にものが言え

京都市 勝山 美千代

老いて尚 祇園ばやしに心馳せ

帯結ぶおなかの壁がじやまをする

販売機ボタン違えて無駄遣い

外出へ留守を子猫に頼んどく

瑞々しいお茶で季節の便り読む

京都市 高村 吉之助

スランプに陥ちて他人がよく見える

リストラの首ぶら提げて故里の駅

身を飾る科白は要らぬ花道よ

御破算で願えるほどの微罪もつ

行きずりの人の情けは名もつけず

京都府 前上 英一

送り火を一人占めするビルがある

雑草も花つけ自我を主張する

乗り合わせ座席の和む国訛

ご期待に添い兼ねますと女文字

横町もめつきり子らの声が減る

榎原市 西本 保夫

改築が終るしばらく寝てすごす

青畳このままで置くいい香り

これで全部退職金もゼロになる

改装費ボンと払えばいい気持ち

ひと安心老後はこれでいい暮し

野田市 那賀島 雅子

車椅子ちよつと斜めに夏帽子

空白を埋める言葉をさがしてる

梅雨に入るネクタイ派手な色に替え

ポックリと死ぬ話してすましてる

訪販の北の訛に買わされる

新潟県 高野 不二

目高さえ絶滅しそんな事を言う

評論家一つの見方してるだけ

血糖値今日はちよっぴり吞むとする

介護保険掛けてる方が幸せか

定年を無事に迎えたためでたい日

札幌市 三浦 強 一

島還る日を待っている父の背な

再会へ時間空間埋める酒

笛吹けば踊ってくれる妻がいる

乾盃へ孫のジュースも唱和する

年金で守る私の城がある

静岡市 増田 扶美

单身赴任身軽となって佗びし夜

漬け茄子の紺輝いて朝動く

口笛に二階の窓にVサイン

背伸びなどしない身軽な位置楽し

開発が砂浜消して漁夫も老い

静岡市 大村 正雄

出向でまた顔合わすくされ縁

掛け持ちの読経せわしい盆供養

戦友の分まで生きて八十路坂

右翼ではないが軍歌を歌います

武器売って平和を叫ぶ国もあり

和歌山市 土屋 起世子

浅漬の青に仕合せ噛みしめる

明日のこと風にまかせてネオン街

エアコンで日本の夏が遠くなる

真正面向けば私の森がある

車椅子押し手とベアの麦藁帽

和歌山市 上地 登美代

とどころ虫に食われたわらべ唄

老人力また試された向い風

またチャンスきつときそんな脈がうつ

自己主張しつかり通す豆の蔓

あんなことこんなことした垢洗う

和歌山市 水田 秀男

風鈴と蛍と金魚ある暮し

人間の傲りに耐えている地球

政情の醜さ叫べマス メディア

個人攻撃ハイエナ化したテレビ局

雑草の強さを親は教えない

尾崎市 尾宮 弘治

故里の海がリゾート地図に載る

自転車の父を追い越すクラクション

三拝九拝キツイと言えぬ二度の職

紫陽花が見頃と老母に招かれる

吠えたくもじつと耐えてる盲導犬

尼崎市 田 辺 鹿 太

母の忌に合わせて京の大文字

草笛の上手な父が頼もしい

冗談も過ぎると濁る夏の川

ばあちゃんが不倫のドラマ見てござる

条件が合えば右にも左にも

尼崎市 内 田 美也子

叱り声一緒に貰う夏帽子

ガーデニング軒下ずらり寡婦の夢

ときめきがほしく出かけたクラス会

若者と山を歩ける靴を買う

健脚が何よりうれし山登り

尼崎市 清 水 久美子

山開き富士に敬礼して進む

夕日落つ手前で十字切っている

少子化のサイズに合った暮し向き

ウイंकで落とした妻は拾い物

喧嘩して五分で鞄に戻る妻

神戸市 船 津 とみ子

会いたいと思う鹿児島遠い人

遠いからその恋しさは倍になる

清らかに生きるきれいに歯を磨く

度忘れをする友達のいい笑顔

気どらない友達だから好きになる

伊丹市 延寿庵 野 鶴

神棚の隅へあずけた夢ひとつ

草餅を食べていつとき法話聞く

トキセンター期待どおりヒナ育ち

ノム采配期待がかかるタイガース

隅々へ気くばりが利く女将の眼

三田市 北 野 哲 男

雲割れて月も当てなく顔を出し

休肝の予定阪神また乱し

新入社 皿回しして顔を売る

仏像は夏向きらしい皆薄着

四ッ橋の碑を見てそこら見て回る

篠山市 円 増 純 子

名刹の雨もまたよしクラス会

地ビールに押され地酒で勝負する

地ビールが一役買った村おこし

気の抜けたビールみたい待ちぼうけ

親の目へ見込み違いの子が育ち

兵庫県 徳 平 稔 子

ルビー婚 紅差し指に光ってる

紅生姜漬けて今年も初夏の風

寄せ書きに人柄露わベンのあと

孫可愛い嫁もだんだんよく見える

経文をやっと覚えて年感じ

兵庫県 谷 田 多美子
蟻二匹 畳を這ったばかりに

竹の下駄カランコロンと温泉場
茶の香りプームの過ぎた無人駅
納税をすませみどりの風に逢う
雑巾を干して女の顔になる

兵庫県 西山 八重子

坂越して来たのに八十路の坂がある
早苗持つ手かもどかしく山笑う
五十年りんごむく人食べる人
紅刷いて微笑をたたむ鏡掛け
ふわり飛ぶ優雅な蜩に届かぬ手

兵庫県 高見 末野

夏祭り今年もゆかた縫い上げる
一匹の蜩追いかけて孫と駆け
カラフルな色が出揃う梅雨あがり
ばあちやまは金の成る木だ夢を追う
独り居の部屋に子ねずみ遊びに來

島根県 菅 田 かつ子

雨つづきグリアを活けて気分変え(梅雨最中 5句)
雨あがり背伸びして見るアマリリス
紫陽花と気ままに遊ぶ蝸牛
10センチ飛んできよりと青蛙
手さぐりでポッケの小銭数えてみ

島根県 松本 聖子

風邪に寝てあれもこれもと気がもめる
初盆の仏具みがきへ蝶も来る
独り居はとなりがあつて助けられ
単身赴任うしろ姿がいじらしい
心配がまた増えました孫免許

島根県 武島 ちよえ

根を下ろす花にも土の選り好み
ありがたいことに毎日多忙です
褒めもせずくさしもせずに皿をあけ
雨しとど湿っぽくなる日記帳
朝顔の棚傾いて夏はゆく

松江市 山根 邦代

晴天で楽しさ倍の旅二日
感謝して幸せという暮らしする
無農薬母の味する茄子 胡瓜
母に似たおばさん昔語り出す
みどり葉がレースのようにされている

出雲市 加藤 スズコ

街の顔花が微笑む交差点
産声はやがて未来へひびき合う
もみじ添え涼盛る皿のところでん
割れた皿想い裁ち切る収集日
年金の喜び知らず逝った母

島根県 毛利 幸
枯れ松に蔦が巻きつき衣装替え

台風が今年のコース選んでる

踊りの輪飛び入り参加夏祭

初めての出会いが人の運を決め

連立は政権維持の苦肉策

島根県 福岡 博利

時たまはくだまく程に吞みたかろ

斐伊川の底にきれいなうろこ雲

二男坊投げ出す足のたのもしさ

食うものはあるのに舌まで噛んじやった

妻元氣 僕が留守番多くなり

倉吉市 牧野 芳光

島ひとつ買って世間を捨て去るか

このままで老いてゆくのか遠花火

簡単なことに理屈をつけたがる

日本語でないお経ですありがたや

魂は煙に骨は灰になる

岡山市 清水 金太郎

一言が過ぎて親子へ溝が出来

手術する妻を励ます手を握り

通院で未だ働けるのも幸せか

泣き顔を見られたくないサングラス

毎日のケンカ相手が入院し

米子市 森 協 麗

耀きたいから女の彩を足して行く

文月には恋しい亡父に文を書く

好き勝手言える夫居て今日も生き

夫という大樹の下で生かされて

向日葵の明るさばねに乗りきろう

米子市 猪 森 スミエ

出目金が睨んで猫を寄せつけず

ひまわりをちよいと活ける無人駅

輪になってひまわりさんになる園児

ぴかぴかの車で今日も職探し

つぎつぎと新車乗り換えまだ独身

鳥取市 近 藤 秋 星

株でも買って見ようと思う程貯まり

花回廊故郷に名所一つ増え

ふれあい広場市長が餅をついている

生きていくことが戦いならば勝て

眠られぬこんなに明るい月の夜は

鳥取市 有 沢 せつ子

弁当のように薬を持って出る

亡き母の写真を見れば見つめられ

おふくろと呼ぶ成年の第一歩

ふれて見て歩いて砂丘好きになる

のみこんだ一言胸に抱いて寝る

鳥取市 福永 ひかり

食べるだけ食べて薬を飲んでいる
トイレならまさか盗聴されるまい
跡継ぎがないから家は住みつぶす
少々と言えはかなりはいける口
遊ぶこと先にするから叱られる

鳥取市 宮脇 道子

口を開けメロデー呑んで歯の治療
この坂を越して地獄か極楽か
一つずつ物忘れして次の世へ
提灯を点けて老坂登ります
少しだけ不運がつづき名を換える

鳥取県 山岡 久枝

七坂を越えた翼が傷みだす
新緑に散歩の足が浮かれだす
七十の今が盛りとボール打つ
孫の芽がぐんぐん伸びて遠くなる
困っても明日の風を待ってみる

鳥取県 鳥羽 玲子

家計簿の黒字しばらく秘密とし
逆風も素直に受けて今日となり
浸蝕のうねりに浜も泣いている
読書欲静かな夜に燃えてくる
無難作にさよなら言った日が最期

鳥取県 橋谷 静江

ナスカボチャ土に期待をかけている
目を外らす孫へ口出ししないよう
独りごと聞いてくれてるかたつむり
自分にも分かる頑固へ胸痛む
変身の期待をかけて美容院

宇部市 高山 清子

抱いてとも言えずよろけて縋りつき
老いてなお募る想いに身を焦がす
句に託し募る想いを打ちあける
言い負けた夫黙って飲むお酒
すぐ切れる可愛いだけで育てた子

大阪府 立藏 信子

逢いに行けと鳩時計から命令
ひとり旅時計は見えないことにする
じゃあ男にいいえ女がいいのです
二番目にあなたが好きとなら言える
ふわり包んでもらったことを忘れない

大阪府 一本 勇太

盗み酒うましキッチンドリンカー
盆栽の接木へふつと我が余生
男ならその一言は洩らすまじ
自画像を破ると明日が見えてくる
齢の差もうまく噛み合う第二章

大阪市 三 浦 千津子

仲裁の間で揺れる小半日

受けて立とう手傷の数は恐れまい

束ね髪解いた女と飲み明かす

葉桜がより押し上げる天守閣

春雷の一喝喰らう二日酔い

大阪市 榎 本 舞 夢

台所居心地の良いお城です

気が付くと私父ちゃんよく叱る

本物が見たく今朝から並んでる

満点の男なんかはつまらない

おもちゃ箱井戸端会議弾んでる

大阪市 亀 井 円 女

幸せでした青い鳥には逢えぬとも

ガンよ来たけりや先の短いわたくしに

サッチーの肩に食い込む罪と罰

盆栽は鉢のつらさ忘れない

あじさい故見るに忍びぬ枯れ姿

大阪市 小 泉 ひさ乃

銀婚の娘を祝う親の幸

つつこみと惚けの夫婦で五十年

クラス会女の口は良く動く

親切を人それぞれの受け答え

補聴器はまだ要らないと聞き直し

大阪市 中 井 正 秀

通り抜けタコ焼摘まむ花の下

見ておれんから言うのだと子に意見

鶯よその鳴きかたはおかしいぞ

タマの所為さっぱり小鳥こなくなる

年金へたらん足りんとばやく妻

堺市 梶 本 哲 平

片想い鈴をころがすような声

片想い目線が合うとうろたえる

片想いこころ浮き立つ今日会える

片想い生涯こころ明かすまい

片想い眼をつむれば逢えるひと

堺市 和 田 つづや

ゲーム機の少年達に夏はない

焼き鳥賊のような輪切りでレントゲン

僕のこと僕が一番判らない

きっぱりと答える嘘を見抜けない

素裸になると聞こえる声がある

堺市 見 本 ちや子

ナイヤガラで夕日と虹に迎えられ

母なれば山乗り越える術を知る

霧が晴れ運が開けて来る予感

その時はなるようになるあしたの絵

置時計いつも三分進めとく

堺市 村上靖雄

夕食の会話弾まぬ休肝日

酒席だけ血気盛んな人がある

バーゲンで買った値札は捨ててくる

湯けむりに初秋感じる露天風呂

同病の訃報が胸に突き刺さる

堺市 斎藤 さくら

年老いた母を息子が背負ってる

子が論す世間色々気を付けや

朝日差し真つ赤な夕日受けて住む

喧嘩した夫の寝顔見たくない

解散を望んでいない小淵さん

豊中市 岸田 知香子

堅物の親に同棲言いそびれ

小商いの夜のくつろぎ趣味多才

夕茜昼の豪雨の置き土産

豪雨後素知らぬ顔の川面です

荒神さん熟女参道うめつくし

高槻市 生田 義一

誕生日孫に付き合いハンバーグ

日本だけ国旗国歌でもめるのは

数減らし三つで売れる串だんご

同窓会大学教授もおいお前

川柳塔幼馴染の名を見付け

高槻市 執行 稲子

晴耕も雨読も楽し梅雨晴れ間

八等身昔ばなしになりにけり

老いじたく天井知らぬいらち癖

幸せかい黄色いリボン少し揺れ

天の川晴ればれ渡る恋月夜

高槻市 西谷 治三郎

おばさんが片手運転タバコ吸う

振興券持つてる孫とコンビニへ

言うことを忘れてしまう長電話

腐るほど米があるのになぜ不況

謙遜か傲慢かわからんおとしより

高槻市 左右田 泰雄

人ごみに押し流されてゆく孤独

巻き舌のせりふがにくい男伊達

コロツケも串にさされて聞くタンゴ

ひっそりと一人暮しの灯が点る

城壁の思い思いの石のかお

吹田市 後藤 志津香

仏像にこだわり続け旅をする

私を照らしてくれる弥陀の慈悲

平等院如来の前で亡母を恋う

いきいきとやる気の人はい美しい

控え目で個性豊かな美人妻

吹田市 須磨活恵

豊かさの中で情けが涸れてゆく

深緑五臓六腑が癒される

一杯の新茶に雑念を払う

主婦じゃない私に戻り本を読む

散ってなおブライド高きばらの棘

交野市 森本益弘

夕食はカレーライスの休肝日

振興券パパのタバコに消えちゃった

友に出す手紙ワープロなら書ける

笹の葉に吊した願い重すぎる

街の灯に消されて見えぬ天の川

東大阪市 北村賢子

みぞおちにバラを咲かせてつくる顔

物よりもところが欲しい亡父だった

眠られへん ひつじは味方してくれず

娘来て柔和な顔になる夫

まろやかに浮世の憂さを溶かす酒

八尾市 中島春江

バスガイドよくもあんなにしゃべられる

ポックリ寺参り延命ねがつてる

何げないその一言が火種とは

夏休み孫は来てよし去んでよし

あの人はおせっかいだが親切で

羽曳野市 川口信子

一つ覚え一つ忘れる老いの日々

迷ってる心知ってるコンパクト

飾らない元気な声が受話器から

幸せは自分に過ぎた夫が居る

リストラで社長と専務だけ残る

羽曳野市 川田晋

太るのは覚悟で舌を楽しませ

折角の減量ファイにするツアー

地下売場おやつ気分で試食する

歯を抜いた悔いを入れ歯が噛みしめる

何となく押されるような古希の坂

羽曳野市 安芸田泰子

七夕へ二人一つの願いごと

嬌声は少女の如く蜚追う

真夏日へ季節そむいた柿みかん

結局は食べてしゃべった勉強会

年金の話ではずむクラス会

羽曳野市 森田四三郎

振り向けず片手をあげてさようなら

鼻ピアス茶髪の顔も牛に見え

リストラで勤労感謝の日も忘れ

大変だオウムがまたも顔を出す

呆けと突込みサッチミッチのトークショー

富田林市 中井アキ

腹の虫おさまるまでを草むしり
雨雲が低くて争いごと続く
好奇心またわき道へ動き出す
メロンが届いてひとりに大きすぎ
八月のキノコがよぎる雲の峰

富田林市 山原昭水

検診すみ花月で笑い大ジョッキ
再会は昔のままの焼鳥屋
バイクに夢中おしゃれも恋もしない二女
満腹になって仏のような顔
なんでやろ妻が民法読んでいる

富田林市 大橋鐘造

シナリオになかった今日のグッドバイ
時どきは鬼の顔するコンパクト
はつきりと言えば冷たい風が吹く
雷も落せぬ父の独り言
クラス会歳を値引きの若造り

河内長野市 杉谷カズエ

八十二あんだ一番歳若い
つけかけを責める口調のみんな靴
上げ下げに相撲よろしく敷布団
デーサービス無口な人の車椅子
自己紹介卒寿に熱い拍手わく

河内長野市 大西文次

新しい靴でとりたくなる歩調
北で待ち南で飲んで御前様
辛抱は私がしたと妻は言う
背もたれの椅子リストラで落ちつかず
青い鳥追わず人生マイペース

和泉市 横山捷也

父の席残したままで一周忌
楽譜ない妻のタクトに踊らされ
宝にも負担にもなる遺産分け
咳一つして留守電にメッセージ
幸せが垣根を越して聞こえます

貝塚市 吉道時子

手の届く所に辞書を置いている
能力はないがへそくり溜めている
おいしいごはん今日のリズムが始まった
落とし穴が調子に乗ると待っている
表札もなぜか右肩下がりです

大阪府 澤田和重

アリバイを監視カメラにしてもらう
武勇伝のように見せてる手術あと
大胆に脱いで診察してもらう
いつも遅い人が一番乗りでくる
よくひびく声だお通夜むきでない

大阪市 中澤伽羅

伸びをして五体満足たしかめる

こおり水ふくみゆつくりメニユー見る

アイスノン枕に夏をやり過ぐす

満点に近い夫婦で別居中

大阪市 榎本日の出

栄転と喜んでいる横すべり

無理しないお付合いなら長続き

乗る前はきちんとみんな並んでる

家族でも時どきサミットすることに

大阪市 伊藤博仁

チャルメラをテープで流し軽が行く

葛橋舅嫁が渡り姑は待ち

落人の生きざま偲ぶ蕎麦の粥

七夕に父に仕事と書きました

大阪市 中村叡子

お経読む声に夫の健康度

ひっそりと金も遣わず夫婦旅

孫とする約束ママの気に召さず

原発の水漏れもつとさわがねば

大阪市 奥村五月

床料理川のせせらぎ聞きながら

安い判登録されていばりだす

カラオケで内気な女房さまになり

不景気はもうかりまっか聞きにくい

大阪市 大川道子

二世議員親のひかりに甘んじる

ため息が増える心が病んでくる

おたがいの訛り飛びだす国自慢

山歩き私の歩幅せまくなる

大阪市 星野ひさ

晴れ女も看板外す長い雨

母さんの娘でよかったとおべんちゃら

ジーパンの膝からのぞく若い顔

空き腹で試食するのは止めにする

大阪市 熊代美智子

もう一つ重ねた嘘に羽交いじめ

満点をあげたい妻は先に逝き

嬉しさを腹にしまってすまし顔

一周忌娘の知らぬ母があり

大阪市 尾崎黄紅

古きよき時代三本立映画

銃持てぬ国で銃持つやから達

通り抜けして卒業と偽った

斬られ役だったからこそ敵がない

高槻市 乙倉武史

やる事が半端神様お見通し

浪費癖往生するまで直るまい

適量を摂れば食べもの皆薬

恩返し出来ぬがせて幕参り

寢屋川市 井上 すみれ

有難い木魚の音に眠くなり

六代のご先祖守る藪つばき

若かったセッセと縫った糸切り歯

遠くからの大声過ぎるスポーツ隊

枚方市 二宮 紫鳳

雨のキスうけてあじさい艶を増し

梅雨晴れにふとんたたいてうさ晴らし

息子との対話は唯一手弁当

大輪のぼたんになぜか気おくれす

枚方市 大昇 隆広

誰恋うや赤の蛇の目が路地急ぐ

なつかしい景色消しゆき郷活きる

無人駅なれど律義な古時計

Uターンし地元リーグのにかファン

東大阪市 今岡 貞人

花束の一つが抱いている野心

幾山河越えて日の丸美しい

山も野も緑の旗を振りだした

決断の勇氣のかげにある情け

八尾市 田中 トシエ

一日の重みをはかるバスルーム

おふくろの味若者にはやる店

孫が来て乾いた空気潤わす

ポーナスの袋のかるさ気の重さ

八尾市 山本 宏

年毎に小さくなった針の穴

ライバルとは低目の球で勝負する

泣き言を笑い話でする娘

なつかしくこわい先生夢に出る

八尾市 井尻 民子

叱る子に猫が一番先に逃げ

カルガモにあやかりたいねニッポニア

積乱雲バス降りてから急ぎ足

何が気にいらぬか波が牙をむく

松原市 和氣 慶一

吉本に先ず行きたいと江戸の人

袴を脱いで人間らしくなる

禿鷹の群れ思わせるワイドショー

反論の台詞すさまじサッチー節

羽曳野市 永田 章司

コンクリー塊ノストラダムスの子兆かも

七夕の短冊に書く秘めた恋

血糖値 血圧測る朝の章

蛇の目傘今は舞台の小道具に

羽曳野市 西村 りつえ

炎天下元気をくれる百日紅

腹立ちに庖丁荒れて指きざみ

翔べもせずせめて変身サンングラス

うす味に男ならされ踏ん張れぬ

羽曳野市 山本 たけし

日が暮れて今日反省の誕生日

さくら 藤 紫陽花 おわり夏来たる

竹馬の孫に喝采保育園

割り勘は下戸の僕には容赦なく

藤井寺市 岸 本 寿 代

銀鱗の母のよろこぶ鮎とどく

夫ゆきて山積みの本値打ちなし

恋してる目の輝きが語ってる

失敗し傷つきながら生きてゆく

藤井寺市 太 田 扶美代

父の忌へ銘々地酒さげてくる

亡父亡母の想い出があるかき氷

飾らない愛 具だくさんのお味噌汁

きみ騙すには高すぎる今日の空

河内長野市 印 藤 智 子

診察に今日も顔ぶれ揃ってる

天気など気にせぬ若い二人連れ

ロングドレス 駅の階段無事おりの

よそ様の犬 ちゃん付けて呼ぶ時代

河内長野市 水 谷 正 子

黙ってた方が賢く見えたのに

長電話夫出てゆき帰って来

深い仲いいえお金を借りただけ

八月の熱い黙禱まだ続く

岸和田市 村 垣 鹿太郎

桜鯛米寿の席で跳ねている

ど忘れにまた字引ひく老いの日々

指をくる五七五に妻笑う

旅を恋う地図を広げて梅雨ごもり

泉佐野市 備 後 三代子

介護保険手が届くかなかゆいとこ

またしても端のわからぬセロテープ

油頭のハンカチ汗は拭かぬもの

孫の絵をもらい額縁高くつき

泉佐野市 稲 葉 洋

うちの子も大輔だけどフリーター

イチローの先輩だよと田の案山子

職歴にくらべ学歴二三行

雑歴が定年以後の役にたち

鳥取県 西 垣 美知子

古里はやつぱりいいな蛍とぶ

人情も一緒につめたユーバック

雨の音聞いてゆっくり朝寝する

最高の笑顔心に植え付ける

鳥取県 鳥 羽 直 市

阪神に野球の夢を賭けなおす

さわやかに趣味を糧とし生きてゆく

耐え抜いた思い出どれも懐かしい

一匹の百足おんなを寝させない

鳥取県 藤山弘子
ストレスがやがてあちこち痛めつけ
庭先へオアシス求め鳥が来る

もぎたての野菜が並ぶモーニング
便利さと自然破壊へ怒る鳥

鳥取県 加藤公子

開票の速報全身耳になる

どちらにもあげたい票の間柄
街角の募金に立って知る温み

警報中 雨水箒をジャンプする

鳥取県 竹森富久江

人権を尊ぶ町も風雨あり

生きがいの花にたくして老いた母

ひとの親こころ休まる時がない

ふところに失敗おさめ海はなが

鳥取県 高尾京

南天の花房彩る小さき庭

核保有平和実現出来ぬ世に

同齡のひめゆり乙女偲ぶ夏

道譲る女子高生に感謝する

米子市 小塩智加恵

お互いに痛み持つから長話

六人でテレビ四台フル回転

造られた美人が並ぶコンテスト

年よりも老けて読まれる地味好み

鳥取市 夏目健一

恋唄に犯され古い傷いたむ
嫌なこと始めに言って様子みる

目的が叶わぬ時の知らん顔
休銭日つくる退職後の哀れ

鳥取市 中村金祥

増税のために減税繰返す

三枚目苦しまぎれのラッパ吹く

腹立ちの包みを解いてビール注ぐ

外面が良過ぎ妻から叱られる

(前月分) 鳥取市 岡田信恵

突然の指名に赤くなるばかり

年金で背伸びをしない歩幅です

手を出して口もだしすぎ和がとれず

ふれあつて長い付き合ひ味があり

鳥取市 岡田信恵

五月晴 背伸びしながら旅を練る

懐かしい再会できて心の芽

しょんぼりとハートの整理落ちこむな

ショック受け落ちこむ時に友の愛

出雲市 岡あきら

基仇が僕の右脳を揺りおこす

だんだんと記憶の蓋がずれて来る

そよ風にお出掛けらしいパフ弾む

喜んでもらった汗だ爽やかだ

岡山県 土居 ひでの

今日も明日も実年飾る地図を持ち
ストレスも期待も背負うランドセル
父さんが一番長い影法師
辛酸を嘗めた夫婦で気を許し

宇部市 中田 忠夫

妻が来てどつと茶の間に出る笑い
ブランコの揺れに任せているゆとり
使い捨てカメラ意外によく写り
失敗に怯えていては名がすたる

福岡県 岩崎 和女

物音に聴覚冴える午前二時
あと戻り出来ない歳でまだ喧嘩
庭先へいじめに遭った二羽の鳩
持つてこぬ時に撮りたくなるカメラ

鳴門市 八木 芳水

エリートも分別なくす満員車
捨て台詞残してあとは知らん顔
青空にフラーフラーと出て無職
核心をちょこつとそれたよい意見

香川県 瀧井 勝

然り気無く隠す貴方を見てしまい
先入観強く行間読み違え
咲いた花精一杯の使命感
夢に見る御馳走食ったことがない

今治市 越智 青園

イエスカノーかいつも決断迫る父
心向けると風鈴が話しかけ
すぐ対話とぎれてしまう暑い午後
締め切りがないからたまる家事仕事

愛媛県 宮本 末子

一日に命をかける時計草
つり銭で財布ふくらむ消費税
目移りの果てに選んだ毒の花
日帰りの旅ものがさぬ常備薬

和歌山市 武本 碧

泣きにくる膝はいつでも空けておく
冷や汗にポツポツ濡れる胸の芯
自信ある時はハードル低く見え
わかばマーク付けてゆとりの中に居る

和歌山市 森口 美羽

愛していると呪文のように言う狡さ
胸に抱く消化不良の愛がある
あなたには負けたわと言う思いやり
雑草も愛おしくなる孤独な日

和歌山県 村中 悦男

姿見の見たいところが映らない
手術跡湯船でそつとなでてやる
スーパリーのチラシ梯子の妻を乗せ
自動車酒をことわる種にされ

和歌山県 中村君枝

紫陽花どき雨も予定に入れておく

妻よりも鈍い夫で狂わない

白無垢もすっかり染まる夫婦暦

前進も正直だけという取り柄

三重県 尾崎勤

車座に片膝だけのお付き合ひ

暗算はできない電卓の右手

貸した傘忘れ笑顔で寄つて来る

決断は妻が背を押すだけのこと

川西市 西内朋月

長電話きれずにウドンが伸びてくる

風邪ひいて家に居るはず電話する

初恋は鳳仙花の実別れた日

公園の蟬の脱けがら木に残り

川西市 田中喜俊

外出は医者か散髪おきまりだ

梅雨空の眼をみはらせる傘の色

梅雨の庭のびた枝葉でうす暗い

縁側で抹茶がほしい梅雨なかば

伊丹市 桎谷郁子

世間には正論阻むトゲがある

遠き日の恋のかけらか星ひかる

叱られて野心が頭持ち上げる

しまなみの海道を讀えてる

尼崎市 森安夢之助

不況風に押し潰された三代目

話し上手が霧囲気を盛りあげる

裏の顔むき出しにして遺産分け

へそくりを溜めて強気になっている

尼崎市 河津正治

明日咲く花待ち遠し雨の午後

雨の日は雨の風情の糸桜

独り碁の泣きを聞くワンカップ

ときめきを吞んだボストの赤い顔

兵庫県 安達厚

行きたいが欠席と書くクラス会

えらそうに言うても妻が頼りです

死ぬるまで付き合う病また一つ

宝物亡母の便りを整理する

篠山市 倉垣恵美

むらさきの雨 花菖蒲あじさいへ

どくだみ茶それじや一杯戴くわ

おとなりと心底埋めた溝じやない

完熟のトマトの魅力かぶりつく

宝塚市 飯西ミサヲ

とうの昔捨てた気もする捜し物

忘れてねそんな言葉がつきまとい

夢だろかこわれる程に抱いたのは

万歩計時どき狂って喜ばせ

横浜市 伊藤ふみ

病院の燻る窓に花を置く
呼び込みの活気につられ魚買う
雷に負けるものかと鍋磨く
サイコロの一振り足の向き決める

横浜市 芦田鈴美

饒舌になって容態危ぶまれ
草取りを怠けて会えたねじり花
新品の傘が待ってる雨マーク
曖昧な絵手紙にある暖かさ

横浜市 平達也

振り返る泣きと笑いの九十九坂
妙薬は妻の励まし孫の顔
追伸に本音を込めて手紙書く
気取ること先に覚えた管理職

横浜市 三村八重子

オーイお茶かなわぬ夢の共白髪
訃報きて俄かに回る走馬灯
麦畑亡父の帽子が見えかくれ
役職がついて張りきる靴の紐

横浜市 福田由美子

血圧を下げる薬は夫婦仲
ボナスが家族の機嫌左右する
自販機で飼い主を待つカブト虫
故障して有難さ知る洗濯機

川崎市 和泉あかり

玄関の外で待たせる濡れた傘
故里の直行便は泥をつけ
村捨てて村のその後を気にかける
水色で流れて川が美しい

東京都 清原悦子

ケチケチの旅に幸せもらってる
日に二回洗濯をした子育て期
ヤッホーと思わず言った頂上で
不細工に生きて楽しい事を知り

静岡県 中西雅

薬の数かぞえなおして朝光る
鯉のぼり風軽々と泳がせる
主人とは言わず名を呼ぶえらい妻
白檀の扇子の香り過去の旅

浜松市 田中知行

貯金してどこか貧しい盆が来る
ポケモンが布団の中にしのびいる
百点をとったと下ろすランドセル
駅を出て東京ひろし夏期講習

鳥取県 平井栄翁

会席に無い味がある縄のれん
一合の酒が無口を喋らせる
老いて来て甘味の出ない父の脛
ゆっくりと立つも座るも八十路坂

鳥取市 松本 つね子

久びさに友の絵手紙胸踊る
朝一番時事川柳に目が走る
孤独でも孫のビデオに救われる

鳥取市 山本 益子

ひまつぶしツボの本読み試し見る
原爆忌 平和な国に水をさす
風鈴の軽い音色に睡魔来る

鳥取市 西尾 敬之介

雨蛙早う逃げろよ蛇が居る
草むらの蛍よ灯消さないか
蛍追う児ら暗闇に足とられ

鳥取市 谷岡 清子

いい人がこぬかとうぬばれの化粧
宙返りして巢床見る親つばめ
友の訃に生命線をしかと見る

鳥取市 福島 庸二

乾杯の音頭忘れて長話
飲む薬気分で効き目左右され
やりくりで浮かしたお金すぐに消え

松江市 松浦 登志子

初夏の風出会いうれしいサクランボ
携帯で尾行されてるような旅
ひざ良好血圧良しと旅に発つ

松江市 小川 注湖

今の世は打たれる程の杭でよし
得意手が土俵で花を咲かせてる
ダイエット過ぎて切ない艶が失せ

益田市 岡田 たけを

聞こえない振りして風の小言聞く
物干しで家族が揺れるつゆ晴れ間
ちよつとねと寄った女の長話

出雲市 城 多喜

生きているあれやこれやも背に負って
ほろほろと手まで泣いてる乱れた字
安らぎをくれる私の古机

倉吉市 大下 智子

老父母がよろよろ生きる村は過疎
葬式で一口飲んだ酒に酔う
瘦せたつてどうせ誰もが気づかない

岡山県 国米 きくゑ

不器用な手だが握ると温かい
手作りという不揃いの温かさ
シルバーの特技が光るボランテИА

倉敷市 森本文子

理由あつて家族パーティー花も食べ
笑い声欲しく句会へまぎれ込み
ボロ着ても心に愛の花かざる

倉敷市 家守政子

いちばんに嬉しいことは今元氣
シルバーカー右往左往の梅雨晴れ間
肩パット外して佳い日友見舞う

唐津市 岩崎實

分身のように古着も捨てきれず
一日の早さに慣れてゆく体
留学を前に帰省の日を知らせ

尼崎市 軸丸勝巳

父の日の文旦飴に娘の思い
車座で同病語るクラス会
景氣指標 庶民の肌ピンと来ず

姫路市 服部一典

人生の余白は妻を看るばかり
車椅子立ち入り禁止へ注意され
その時へ悔いないように妻を看る

兵庫県 山本泰子

なりゆきで継いでしまった野良仕事
天神さん鰻の料理が食べたいよ
めんどろな言い訳いやで受けた役

兵庫県 広瀬房江

子がくれた越の寒梅チビリチビ
懸命に咲いてる花がいじらしい
待つ人の来ぬ集まりの空しさよ

兵庫県 黒崎美紗子

菜園が面白いからやめられぬ
飼われてた犬らしバスに物ねだる
嫁に来ていつか家風の味出来る

徳島県 安宅美代子

バラ真っ赤とかく女は愚痴が好き
その昔噂を派手にした野良着
馬鹿話へコーヒーうんと濃うくする

高知県 桑名孝雄

遊びあるハンドルだから生きられる
人間ドックそろそろ敵のお出まし
反対屋次の動員待っている

香川県 松村輝夫

人の目を気にせず住むと楽になる
正確に合わすと時計狂てくる
子沢山怒り笑って住み慣れる

愛媛県 藤山太朗

山のむこうがほんとに見えた肩車
風みどりむちむちの乳を提げ
妻でない人が三途で待っている

今治市 加川はく文

ないものがない幸せと不幸せ
すこし傾いて身寄りのないお墓
五月闇 探す言葉が見つからず(佳雲さん逝く)

横浜 福 島 かづ子
姑の笑顔にハート風いでゆく
なべのそこ光らせ雨の憂さ晴らす
九十の老母節約忘れない

横浜 豊 田 羊 子
近そうに見え矢印に踊らされ
診察を待つ小半日の元氣
どうしたと予言をつつく雀たち

横浜 生 坂 サト子
飲み込めぬ一言で今 内輪揉め
句作りにヒントをもらうコラム欄
手習いの夫の習字が二重丸

横浜 小 野 句多留
バスポートアバンチュールのつけを負い
冥土への案内 美人使者予約
料理下手 掃除嫌いで外が好き

横浜 金 森 徳 三
どっこいしょ老人力が座りこむ
夏ぶとん替えたその夜に風邪をひき
朝顔の蕾 明日は晴れて欲し

横浜 保 田 絹 子
自己流の見立てで風邪を拗ねらせる
相槌を打ちつつ料理平らげる
広辞苑天眼鏡の眼がぼやく

横浜 近 藤 道 子
一つこと夢中になつて鍋焦がす
通り雨雷一つ置いていく
万歩計二度三度見る散歩道

吹田市 三 浦 憩
氷山を食べてるようなかき氷
独裁者夫婦茶碗は耐えている
天然水飲んで水道水を詰め

吹田市 大 谷 篤 子
目覚ましも朝寝してます日曜日
犬でさえ拾われた恩忘れない
点滴でようやく楽になる呼吸

八尾市 鷺 見 章
快晴の窓に向かいて深呼吸
リハビリの朝を流れる流行歌
昼食がすんでベッドで新喜劇

堺 市 荻 野 正 雄
吉日に扇子交わしたのに破談
酒飲めぬ故人を偲び酒を飲む
爪口目顔と塗ったが塗れぬ歳

岸和田市 宮 野 みつ江
グルメマップ抱いて女の小旅行
絵にあった二月堂への道に付つ
いいことがありそう古都の笠の虹

岸和田市	亀井皎月	五パーセント慣れた頃みて七狙う 鯛を焼く見張り遅れて吠えられる 豌豆のごはんふつくら塩加減
岸和田市	不破仁緑	ギャル神興なにわ女のパワー知る 税金をバラ撒き首相得意顔 二重丸付けられてから肩が凝る
岸和田市	木村正剛	恥じらいに皺くちや顔も紅葉色 争いの火種かかえる田一枚 物言わぬ貝を決めこみ日向ぼこ
河内長野市	木太久正一	夏休みからだ整え孫を待ち 優優は蝶よ花よのひとりっ子 君が代の君の解釈いく通り
泉佐野市	大工静子	吾が足とひまごの足とは反比例 灰皿でこがした畳かくして 転びつつ九十の坂のぼり来た
高槻市	江原秀夫	じわじわと心温もるひとといふ いい話決まったらしい畳替え 笹舟の二人余生は波まかせ

秋田県	湊修水	絵はがきで幸せ届くハネムーン 核見せて援助を迫るしたたかさ 老人力自己催眠で夏を越す
滋賀県	中宗明	通販のカタログ座右にお洒落する 親と子がサイクリングで垣根消す バラバラの意見まとめる休み前
尾張旭市	三浦きぬ	白髪が好きよと言うは強がりよ この夏も無事に越せよと鳴る風鈴 赤ワインに替えて休肝日よさらば
日立市	加藤権悟	空中を消毒へりが飛ぶ田圃 雷雲がむくむく父の貌になる 尺玉を夜空彩る大アート
京都市	三宅満子	蚊取線香犬も催促雨あがり 錦鯉ずっと泳いでいてやせず し残しがいっぱいあって今逝けぬ
奈良市	田中賢治	朝顔の好きな色から水を遣り おしまいの仕掛け花火に月覗き 地響きの国道沿いは雨戸閉め

和歌山市 福 重 美 子

箸置きになつていないか考える
未だ若いつもりいつしか秋の風
なるほどと立派な話すぐ忘れ

和歌山市 上 地 忍

健康食三日ともたず茶粥たく
好きなよに泳いでいます今の嫁
旋風去つてほつれ毛梳く女

和歌山県 杉 山 精 子

訪ねればきつと開ける突破口
貫いた一点の灯が眩しかり
一服の茶碗に初夏の匂い立つ

安来市 原 煩 悩 児

川の字に寝た夢母は忘れない
しみじみと拝む故郷の盆の月
三世を誓つた女房泣かすまい

大阪市 平 井 露 芳

万歩計つけても亀さん動かない
マスコミがメダカの学校探したり
効き目より先に出て来た副作用

東京都 井 上 つよし

生ビール欣求浄土の泡が立つ
着る服にやさしい妻がこうるさく
海原に潮吹く魚消えてゆき（高知の友達く）

八尾市 高 橋 明 子

乱れ咲くコスモスの庭広く見え
ポックリと逝けば誰でも逝きたいわ

豊中市 み き わきみ

停年後息子の古着着てすごす
余生とや食事食事が大仕事

兵庫県 北 川 とみ子

出稼ぎの靴が泣いた日笑つた日
つまりけば人の心は遠くなる

出雲市 梅 ミツエ

ストレスを時々畑へ捨てに行く
出来たてのトマトと茄子にキツスする

田辺市 大 峠 可 動

嬉しくて少しふざけた病み上り
幾山河くるりくるりと波にゆれ



（つづき）

十和田市 小笠原 敏 人

公共の電波をサッチーだけに充て
浪人は日曜日には閉じこもり
草取りに飽きて庭木を鋏むふり
深夜バス他人の眠りを気にかける

沙湖抄

八木千代選

生きるための小さな虫に刺されたり
立葵 不器用すぎる生き方よ
まだハズレ券とは決まっていな紙
満開にさせて花屋は売れ残り
カタカナ語字典はすぐに古くなる
逆立ちのかたちに挑戦状がある
自画像があり勲章を辞退する
てのひらの窪みで動く産卵期
冗談がキツイピーマンは空っぱ
この花も苦しみ抜いて枯れてゆく
水底にあるじょーカーをみつけたり
さあどっち白い椿と赤い薔薇
そのうちに歩けなくなる散歩道
記憶の河にちちの歴ははの歴
すり減った爪 トレモロを繰り返す
皿割った日から無口な鳥になる
降りつく空からとどくさくらんぼ
菜箸の長さを夫もてあます
雲が重くて日時計が進めない
夜行列車わたしの位置をたしかめる

吹田市	和歌山市	西宮市	横浜市	富田林市	和歌山市	鳥取県	大山市	鳥取県	米子市	和歌山市	松原市	富田林市	同	横浜市	大宮市	西宮市	尼崎市
山本希久子	川上 大輪	佐藤 季穎	清水 潮華	藤田 泰子	野々 圭子	新家 完司	早川 盛夫	土橋 螢	茂理 高代	川上 富湖	古久保和子	池 森子	同	菱田 満秋	新井 朋子	奥田みつ子	春城 年代

愛しさをあざなう いのち引き替えに
破竹を削いで今日の曇りをやりすこす
終りが怖くて踊りつづけて居る
一本のばらに観察されている
国民の行事のようにウォーキング
自らの位置わきまえている音符
売れそうで秋のコントを描いている
くつついたおれで梅雨の日のお釣り
もう買わぬもう飼わないと金魚の死
いい天気だ翼の虫干しをしよう
なさけない自分を白に塗りつぶす
うつむいて歩くと亡母が悲しがる
先頭に立つたら列を逃げられぬ
楽しみはいつも花屋で買っている
鱗おちてもとの暮らしを吊っている
ゆつくりと帆は西方を向いている
ネジ一本抜けた顔して昼の月
分母にはすべての命おいておく
打てば鳴る太鼓だそっとしておこう
幻の百合と出遇って狂い出し
手軽には振れぬ漬しの効かぬ首
とても静かに私の海が荒れている
断崖を涙のように落ちる石
天上の青が心に落ちてから
小さな川に小さな橋が掛けてある
曲がり角どう生きるかは君次第

富田林市	倉吉市	和歌山市	弘前市	八尾市	鳥取県	弘前市	愛媛県	米子市	和歌山市	鳥取県	寝屋川市	藤井寺市	米子市	今治市	香芝市	鳥取県	寝屋川市	藤井寺市	海南市	米子市	西宮市	羽曳野市	島根県	
片岡智恵子	淡路ゆり子	榎原 公子	福士 慕情	高橋 夕花	小西 雄々	岡本 花匠	中居 善信	白根 ふみ	木本 朱夏	石谷美恵子	籠島 恵子	太田扶美代	林 瑞枝	塩路よしみ	大内 朝子	土橋はるお	森 茜	高田美代子	三宅 保州	足立由美子	西口いわゑ	吉川 寿美	政岡日枝子	松本 文子

死ぬために生きているなと思う日も
 これからは五体に鞭は打つまいぞ
 駅からの距離がしんどくなつてくる
 神に出す便り時々書いている
 死ぬ事を忘れて生きておりました
 冬許す気持ちにさせる夏の空
 張り裂ける明日を包んでいる柘榴
 頭痛薬未練も消してくれますか
 ジーンブライドへ籠いっぱいのサクランボ
 終らない仕事に挑む髪音
 顔色をとるとき変える 海の藍
 気合入れて残りの旅を歩かねば
 月見草 夜咲く理由は話さない
 アド레스の朱を連れてゆくうろこ雲
 何時からか端数になっていた私
 どこまでが本当ですか太鼓の音
 貧乏くじばかりではない袋帯
 わたくしが嫌いか豆の芽が出ない
 潔癖すぎるので少し泥を混ぜる
 理数科は不得手 大きな掌の男
 初対面 百済観音ノッポだな
 消すほどの轍の跡のないわたし
 薄っぺらな心がすぐに反りたがる
 幸せを掴む手だからよく洗う
 それからの風の物語を聞こう
 月見草のように宵から落ちつかぬ

米子市	石垣	花子
鳥取県	谷口	次男
八尾市	高杉	千歩
綾部市	藤田	芳郎
岡山県	富坂	志重
出雲市	竹治	かし
和歌山市	桜井	千秀
松江市	川本	畔
大阪市	板東	倫子
弘前市	斉藤	あ
尼崎市	春城	武庫坊
米子市	青戸	田鶴
島根県	伊藤	寿美
鳥取市	徳田	ひろこ
富田林市	中井	アキ
岡山県	小林	妻子
和歌山市	牛尾	緑良
横浜市	豊田	羊子
大阪市	神夏	磯典子
倉敷市	小野	克枝
豊中市	田中	正坊
横浜市	山下	省子
鳥取県	岩崎	みさ江
吹田市	石原	靖巳
砂川市	大橋	政良
唐津市	井上	勝視

羅漢さんに尋ねたいことたとあり
 二代目の袴がまだ身につかぬ
 乗り換えの切符をくれた栗ごはん
 影法師お前もベガを見たのか
 一度でも三味の音聞くと癖になる
 ついて来ぬ妻にこの頃お追従
 色褪せた匙で掬っている余生
 移り気の紫陽花同罪のわたし
 怪談が記念写真のネガにある
 すんなりと女になれぬくすり指
 運の良い人はこころが美しい
 八月の海は頑固に目を覚ます
 いりこならあるぞ冷や酒でも飲むか
 絹糸をアチンと切れぬ 寂しい歯
 現在地探しあぐねる六十七
 ささくれた風がささやく世紀末
 ごみ溜めで光らぬ俺はやはりごみ
 愛想笑いしながら鬼がやって来た
 喉を越すビールが今をふくらます
 勇気出し美人の歳を聞いてみる
 数えて見たくなる朝顔の咲きはじめ
 花全身美しいとは限らない
 豆を煮る他に能なし今日も雨
 長雨の間に身辺整理する
 バクバクと金魚 鉢から宇宙吸う
 プライドの最期を送る胡蝶蘭

大阪府	町田	達子
横浜市	後藤	早智
羽曳野市	田中	透太
守口市	結城	君子
黒石市	相馬	一花
横浜市	保田	絹子
唐津市	久保	正剣
出雲市	園山	多賀子
唐津市	仁部	四郎
大和高田市	鍛原	千里
鳥取市	夏目	健一
鳥取県	土橋	睦子
美祿市	安平	次弘道
和歌山市	上地	忍
枚方市	前	たもつ
弘前市	一戸	ツネ
兵庫県	大谷	幸次郎
倉吉市	野口	節子
京都市	都倉	求芽
今治市	月原	宵明
寝屋川市	江口	度
和泉市	中川	楓
和歌山市	福本	英子
横浜市	山梨	雅子
米子市	中井	ゆき
横浜市	川島	良子

見守って下さい法事済みしました
経あげるいつか仏と響きたや

ジャンケンで負けて看護の役になる

此の町へ来るといつつも並ぶ店

じいちゃんの昔ばなしも底をつく

椅子取りの椅子になかなか座れない

コピ―だけでも倅せにはなれぬ

立ち読みの続き図書館まで続き

モノクロの写真に涙してしまふ

水平線 犬もいつしよに見えています

雑音がわたしを保育してくれる

難問が天にも地にも溢れだす

やるっきゃない後押しをする白い雲

棚卸ししよ わたしの脳の中

膝がしらがりとゆらぐ古いゆらぐ

ごみの日に人のこころが捨ててある

畑に出る 太陽さんと握手する

取り敢えず赤飯炊こう誕生日

やさしさを計る目盛りのない秤

思いでのかけらつないで生きる糧

十年前 螢絶えしと唄いう

幸福の木を半額で買ってくる

欲みんな捨てれば大の字になれる

賽の目の通りに生きて恙なし

心の傷の深さに詫びの届くまで

遠目にも奇麗な花は美しい

米子市 門脇 晶子

大阪市 三浦千津子

西宮市 門谷たず子

松原市 玉置 重人

倉吉市 米田 幸子

米子市 澤田 千春

枚方市 寺川 弘一

唐津市 相葉 あき

堺市 志田 千代

鳥取県 西原 艶子

大阪市 一本 勇太

鳥取市 録沢 風花

尼崎市 長浜 澄子

和歌山市 武本 碧

弘前市 佐治千加子

八尾市 村上 剛治

鳥取県 さえきやえ

横浜市 秋元 和可

和歌山市 吉村さち子

岡山県 矢内寿恵子

唐津市 山門 幸夫

倉吉市 牧野 芳光

富田林市 大橋 鐘造

高槻市 乙倉 武史

岡山県 山本 玉恵

出雲市 板垣 夢酔

常習にならぬならぬとハルシオン

野あざみは花瓶で窒息するという

葛蔓 境界線を越えている

会場は扇子の出番ありません

受け皿はあしたの風にまかせよう

茶碗から故郷のお米のいい匂い

美しく咲いて鉢に盗まれる

ロボットに尋問されているカード

裏口をたたくと表門開く

この街が好きで空缶拾ってる

さもあらん大物らしい腹芸だ

夏の陽に晒す向日葵と咲き

試食しに同病の人巡回中

葬儀屋が一覧表を出して見せ

杖に慣れ杖の有難さが分かり

門灯のふわり幸せらしくつき

春城年代さんの「刺されたり」は大きい句ですね。自分の生と虫の

生を同じに認め、これとて戦であって、刺されても「斬り込んだは

殊勝なり」と割り切れるおかしみ。誰にだつてある些事ながらも妙

にものがなく禅語とも聞こえます。奥田みつ子さんの「立葵」は

どうでしょう。生れつきなのか、暑い季節の花なのに葉のもとに下

の方から順次に咲いてゆく律儀さは、分を越えまいとする人の像に

見えてエールを送りたくります。しかし一夏を咲き通す勁さは持

っています。新井朋子さんの一句の終りの「紙」に目が開く思いで

した。この紙には凄夢があります。そして人間には有難い事に夢

を見る能力があるのです。何とも素晴らしい紙なのです。

大阪市 津守 柳伸

唐津市 市丸 晴翠

出雲市 石倉美佐子

寮屋川市 平松かすみ

貝塚市 池田寿美子

弘前市 中山 雅城

今治市 野村 清美

枚方市 濱田 良知

八尾市 村上ミツ子

倉敷市 家守 政子

鳥取市 富山檳榔樹

米子市 森脇 麗

三田市 北野 哲男

唐津市 浜本久仁於

神戸市 船津とみ子

鳥取市 植田 一京

麻生路郎の作品とその周辺

大空のくくろ

(104)

橘 高 薫 風

日本名所名物川柳

このタイトルで諸国の名高い観光地巡りが始まったとき少し紹介したが、これが長く続いて興趣を覚えるので今回はそれを抄出する。

〔四国の巻〕

前田 五健選

松山城

天守閣石鎚山は晴れている

彩 泡

お城から見れば道後は花の町

一 枝

松山はお城の東から暮れる

一 枝

築城の由縁ナモシで聞かされる

九 紫

金比羅

絵馬堂で目立つ海軍士官なり

輝 親

かんざしの如く花さく象頭山

五 健

颱風の中に金比羅さん忙し

五 健

室戸岬

陽があんなところにあつた室戸岬

晩 童

波々の果雲遠し室戸岬

五 健

室戸岬同行二人の笠で見る

宵 明

道後温泉

土産屋の何所も喋べらぬ伊予道後

美 弥

参籠の垢を道後へ持つて来る

帆 哉

鳴門

大鳴門小鳴門トンボ飛んでくる

水 客

写真では鳴門の凄さ見えぬなり

文 庫

満月を鳴門の渦が乱したり

夕 鐘

大鳴門通り過ぎたら春の海

葉 光

海神は鳴門の底と思召せ

蛇の鷹

屋島

何気なく開いた窓に月屋島

廉 夫

談古嶺具足をつけた気で覗き

曉 童

蟹の目に屋島の浪と春の月

葉 光

ケープルの客に買われた平家蟹

宵 明

朝日より夕日が心ひく屋島

世間音

阿波踊

阿波踊恋を語ろう暇はなし

芳 花

阿波踊輪を出て乳を吞ませてい

勝

寝つかれず宿を亦た出る阿波踊

葉 光

酔ってない足のもつれの阿波踊

夕 鐘

遍路

華奢な手へ長閑にうけるお摂待

三 汀

母と娘の遍路へ桜ちる真昼

葉 光

番外へ来るお遍路も春のもの

乱蛙楼

遍路宿二階へもくる寛水

五 健

〔京都の巻〕

山川 紫明選

祇園

一力の暖簾成駒屋が出そつ

水 客

天晴れな男祇園で飲んでる

木 履

鬼灯を買った祇園の石畳

柳 一

祇園からあなた任せの遊びに出

佐保蘭

島原

道中の傘を上げた日本晴

風 林

八文字踏む道中へ花が散り

晃 洲

島原を出れば今から昭和なり

憲 一

島原を巡査はにべもなく通り

紫 香

金閣寺

金閣寺信心で行くところてなし

世間音

団参の疲れ金閣雨となり

狸公三

金閣寺或日維持費のことに触れ

佐保蘭

金閣寺此処で盃なめたがり

有 耕

新京極

京極を旅の浴衣で二度通り

水 客

信心は新京極を斜に抜け

世間音

京極は宵長二郎に似た顔に逢い

いの助

知恩院

甚五郎の傘仰いでる団体旗

いの助

国宝の廊下うかつか通りすぎ

澄 風

知恩院へマイクの据る大晦日

世間音

尚香のむ

宮西弥生選

一本は他人の支え椅子の足

美しい道があるかも曲り角

ジャングルジム自力で逃げるほかはない

うすら闇光るものあり師の一字

指切りを誰とでもする茄子の花

手と足へ感謝した事ありますか

憎い憎い人のその後が気にかかる

現在地指でなぞってゆく余生

秋までは待てず秋刀魚を焼いている

ひらがなの手紙峠の向こうから

ブライドが横座りして崩れだす

絵てがみの金魚大きいあぶく出す

青空を直視できない宿借りで

妻だけが知らないことも二つ三つ

外聞と見栄を包んでいる家紋

魚さばいた罪の痛みのくすり指

ゆつくりと歩こう好きな道だから

一石を投じてからのすきま風

ハブニングたまにははまる水たまり

倉吉市 淡路ゆり子

和歌山市 吉村さち子

米子市 政岡日枝子

西宮市 奥田みつ子

和歌山市 川上 富湖

米子市 石垣 花子

藤井寺市 太田扶美代

鳥取県 土橋 睦子

吹田市 山本希久子

和歌山市 古久保和子

富田林市 中井 アキ

和歌山市 福井 桂香

倉敷市 小野 克枝

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 木本 朱夏

松江市 川本 畔

芦屋市 黒田 能子

倉吉市 米田 幸子

西宮市 門谷たず子

渦巻の中の私を見失う

開けっ放し母の声が良く通る

反省の時間を雨が持つて来る

日に焼けたわたしを笑う茹玉子

淋しい日金魚の私語も多くなる

隙だらけになってしまっている姿勢

絹糸をピンと弾いて姑の乱

恋してるらしい背筋が伸びている

追伸の誠意に振り返りふり返り

梅らっきよ漬けて節目をクリアする

乱舞して屋根よりころぶ雀の毛

どの窓も青い空とは限らない

顔上げてごらんいいことキツトある

遣り場のない怒りも詰めたゴミ袋

ストレスの頭の上を赤とんぼ

焼き物を生き返らせる窯の火

お隣があるから独居でも住める

にぶいひらめき老ゆるとはこんなもの

境内の花は鐘の音好きらしい

それからの話は日記に伏せてある

老いてまだ花火を買ってみたくなる

二の足を踏まないような靴を買う

朝顔をかぞえてからの台所

オモチヤ箱がちゃがちゃ夫入院中

どう見ても切り取り線の外に居る

だまってる方が賢いときがある

寝屋川市 坂上 高栄

鳥取市 坂田和歌子

岡山県 富坂 志重

藤井寺市 高田美代子

大和高田市 鍛原 千里

寝屋川市 籠島 恵子

羽曳野市 吉川 寿美

寝屋川市 平松かすみ

和歌山市 福本 英子

横浜市 三村八重子

米子市 林 瑞枝

和歌山県 杉山 精子

富田林市 前田 登子

尼崎市 長浜 澄子

大阪市 神夏磯典子

交野市 山川日出子

鳥取市 田村きみ子

尼崎市 春城 年代

大阪市 町田 達子

八尾市 高橋 夕花

鳥取県 西原 艶子

出雲市 城 多喜

八尾市 井尻 民子

八尾市 宮崎シマ子

出雲市 石倉芙佐子

横浜市 近藤 道子

片目つむり両の目つむり大家族
過去を消す修正液がまだ足りぬ
情けないものに昼見る朝顔よ

エレベーターわたしひとりのためにくる

旅の火照りをそのまま投げてくる手紙

疑いを知らぬペットの瞳に溺れ

弟に背負わせて来た梨の山

クラクション私ばかりを狙ってる

麻酔して他人の顔で虫歯抜く

大地ふむひまわりに気力をもらう

善い話聴いて五句の酒旨い

重いかぼちやに自信の程をきいてみる

思い出を拾いに戻る里の秋

ピーマンの空っぽにある栄養素

百円ストアでグラクタブい買って来る

通販が四季を知らせにやってくる

聞き分ける耳の飼育も生きる知恵

米の花二百十日の無事祈る

濡れること恐れず今日もお洒落する

姿見を此の頃覗かぬようになった理由

ラブラブの蝶をみているひとりぼち

極楽の泡を吸込むビヤホール

ささやかな自己満足は栄養剤

本当は淋しい独身貴族です

美しく言える他人の介護なら

深読みをされてしまったプレゼント

和泉市 中川 楓

和歌山市 桜井 千秀

香川県 川崎ひかり

西宮市 西口いわゑ

和歌山市 榎原 公子

横浜市 後藤 早智

米子市 木村富美子

和歌山市 上地 忍

八尾市 生嶋ますみ

米子市 澤田 千春

大阪市 本間満津子

和歌山市 楠見 章子

徳島県 安宅美代子

今治市 野村 清美

大阪市 板東 倫子

横浜市 山梨 雅子

米子市 小塩智加恵

鳥取市 録沢 風花

横浜市 保田 絹子

出雲市 園山多賀子

香芝市 大内 朝子

寝屋川市 太田とし子

貝塚市 池田寿美子

熊本市 永田 俊子

米子市 白根 ふみ
堺市 志田 千代

朝顔よわたしゆつくり眠りたい

波の音聞える貝を老母に買う

夕暮れの心細さへ猫帰る

紅生妻ほどの存在感が欲し

大海の汚れは知らぬ鮎の群れ

主語の無い会話で友と通じ合う

指定席急いで走ることはない

挫折感竹は節目で耐えている

ささやけば写楽ぎよろりと目をむいた

昭和一桁控え目にしたたかに

住み馴れて大きな顔になって来た

不整脈朝の目覚めが嬉しくて

風船の視野には未来だけがある

八尾市 村上ミツ子

堺市 矢倉 五月

寝屋川市 森 茜

鳥取県 岩崎みさ江

今治市 塩路よしみ

愛媛県 黒田 茂代

鳥取県 石谷美恵子

今治市 野村 京子

弘前市 一戸 ツネ

鳥取市 植田 一京

倉吉市 野口 節子

松江市 佐野木みえ

八王子市 播本 充子

ゆり子さんの句―人間社会に生存する痛烈な人間模様と、尚

深く「椅子の足」に例えた老練さに敬服する。常に他人の援助

で生きている事が鉄則の現世に悲しいかな、人間はうつかりと

忘れて他人を退ける。これも人間の姿かも知れない。さち子さ

んの句―美しい道を信じて、常に前向きの姿勢には迷いが無い。

作者の日常の心掛けが手にとるように見える。日枝子さんの句

―「ジャングルジム」日枝子さんらしい発想である。四面楚歌

或いはずたずたになっても結局人間は自力である。寄らば大樹

の蔭に在るより、自分を磨く仕事をもって生き抜くことである

と日枝子さんに教わりました。みつ子さんの句―何時までも余

韻のある句である。「闇」ではなくてもよいと思ったが、やは

り「光る」とあれば「うすら闇」が一層に美しい。師の一字で

X (エックス)

古久保和子選



Xが解けずYから攻めてみる
Xを追う少年の目が光る
Xデー間近とされている噂
Xが解けて数学好きになり
X線に胸のほてりを探られて
神の目にXなどとはないヒト科
Xの仮面を剥いだ記者のペン
XとYに絡まれ徹夜する
Xという悪人がいるらしい
X倍にすれば私も資産家に
Xデーの明日へ無防備すぎないか
未知数を方程式でつまみ出す
ワンルームXさんが増えている
レントゲン緊張してるあばら骨
Xを解くの雇う探偵屋
Xの符号が生んだ妻の乱
Xとバツが同じに見えて来た
Xを追って康夫と夜を更かす
不発弾かかえた妻のXデー
わが野心X線に写るまい
エックスは水増しのゆうれいだつた
Xの悲哀仲間に入れない

あずき 洋 実 玉恵 求芽 久仁於 よしえ 重人 雄々 保州 岳水 桂香 慕情 典子 鉄治 タミ 靖巳 主一郎 旋風 隆華

Xなら黒いメガネをかけている
Xファイル君のデータが全てある
手を握る位はまんたXだ
代名詞Xだけの恋でした
Xがお通夜の晩に来たまんま
Xのボスにシャネルの香りする
Xの交わる点に来て迷い
方舟がXデーへ売り切れる
行き先はエックス同じ終電車
Xはどうにでもなる裏帳簿
空欄にしとくXYZ
黒点は死火山ですとレントゲン
原発にXつまる灯を貰う
気をつけいするとX脚になる
X線もう息してもいいですか
佳
風の子の未来大きなXだ
秀才の手にXは軽く乗り
Xの穴に嵌つてもどらない
Xもところ番地をもっている
XもYもZもニキビの巣
被爆手帳の中にわたしの余命表
地
Xが浮かぶ男の朝の汁
天
Xデーへばつばつ荷物軽くなる
軸
Xを増殖させて熱帯夜

保夫 啓子 妻一 弘一 正剣 高夫 充子 登美 大輪 美代子 洞庵 英子 宵明 美弥子 ミツ子 満秋 螢 緑良 四郎 寿美 日枝子 前 ためつ

茄子

岡本花匠選



三振はめつたにしない茄子の花
茄子の花 亡母は紫好きでした
約束を反古にはさせぬ茄子の花
無器用なわたしを笑う茄子の花
孫が来てなすびの花をみなちぎり
親の意見活きて嬉しい茄子の花
茄子の花 娘も三人の母となり
焼き茄子が出てから弾む大ジョッキ
焼き茄子の浴衣でグツと干すビール
茄子を焼く匂い食欲そそる秋
焼き茄子に一際うまい酒を酌む
焼き茄子の温みを知らぬ闘病記
焼きナスの熱さにめげぬ白い指
焼き茄子が旨い余生も素晴らしい
秋茄子の喜び漬けて嫁の位置
糠床へ茄子を寝かせて仕舞風呂
エプロンに茄子漬け食べた跡がある
古釘が醸すわが家の茄子の色
街に住み茄子も胡瓜も旬忘れ
孫の守り楽しく作る茄子の馬
子も孫も大阪生まれ茄子の馬
初盆へ曾孫供える茄子の馬

めぐみ 洋 寿恵子 ますみ 吉之助 ツネ たず子 靖巳 権悟 靖雄 五月 和歌子 一花 雄々 愛論 みね 雅城 倫子 四三郎 正雄 まさと 順風

路 集

約束はきっちり守る茄子の自負
無駄のない茄子に無策を喰われる
慢心を茄子の棘に論される
グルメツアー疲れをいやす茄子の紺
茄子紺の袴びしと娘の勇姿

多賀子
勇太
慕情
強一
智加恵

銀波
美弥子
勝美
タミ
剛治

周信
檳榔樹
美千代

緑良
義男
岳水
勝視

洋風にしました茄子とロゼワイン
茄子程に子を生んで欲し少子国
初茄子を愛でて家族の輪が和む
勝手口朝とり茄子と母が来る
忌がめぐり父よ母よと茄子の牛

佳
美代子

茄子一個とれて夕餉の夫婦箸
地
茄子漬けの色あざやかに母達者
天
背のびせず生きてきました焼きなすび
軸
緒方美津子

千し茄子にいのち育む母の知恵

楽 しい

傍島克治選



味付けをすると楽しくなる噂
楽しみを乱す電話の主はだれ
ばあちゃん若葉マークが楽しそう
楽しさは重い重いと背なの孫
美谷院でと楽しい顔になり
馬鹿らしい事も楽しいお年頃
楽しみは消えてゆくのが早すぎる
楽しそう妻のパートに少し妬き
楽しい夢見たくて枕変えてみる
楽しみをあとに残している財布
それぞれの彩で紫陽花化粧する
楽しいと目尻が下がってくる米寿
独身に楽しく見える団地の灯
楽しみを止める名医がいて困る
三世代楽しく生きる息遣い
欲捨てた分だけ楽しみが增える
お休みだ老人の日も海の日も
煩惱を捨てて楽しい人に逢う
年老いて楽しいことを先にする
正論が楽しい話題ぶち壊す
楽しくてワイングラスを光らせる
極楽はこの世にごさる大ジョッキ

時弘
實
樹千代
順風
隆風
タミ
敬之介
正雄
志洋
狸村
久仁花
一花
宵明
勝巳
雄々
剛治
英子
螢
ミツ子
健一
求芽
しげお

虹ひとつ添えて楽しい絵に変える
悪女と言う誇り背にしてこそ楽し
男を皿に載せて女のティーンタイム
スイミングすこし羨びた人魚です
人形の視野に楽しい風がある
輪を抜けてひとり楽しい放浪記
楽しきをつなぎあわせて若くいる
母さん楽しそう蛇口よく喋る
楽しかった過去抱いてる夏帽子
流されていよう楽しいかも知れぬ
生きてます喜怒哀楽も輪廻なり
スキップの訳を娘が教えない
冷蔵庫から楽しみが消えている
ピアノニスト指が楽しさつれてくる
楽しくもないが乾杯して拍手

佳
美代子
保州

化粧する逢瀬の指はリズムカル
パチンコに出掛け傘寿が戻らない
袴を脱げば楽しい風に逢う
象のハナ楽しいことを探してる
楽しきはブランが踊る時刻表

人
靖巳

百花繚乱楽しく咲いていて欲しい
地
花を切る音に楽しい詩がうまれ
天
楽しい一日でした靴磨く
軸
松川 杜的

勇太
寿美
たず子
典子
愛論
満秋
千里
吉之助

日枝子
睦子

杜的

松川 杜的

初歩教室

題——地

吐田公一

今回の「地」の課題では、地球儀（又は地図）で旅行する、地に足が着かないなどの句が多かった。それだけ見付け（着想）が狭かったのでは。地には色々な熟語があり、活用の範囲は広がったはず。そういう意味からも課題に対しては、必ず辞書を引くことをおすすめしたい。

一般に作句の場合、課題を詠み込む（作品の中に題の言葉を入れること）句と、その語の意味を敷衍して作句する場合のことは以前にも述べましたが、このことは作句の態度としては重要なことだと思います。できる限り題をよく咀嚼して着想を幅広くするよう努めていただきたいもの。初歩の方を対象としておりますので、今回も本来の地から離れた意地や地味など幅広くいただき、添削もしました。

添削句

○終着の地に友を待ち根を伸ばす 勤

伸ばすの表現は下ろすの方が適切では？

▽根を下ろす終のすみかに友が出来る

○地球儀の上で世界一周妻の夢 美智子

五七五にするため、上を省略しても意思は通じる。

▽地球儀で世界一周妻の夢

○方言を丸出ししやる地元民 敬之介

方言とは地域的に見たそれぞれの言語の違い（辞典）とあり、この言葉には地が含まれる。また原句は説明的

▽旅空で聞く方言の温みかな

○地球には嘘を育む風がある 賢

この場合は嘘とするより、戦火の絶えない

地球を表現した方が――

▽反目の風育んでいる地球

○森消して緑ヶ丘の造成地 嘉信

中七は地名であり、よほどな場合でない限り不要

▽一つずつ森が消えゆく造成地

○地球儀の私の位置を確かめる 知華子

地球儀のをでに

○地道には足の感觸今もあり 章司

せてても今もありを今も生きにすればよかつたのでは

▽今は昔地道恋しい足の裏

○退院へ足地につかず小走り よし子

下五がずさん

▽嬉しきで足地につかぬ退院日

○地の匂い嗅いで余生を生きてゆく 靖雄

着想はいいのだが、嗅いでが今一つ

▽幸せな余生を送る地の匂い

○生きてきた夫婦だけの地図を書く てる代

中六に一考が欲しかった。

▽生き抜いたふたりの愛の地図を書く

○児の笑みに地雷の撤去急がれる 純子

下五は急かされるとなされた方が――

○小商い不況に負けぬ味と意地 徳三

味にとなさった方がよいと思う。

○無理やりに立ち退きさせた土地に草 五月

立ち退きで土地がわかる。句にはできるだけ余韻をもたせるように

▽立ち退きの跡にベンベン草が生え

○つましく地味な暮しに根を生やす 宏

つましくと地味とは相似

▽定年から地味な暮らしに根を下ろす

○地に墜ちて唯我独尊した悪夢 煩惱児

時事吟として頭取を詠むと

▽頂点の唯我独尊地に墜ちる

○なやみ事早くかいけつ地上の友 タツエ
地上の友がとってつけたよう。余り考え込

むとこのような表現に陥りがちです。

▽地上から悩みを抱いてゆく黄泉

○恐いもの何時も頭にある地震

おっしやる通りを詠み代えろと

▽脳裡から消えぬ地震の恐怖心

地震雷……を連想すると

▽恐かった親父の権威地に堕ちる

○地下街を上がって友と待合せ

ちよっとした味付けが欲しかった。

▽方角がわからぬ地下の待ち合せ

○路地裏の屋台ほんとの味がある

ほんともいいが

▽路地裏の屋台に温い味がある

○地引網色とりどりが絵になり

地引網の色が絵になるでは説明句

▽地引網色とりどりの魚がはね

○先輩の勝手つんばな地獄耳

近年差別用語の使用はむずかしくなっていますのでご注意下さい。

▽聞こえない振りをしている地獄耳

○土地騒動なくて平和に生きられる

土地騒動などは時事吟として詠まれた方が

味がでて、理解されやすいのでは――

▽地価下落バブルのツケに泣くバンク

○梅雨晴れて蟻も地上に大行進

蟻を労働者に見立てると

洋子

▽梅雨晴れて蟻も地上に出て稼ぐ

○一坪の地主沖繩守つとる

原句は単純にそのまま詠まれている。

▽一坪で沖繩守る気の地主

○趣味こうじ花が横領駐車場

横領が不適切

▽駐車場を占領してる趣味の花

▽駐車場ガーデニングが幅きかし

○植えもせん地にはきれいな花が咲く

上五が冗長

▽庭隅に名もなき花の美しく

○便利さに慣れて公害地球病む

時事吟を主体とするときには、できる限り

句に具体性を持たすといひ。

▽文明のグイオキシに病む地球

○せっかちも地金が出てきて笑われる

下五が安易

▽つくろつてみてもいつかは出る地金

佳句

地下水害タイタニックを思い出す

さいはての土地にたなすむ片思い

三〇〇キロ信号が無い地平線

孫の事故ふるえる足が地につかず

地震よりこわい静かな山の神

スーパーで買えない味の露地トマト

栄翁

美恵子

美寿子

茂代

志津香

美子

舞夢

民子

トシエ

よしこ

智加恵

脇役に徹し男の意地を見せ

ライバルのお蔭で意地をやりとげる

譲る程の土地なく子等は仲がいい

地下街に大地を知らぬ子が遊ぶ

停年で猫の額を払い終え

弾け種大地やんわり受け止める

梅雨晴れを仰ぎ寝ころぶ地の温さ

貴男とは地の果て迄も堅ちて行く

根をおろす決心させた地の温み

地下水の汚れ次代へ残すまい

北方領土返せ返せで半世紀

虹を追う地図はまだまだ模索中

開発と言う名に地球いじめられ

こぼれ種大地はへだてなく育て

意地を張り空しい風の中にいる

親子でも違う構図の地図をかく

地球儀で思う存分ひとり旅

故郷は温もり通う道がある

(誰か故郷を思わざる)

夢一つ大地に種を蒔きました

(夢のある句)

左遷地の人情にふれ根を下ろす

(余韻のある句)

四三郎

志津香

要子

つよし

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

勝久

住宅管理組合考

閑人閑話

田中正坊

いわゆる「家」に縁のない私は、一家を構えて以来、公営・公団・公社の集合住宅に住み続けてきた。現在の住居も大阪府住宅供給公社の分譲高層住宅である。今さら一戸建て住宅には住めないし、住もうとも思わない。

そのくせ、至って近所付き合いがよくない。現役の時とはそれで通ったが、年金生活になり、在宅することが多くなった現在でも、なるべく自治会はじめ地域の団体や会合には、顔を出さないようにして今日まで来た。

ところが今年から、それが通らなくなったのである。分譲の共同住宅には法律によって住宅管理組合が設けられ、全戸が加入しなければならぬ。進んで役員になる者がいないので、抽選で決めることになる。幸か不幸か十余年、選に外れていたのがとうとう順番が回ってきた。

年長と言うので理事長に推されたが、高齢

だからそれだけはと許してもらったところ、夫婦共に在宅していることを理由に業務担当にされた。私が一応、役員に名を連ね、実務は主として妻があたるという態勢を組んだ。

二人して一丁前の老夫婦

さて主な仕事は、共用部分の清掃と自転車の管理である。清掃はシルバー人材センターから派遣された清掃人への対応と春秋二回、団地内の樹木の剪定をシルバーの専門家に委託すること、さらに年二回、居住者総出の構内大清掃である。

これも大仕事だが、厄介なのは約六百台の自転車の管理である。建物の一階部分にかなりのスペースをとって置場を設けているが、収容台数には限りがある。そこで管理組合がシールを発行し、自転車に貼ってもらう。共用部分を占有するのだから若干の料金を徴収し、毎年、登録を更新する。

例年のことなのに、登録をまめがれようとする人がいるので、大掃除の際、未登録の自転車を集めて鎖でつなぐ。それでも掃除の時だけ隠す不心得な人があり、役員が見回って摘発するということになる。そして期日までに受取りにこないものは廃車処分にする。

管理組合にはこのほか、会計、集会所、駐車場、施設、防火などの担当があり、いずれ

も役員がその任にあたっているが、居住部分以外の土地・建物はすべて共有・共用だからばく大な額の資産を管理するわけである。定例の業務以外に新規の仕事もあり、今年はエレベーター内に防犯カメラを設置し、各階段に手すりを取り付ける工事を行った。

これまでは、管理組合に共益費と積立金を納入するだけで、その業務には全く無関心であったが、実際に担当してみても、それがいかに大変で大切な仕事であるかが身にしみて分かった。管理組合の業務に非協力な人や公德心を欠いた人が多いのは困ったものだと思うが、私もそれに近い一人であったことを考えると、一方的に責めることはできない。「川柳塔」についても、同じことが言えよう。

さらに今年になってから、この団地に老人会をつくらうという相談を持ちかけられ、役所と交渉したり、趣意書や会則案を作成したことから、これにも一役買う羽目となった。やはり、「老人」という言葉には抵抗があった、会の名称には苦心したが、幸い予定以上の人数で発足した。こちらの方も会長は辞退し、相談役にしてもらったが、それでもあいさつをしたり、されたりする人が増えたのは困っている。

老人会その名はグリーンクラブなり

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 8月号から

千葉風樹

団体さんお着き徳利勢揃い

大西文次

団体予約を受ける施設はいろいろですが、句の中の団体さんは、研修とか、家族ではないらしい。この後の想像が広がる楽しい句。食べるものみんな美味しい試着室

藤田芳郎

体調良好、食欲旺盛、中年太り、実は私のことです。ズボンを数着買う破目に……

ご近所は鍵のかかったドアばかり

高島啓子

自己防衛の手段には鍵しかないのだろうか。殺伐とした世情を切り取って見せて鋭い。

次の世も一緒になろうと恐いこと

坂東和代

男は、次の世も添いたいと願うのだが、女は違ふらしい。現に我が妻にもはつきり拒否されたことがある。恐いこととは気が付かず。

娘のろけ聞いて夕餉の刻となり

豊田羊子

愚痴っていたのが結局はのろけ話だった。して、親身になって心配して最後ははつとして、夕餉の父さんとの話題もきつと娘のこと。衣がえ早速街に見せに行く

山下省子

そうか気が付かなかった。衣がえとはこういうことか。女性心理の可愛らしさに乾杯。盆踊り誰も月など見ておらず

田中知行

懐かしい情景です。そうです、初めは踊りの振りを覚えるのに一生懸命、そして慣れると女の子へ目が行き、お月様ごめんね。

大嫌い主人と言ひとは

城多喜

そう、女も自立しなくちゃね、自分の人生なんだから、たとえ結婚していてもやっぱり自分第一に考えて、一度きりの人生だもの。

青空を眺める余裕でたベッド

加藤公子

病気の回復が目に見えて進んで来ています。よかったです。看護の人もお疲れ様。

曲り角突然前に現われる

瀧井勝

きつと人生の転機だろう、そう解釈したい。

戦友と思うペン牝豚いつか消え

岡田幸生

作者の生き様が見えて来るようです。ペン牝豚を戦友と言える程、一心をぶつけた物があつたのです。ペン牝豚もきつと幸福だったと思います。ゆっくり休ませてあげなさい。

宇宙まで飛んだ寝相の孫がいる

田中トシエ

川柳の表現によく誇張法は使われますが、これは新鮮です。宇宙まで飛んだ寝相のお孫さんの将来が楽しみです。

矢印の通り喪服は曲られ

秋元和可

都会の一風景なのでしょうね。私の住んでる町では隅々まで分っているものでこういうことは無いのです。

蠶螂は斧を使うて愛撫する

宮本末子

果して蠶螂だけだろうか、人間も実は愛するが故に傷つけ合っていることがあるのではないだろうか。それにしても作者の感性の鋭さに脱帽です。

蟻一匹菜の役を努めてた

大工静子

この蟻は死んでいるのです。本の間で、命をかけて人間の役に立つてくれたのです。

柳都全国川柳大会に

参加して

嵯峨根 保子

七月十一日の大会に先立ち九日朝、薫風主幹外六名、空路新潟へ向かう。快晴の日本海をジェットフォイルに乗り継ぎ両津港着、昼食は佐渡という軽快な足取りで旅は始まった。午後、バスで大佐渡スカイラインを走る。

標高九四二米からの俯瞰は地図そのものであり「ときの島佐渡」が静かに輝く海に浮ぶ。一つ驚いた事がある。走行中のドライバーが「・佐渡へとオ草木もオなびくウよオ」合の手は「ハ、アリヤアリヤアリヤサ」とガイドさん。のんびりしたものである。だが一方、金北山山上には北を守るレーダー基地があり、佐渡金山坑道の底からは、コンピューター制御の人影が苦役の呻きを漏らす。

相川泊り。雄大な落日。相川音頭、佐渡おけさ、さすがが落人の島らしく所作が優しい。十日、尖閣湾外海府海岸を走る。断崖の景観あり、遠くは群青、近くは透明な水底に藻



懇親宴にて

が揺れる。大野亀より右回、両津港に戻り新潟、新津に至る。

前夜祭会場では柳都大野風柳主幹外温かいお出迎えを戴く。多彩なお顔の中で八木千代さん、千春、亜弥さんにお出合います。乾杯の音頭は田頭良子さん。明日への檄が飛ぶ。宿は風柳主幹のご配慮で湯田上温泉。

手花火の灯りを映すうさぎの目 風柳 柳人へのおもてなしが軸の色紙から伝わる。十一日大会。割烹「新森」一九六名

本大会は柳都同人長谷川冬樹氏のエッセー「男結び」出版記念を含む大会である。席題発表「出合い」一題四句（同一句禁、選者、森中恵美子、八木千代さんへ各二句ずつ、三十分で締切り。これは川柳塔の同行先輩方も



尖閣湾を背にして

初体験とか。投句後、オーブニング。風柳主幹、新津市長のご挨拶、日川協会長仲川たけし氏の祝辞等が続く。

「川柳トーク・デイスカバール柳」冬樹氏をコーディネーターに、パネリストは齋藤俊輔、大野風柳、橘高薫風各氏。熱を帯びたトークで会場は更に盛り上がる。いよいよ記念句会へ。全国からの入選句は一回読みであり、披露と呼名は相まって、真剣な進行となる。

薫風主幹が秀句賞をとられた。

夜のパーティーは、藍の法被に白抜きで
ふるさとの風に道あり花の種

風柳主幹の句を背にした皆様に地酒「柳都」
のご接待に預かる。なごやかに宴は弾みフイ
ナーレは、ペンライトを振りながらの、嘉納
昌吉作曲「花」の合唱を繰り返す。

♪いつの日かいつの日か花を咲かそうよ

エッセー

私と川柳

酒井 輝

私は少年期に神田鍛冶町に居た。歩いて十
分程のところ、神田須田町に立花亭という寄
席があった。その頃から子どものくせに落語
が好きで、よく出かけたものだ。何しろ十五
銭で半日楽しめるのだから、つい病みつきに
なってしまった。

当時は、林屋彦六が喋花楼馬楽といつて、
人情噺や怪談が得意であった。牡丹灯籠をだ
んだん暗くして行く高座で淡々と語る口調が
今も忘れることが無い。だが私が寄席に魅力
を感じたのは落語の落ちの部分である。落ち
にもいろいろあって、

逆さ落ち……………あたま山
間抜け落ち……………道昌屋
地口落ち……………もと大

ペンライトのトンネルをくぐりながら、再会
を望む訣の言葉を聞く。越後は熱い。もし
て、こよなく川柳を愛してやまぬ、先人達の
ところにも触れる思いで会場を後にした。
柳都の皆様、薫風主幹、千代さん方のお見
送り、深い感謝と共に、この感慨を明日への
糧にしたいと有難く思っている。

仕草落ち……………死神
考え落ち……………蕎麦の羽織

何れも言葉を巧みに活かしていると思う。
この言葉の魅力を、新聞・雑誌の川柳に見
出した。当時は読むだけの楽しみだったのだ
が、何時の頃からか新聞投句をはじめた。そ
の基底には落語の落ちがあったことは言うま
でもない。富山に転居してから地方新聞には
かなり抜けるようになって来たが、どうして
も軽みに偏りがちの作品が多かった。
そうした時に、どういふ訳か私のところに
『川柳雑誌』が届けられた。そこで私は麻生
路郎氏の作品と運命的な出会いがあった。

俺に似よ俺に似るなと子进行
寝転べば畳一帖ふさぐのみ

等の名句、私の川柳観が一変させられたのだ
がある。つまり、私自身の人間陶冶のために川
柳があるという自覚である。昭和十二年頃の
私の作品に

こころみに春の広さを這うて見よ
きつかけに下を出られる恐ろしさ

ひらかなの風呂の名まえが嬉しいね

銀座にも番地があった裏通り

ひやかなな瞳となりて筆を握き

等が見える。これが路郎師に育てられた、私
の青年時代の作品である。こうして路郎師に
心服した私は、昭和二十三年に生まれた長男
を「路郎」と命名した。

残念にも戦後、『川柳雑誌』が私の視界か
ら消え去ったことだ。その後、各種の柳書に
触れるうち、『川柳雑誌』は路郎師亡きあと
『川柳塔』と改題して継続されていることを
知った。随分と長い年月を無駄に費やした気
もするが、幸い野村太茂津先生に、『川柳雜
誌』以来の柳友として迎えられ、橘高薫風先
生にも情けある御援助を賜わり、川柳による
人間開発の場をお与え下さったことに深く感
謝している。

私は残り少ない余生ではあるが、さまざま
な方々の作品と優れた感性に触れながら、自
らの人間開発に努めていきたいと願っている。

晴耕雨説無欲無想の写経堂

うどん屋の七味欲はることなけれ
生きたいかトカゲの尻尾動いてる
人並みでよいと言ふのも欲のうち
欲のないことを身内に責められる
九十の欲が呆けさせてはくれぬ
天秤にかけると欲の方が勝ち
勲章も欲しいがお金もつと欲し
ホップステップまでは順調だった欲
半寿から欲を疊んで丸くなる
ちよつとつ荷物減らす気持よき
貪欲な両手でこれ以上持てぬ
欲のない顔で昼寝のおとつちゃん
頂けるならおかねより若さだわ
欲望を溜めると顔の皺になる
知識欲減った分だけ太り出す
欲のあるうちは眼鏡がよく曇る
蟬しぐれ無欲のままのカキ氷
欲得を言わない人だから怖い
欲しいもの無いが黙っていて欲しい
欲の手が喉からぬつと伸びてくる
欲ばらず気ままに回るひとり旅
生きたる欲妻が上手にネジを捲く
大根一本しんげんに選っている
欲がまだたとあるから生きられる
姿見にあばらが見えて欲が消え
銀行がいちばん欲しいのはお金
欲の数かぞえて夢を膨らませ
欲のない女です僕に従いてくる

柳 弘
瑠 美子
千 代
しげお
度
紫 香
澄 子
利 昭
雅 文
ア キ
天 笑
美 代子
満 州
たもつ
みつ子
鹿 太
シ マ 子
三 男
弘 一
富 湖
義 子
一 風
たもつ
正 坊
朋 月
保 州
森 子
つづや

もつと欲出せと素質をほめられる
禁猟区ヒト科の欲がまぎれ込む

扶美代

住

事業欲離れ作務衣の庭いじり
家庭的ですが出世の遅いパパ
リング剥くようにはいかぬ欲の皮
人生の坂道欲の杖ついて
来て欲しい時には来ない子ははたち

周 信
つづや
大 輪
寿 美
文

人

ブランコの風は無欲で押してくれ
良心をとるとき欲に盗まれる

一 風
洋

天

欲がある如く引張る静電気

雅 文

軸

欲のない女うどんてよいと言ふ

雅 文

兼題「隠す」

池 森子選

隠しごと出来ない性でよく揉める
隠そうとすればするほど笑みがでる
トキメキを隠し切れない胸ボタン
夕闇が隠す宵待草の哀

柳 伸
吉 太郎
美 代子
茜

隠れてる敵か幾万蟬の声
胃薬をたくさん飲んだ隠しごと
隠し事するほど演技力はなし
へそくりの万札冷凍しています
隠しごと何にもないのも淋しいね
尻尾から隠す抜け目のない猿で
しゃあしゃあ妻は無いと言ふカラス

シ マ 子
昭 子
満 州
つづや
昭 子
美 代子
雄次郎

隠すものあるうち税務署がこわい
目くばせをしてただならぬ病気とは
美談すこし持つて私がきこちない
真夜中にトレーニングをしています
隠し玉いつ出そうかとあたためる
人ひとり隠れることのむづかしさ
膳本に兄貴が一人隠れてた
アジトでは煙草も吸うしよく笑う
妻も子も知らない僕のパスワード
良妻で賢母で裏の顔もある
モナリザの笑みに隠れているないしょ
隠し事するたび尻尾太くなる
隠してた爪ボロボロになつて
暗号が先によまれていた不覚
想像が先によまれていた不覚
コスモスへ隠さず夏の日の懺悔
句読点 裏に隠れている本音
背景に自分を隠す森を描く
寂滅源氏にわたしの隠れ場所がある
かくし味覚えて丸くなつてくる
へそくりを見事に隠す一DK
欠点を隠すと生えてくる尻尾
どら息子ドナーカードを隠し持つ
汚れた川は河童の伝説を隠す

シ マ 子
昭 子
満 州
つづや
昭 子
美 代子
雄次郎

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

かくれんぼ等身大の箱がある
隠すとこ隠して丸く行っている
人混みに隠すわたくしのぬけ殻
傷心を隠すメークは薔薇色に

大 輪
笛 生
扶美代
夕 花

内緒話が好きて鬼灯朱くなる

人

彼の名を書いて白い手で隠す

地

隠して言葉が落ちたアスファルト

天

はしやぎながら隠す女の火のかたち

軸

花カマキリ花を隠れ蓑にして

兼題「浄土」

江口

度選

南無阿弥陀仏唱えて浄土に行けるなら

浄土から戻った人は未だいない

夫唱婦随浄土の切符予約する

君といることが極楽浄土です

うっかりと乗ったら浄土行きのバス

三度目の羽化で浄土が近くなる

裏町に酒池肉林という浄土

これが浄土美女はべらせて大ジョッキ

読経に写経きつと私は浄土ゆき

浄土へのツアーそのうち出来るかも

浄土とはお金のいらぬところらしい

浄土から招待状がまだ来ない

浄土へと一つ二つと積む小石

浄土から便りをくれた人は無い

浄土ってどんなところでしょう阿弥陀さま

雑木林はさえずり虫たちの浄土

西方浄土ひとりひとりで行くんだな

金貨した人に浄土で世話になり

大輪

紫香

扶美代

恵子

吉太郎

剛治

柳弘

希久子

重湖

隆盛

千秀

一風

いわゑ

シマ子

風云児

洋

三男

朝子

茜

かりん

鬼遊

浄土より迎えばちばち旅支度

虹の橋渡れば浄土へ行けそう

浄土とはこんな所か花吹雪

浄土への旅路は急ぐことはいない

私利私欲捨てて浄土にあこがれる

紫の焰の中に居る浄土

浄土よりやつぱり娑婆が性に合う

浄土への荷物に句帳入れておく

懺悔して浄土を少し近くする

浄土から亡母が聞いている地獄耳

浄土への旅は順不同でよばれ

童宮城みたいな浄土なら行こう

法然と親鸞対峙する浄土

南無阿弥陀女の胸は浄土かも

浄土へと誘うように赤とんぼ

浄土へもお供をします胡蝶蘭

住

青がえる 浄土と思う蓮の花

浄土ゆき豪華船かも蓮の花

丹波さんばくは浄土へ行けますか

介護保険浄土行く道迷わせる

枝雀来て空気が変化した浄土

人

どっち向いても浄土高野の蓮ひらく

夫逝ったきり浄土に美人いるらしい

天

携帯で浄土の母と話したい

いつふみ

恭昌

寿美子

正坊

吐来

紫香

鹿太

大輪

アキ

章久

義

富湖

吐来

路児

泰子

雄次郎

義子

冬葉

たもつ

楓楽

雄次郎

千歩

千里

典子

浄土へのバスポートかも南無阿弥陀

軸

兼題「ペン」

田中正坊選

ストレスが溜まるとペンがよく走る

小説家ペンで美人を弄ぶ

受賞してやつと開けたペンの道

説曲げぬ男の太いモンブラン

締切りのペンがあたふた走り出す

蟻の視点で掴むペンの主張

言えなんだ熱い思いを綴るペン

辛口のペンが政治へ抱く不信

セクハラへ女のペンは容赦なく

憂国のペン司馬遼は生きている

空港の別れひとつのペンライト

涼風と一緒に届くカモメール

ペンだこは心の隅を知りつくす

ペン先が滑っただけという筆禍

ワルツからタンゴに変わるペンの先

確定申告ペン持ったまま深呼吸

喜びも悲しみも知るペン握る

秀才のペンの尖りを見てしまい

一本のペンが刺さってからの乱

自分史のペンがためらう恋の日々

花が散ったよ花が咲いたよとペン便り

ペン冴えて無口が嘘のような人

傷つけたペンは夜中にそつと折る

受付で悪筆救うサインペン

時としてペンが仲間を傷つける

剛治

照子

庸佑

重人

アキ

森子

賢子

澄子

千歩

雄次郎

弘一

民子

柳右子

あやめ

大輪

正雄

吐来

つづや

恵子

寿美子

正風

一雄

房子

利昭

鹿太

七色のペンで世せば恋の詩
私を丸ごと知っているペンよ

つづや
昭子

ペンだが強い私の味方です
親に詫び死ぬまで通すペンネーム

昭子

筆ペンの震えかすかに喪の記帳
温かいペンに会えます地方版

冬葉

口下手のペンがすらすらよく走り
ペン牝牝も定年の日を知っている

義子

ペン一本で戦い続けた鶴彬

鹿太

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

ペン一本で戦い続けた鶴彬

慶一

兼題「いのち」

橋高薫風選

はかなくて力強くていのちだな

かりん

誰を待つ事ももう無いこの命

(俊美代子)

今日から明日へいのち持ち越す美酒のあり

一風

命まで取るといのが戦争だ

保州

パチンコで母が忘れる子のいのち
亡妻のいのち貰ってもう九十

ますみ
紫香

百七歳とても及ばぬ命なり

千歩

いつまでも願う命の尊さよ

柳右子

朝食をしっかりとっている命

恵子

八月のいのち支えるフライパン

度

オーイお茶家で威張っている命

澄子

残暑さびしいのちの置きどころ

(俊美代子)

祈りつづけてサハラ砂漠に住むいのち

満州

竹人形のいのちを宿す竹の節

楓

京人形のいのちを入れる細い筆

萬

黒髪がいのちであった良き時代

楓

トントントン真面目なわたくしのいのち

かすみ

一滴の露がころりと散るいのち

とし子

点滴の管を流れてくるいのち

楓

いのちには別条ないがくすり漬け

風云児

寝たきりでいいよ母さん生きて居て

夕花

きつちりに起きてきつちり寝るいのち

弘一

いのちを継ぐ睡眠たんととっている

しげお

金魚掬い命を軽く遊ばれる

義子

さなぎから出るとせわしないいのち

典子

一合の御飯の湯気に見るいのち

紫香

一行で軽いのちは報じられ

睦子

戦友の四倍生きているいのち

たもつ

峰打ちで命落した人がいる

三男

十人の孫にいのちの名を付ける

義

六法にいのちの代価書いてある

隆盛

好きじやない納豆食べているいのち

章久

弱虫がいのちの重さ知っている

満州

弱虫がいのちの重さ知っている

千里

大阪川柳の会

時 10月4日(月)17時開場 所 サンケ
イビル本館3階322号室 題と選者
そろそろ・村山勇太郎△ページ・中林酔
虎△怪しい・大内朝子△刻む・磯野いさ
む 各題2句 席題なし 会費800円
18時締切 各題秀句に産経新聞社賞

二本足で歩けるいのち持っている
夕焼けにああとこぼれるこのいのち 武庫坊
養生訓トイレに貼っておくいのち 洋
お守りをたくさん付けてあるいのち しげお
朝の月 蟬三千が鳴くいのち 正坊
いのちまるごと洗う真夏の海岸で 希久子
その度にいのち紅口ずさむ 泰子
お互いのいのちが温い膝の猫 鹿太
日の丸を切に信じていたいのち いわゑ
惹ないいのちの端を握りあい 和田つづや
ごきぶりが貫々台にのりたがる 軸

川柳さつぽろ500号記念全国誌上大会

自由吟 10句 選者指定制・未発表作品 投

句料 1000円 締切 9月10日 選者

吉岡龍城・磯野いさむ・大木俊秀・大野風柳

桑野晶子 投句先 札幌市豊平区平岸3条18

丁目4-10 409 遠藤泰江方大会事務局

お世なお増

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔おとし

原 みを報

友達のように涙がなぐさめる
六法の底にもあつた涙壺
のらくろの涙知つて少年期
人の世は涙があつて素晴らしい
涙腺が丈夫で人に嫌われる
さわやかな涙朝ドラからもちう
感激の涙泉のように湧く
年金が上がる雀の涙ほど
花時計びつたり二人逢えました
昼時にびつたり合わす腹時計
びつたりと障子閉めても姑の耳
びつたりと合わす両手に神宿る
幸福にびつたり白い割烹着
趣味嗜好びつたり合つて友となる
一本の釘がびつたり支えてる
平凡な主婦がびつたり板につく
びつたりとバージンロード娘と父と
父の遺言びつたりお酒止めました
ふるさとを再発見のループバス

せつ子 黙光 雄々 伝住 義弘 孝子 以和津 宏章 由多香 紀子 艶子 野草 ゆきの 富貴子 邦昭 風花 寛 千秋 庸二

他国まで舞をのぼした麒麟獅子
行きは良いよい立見峠は恐い道
名前からはほの匂う人の味
初恋の表札そつと見て帰る
チャン付けで名前呼び合うクラス会
本名は忘れて仇名覚えてる
名前より携帯ナンバー聞いておく
銘柄の違いのわかる口を誉め
ただの名前出世をすれば光り出す
脱ぎましたたけの子のびて竹となる
親の名が毀譽褒貶についてくる

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

お国のため手柄を立てに行つたきり
詩情ゆたかに農業を継ぐと言ふ
頂点の椅子でくつろぐ暇がない
れんげ田にすっぽり寝こみ詩集よむ
くつろぐと腹の底から出る笑顔
定年が近い古参の生き字引
勲章をあげたいよふなトキ夫婦
店の事誰に聞くより古参みる
昔から読めぬ漢詩が床にある
波を切る石とびとびの詩がある
天敵にあつてくつろぐひまがない

大原川柳社

矢内寿恵子報

崇 仁子 登美 舎人 彰雄 敬之介 雅通 和子 清子 道子 みさを 螢 春恵 かつみ 和歌子 單車 信子 昭恵 一夫 寛子 明美 多哥由 みづえ あや子 さちこ

立派さが少ししい影法師
立派なこと言うるだけで終りそう
靖国の兄永遠の神でいる
ご立派と言われた世辞にべそをかき
永遠の化粧に紅がまだ足りぬ
精魂をこめて作った野菜です
幾山河押されて越えた夫婦坂
苦も楽も越えた夫婦の歩が揃う
綻びを繕ひ合っている夫婦
永遠の愛を誓つたベルの鐘
道路だけ立派になって不況風
切り売りは出来ぬ立派な紋所
リハビリの努力立派に実を結ぶ
商売も慣れて立派な子を信じ
候補者の公約だけは立派です
おふくろの味も立派に受けつがれ
賞味期限立派に熟女しています
口だけは立派我が家のブチトマト
院長の立派な嘘に気を教し
靖国の母を立派と言われても

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

玉恵 辰江 妻江 巴子 悦子 喜美子 こふゆ 敏子 南花 美佐子 たつ子 ひでの 昭子 静子 絹子 和子 あすなろ はじ芽 地佳平 寿恵子 保州 鉄治 稚代 精子 克子 三男 紀久子

問題を出して先生欠伸する
先生に命託してメス待つ

大輪
健三郎

貫くものあるから今日を追いかける
初志貫徹何度書いたか唱えたか

さち子

愛を貫こうと擬花のかたち

柳宏子

わたくしを貫いてから四面楚歌

美羽

貫いて噂の嵐遠ざける

富湖

貫いた頑固は嫁に溶けてくる

千寿子

貫いた愛の誓いは教会で

和重

貫徹の顔に自信の穏やかさ

ふみえ

たかが禁煙されど禁煙貫けぬ

射月芳

予定などわれ関せずと雲は往く

良一

意味深な丸印ある予定表

泰子

予定日へ産着の針目よくそろへ

裕美

楽しんだ予定が狂う計の電話

正博

捨てた島予定通りに船が出る

高夫

神様の予定どうあれ今日へ汗

良

老い煌いて友と遊山に出る予定

己三代

瞬時の差命捨てたり拾ったり

和子

温度差の違ひ握手は避けておく

佐代子

わたくしの運命変えたタツチの差

英子

眩しくてどの子も色をつけられぬ

富美子

差をつけず尊い命拝みさる

めぐみ

はびきの市民川柳会 安芸田泰子選

梅雨などは無縁のドームどつと沸き

吐来

雷に驚かされて梅雨終る

利武

長崎の坂に祈りの鐘が鳴る

専平

老化してたまるか坂を駆けてみる

俊男

長い坂背を押すきつと母だらう
振り向けば若さで駆けた坂が見え

ダン吉
四三郎

坂道は二人の体力測定地

桂子

坂の上青い海が見えました

敏

本当の味方を知った下り坂

重人

お互いに頼り頼られ夫婦坂

庸佑

自らの願い多くて恥ずかしい

和歌子

神様も遠くおわしてとどかない

一貫

子の名前親の願いが込めてある

志洋

千羽鶴折る指先に願ひ込め

たけし

究極の願ひは妻のさわかき

満寿蔵

願ひ事母は家族のことばかり

昭子

ふるりのセツトが届く宅急便

末一

定年の目覚しセツトされぬまま

泰子

おたやんにひよつとこがいて恙無し

美代子

祖国とはどここの国かと中学生

光宏

ギンギラの夏へ充電してる雨季

りつえ

ネクタイを取ると人間強くなる

一壺

そんな日もあったと遠い日へ泪

絢子

言いたいと言えは火の粉が降りかかる

辰子

救世主野村阪神福つれて

昇

わが庭はせまいながらも緑地帯

昭平

父の日のネクタイ父が買って来る

美喜

介護士の手を事務的に見してしまう

美喜

足腰が弱つたら口がカバーする

敦子

ほんものの絆もらつた夫婦坂

敦子

横浜あおば川柳会 菱田 満秋報

百態の別れ見てきた砂糖壺

八重子

来客のたびに初孫抱いて出る

鈴美

青梅を手塩にかける母の技

笑子

挨拶が照れる新婚朝の顔

句多留

割りきつたつもり過去の揺さぶられ

絹子

殻を割る期待集めたトキの孵化

和可

目の前の鯛があくびをする祝詞

道子

腹割って話せば溶けるわだかまり

徳三

青年のままのスターに花供え

亜希子

錯覚の中で青春続けられ

純子

ひび割れも古伊万里ならとつく高値

街湖

さよならが済んで話が弾みだし

省子

再会を約す握手がほどけない

雅子

言わぬが花言つたばかりに右左

土風

肉じゃがを小さく割って老母の口

良子

幸せの人が別れの唄歌う

かず枝

佳句地十選 (8月号から)

嵯峨根 保子

仰向けに寝て神さまと差し向かい

子

母と児の時計乳房がはつてくる

完司

目の奥はもう許してるゲンコツだ

富湖

自由とはいいいなカモメが飛んで来る

元紀

渡り切ると霊安室につく廊下

みさを

最後まで座る味方の顔をして

しげお

傷心を丸ごと任す胸がある

扶美代

下駄履きで行けるところに母がいる

節子

フルムーン互いに意見ゆずらない

志華子

白い髭だから毎朝剃っておく

勲

棚の青磁箱から出して客を待つ
灰皿へ別れ話の未練盛り

肚割って話すにはまず酒が要り

枝豆を満足させる茹で加減

別れの朝男は眼鏡拭いている

お早うが言えてもつれた糸が解け

足して二で割る妙案でケリがつき

養育費払えないから別れない

会釈する顔で国境線を越え

青虫がきれいな蝶となる佳き日

割り引いて自慢話を聞いておく

草に臥て青い匂いにほっとする

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

人間不信そうは思わぬ子の笑顔

生活苦笑い飛ばして生きる意地

肩書がなくなつてからよく喋る

少子化が進み母校が失くなった

リストラの失意へ妻のやさしすぎ

失った記憶を探るもどかしさ

気にならない親爺失格粗大ゴミ

忠告のつもりが自信失わせ

ふか酒で記憶消えてる朝のうち

常識の欠けたを皆に指摘され

父の傘きびしい眼でも温かい

忘れものセンターで聞く傘の私語

蛇の目傘も嫁に來たのに無垢のまま

相合傘娘に女ふと感じ

まともには進んで行かぬ黄色傘

ふみ

和

あらた

サト子

為佐子

のぶ子

敏

充子

早智

政勝

潮華

満秋

馬洗

セツ子

敬子

正安

竹二

久子

勝

雪子

実

肋骨

直次

祥風

見清

柳童

まみ子

免がれて恥なし責める人もなく

恥かいてからは謙虚に耳をかす

旅の恥旅費の分だけかき捨てる

あんなんの恥はわたたいも被りまひよ

栄光と背中合わせに恥も居る

大樹にも二つ三つの恥がある

南大阪川柳会

吉川

寿美報

根回しが効いて通過の多数決

ガイドラインアメリカ寄りに出来あがる

浅漬のままで法案通される

国会を消化不良で戻る案

法案を作る法案作つて

言葉だけ変えた中味のない法案

都井岬の牧草野生馬が元氣

牧草にダイオキシンをふと思つ

牧草にまどろむ牛飼いたちの午後

牧草地に寝転び天地ひとり占め

牧草の匂い郷愁わいてくる

ダービーの夢牧草を食べながら

牧草も彼も好きです嫁ぎます

牧草地小さな命生み育て

霧雨に憂いを含む泣きぼくろ

B品の生地にはくろのようなきず

のめり込む癖の糸から洩れる水

Aユ解禁没頭出来る好きな趣味

のめり込む愛が辿つた修羅の道

骨身にしみる人の情けの裏表

身を粉にしています妻や子がいます

善守

蛸柳

よしろう

ただし

正三郎

和歌子

柳伸

雅文

文秋

章久

慶一

正博

幸子

朝子

信治

楓楽

太郎

度

ばっは

遠野

庸佑

寂子

萬的

東雲

寿美

千里

重人

リストラが骨身にしみる子沢山

楽知らぬ母働いて働いて

ほくろの位置が決めてとなつたサスベンス

男まさり女が隠す泣きぼくろ

飼猫の方がステキなほくろ持つ

没頭するもの持つてまなこが光り出す

目撃のほくろ決め手になる手配

宿命のほくろに泣いている女

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

真人間の味で届いた花言葉

名水の味がいのちをノックする

うまかつたなあ手術後にすするかゆ

二枚舌人の情けの味も知る

貧乏の味列島が忘れてる

神からの臓器を受けた虫の息

合掌の十指に虫のたわむれる

開発がまた虫の声消しにくる

重い荷の軋みに耐えてきたレール

やがて來た波長の軋みから別れ

軋む音目立たぬ前に油注す

両輪の軋みをかばい五十年

トンネルの軋み小石に教えられ

絵日記の朝顔大きく咲いている

お隣はハワイ朝顔咲き乱れ

ねじれてもなお朝顔は空へ向く

兄のジョロに朝顔あした約束し

ブルして雀の涙ほどの利子

四コース取る力泳の波をたて

ひき乃

直子

三男

勝美

和歌子

たもつ

頂留子

悟郎

森子

隆盛

度

千里

グン吉

欣之

一風

とみを

洋

義清

剛治

たもつ

柳伸

シマ子

弘一

年人

春人

三男

東雲

ふるさとの校舎の隅にあるプール
プールでは泳げて海で泳げない
フジヤマのトビウオ語り継ぐプール
リハビリの手足弾んでいるプール

川柳後楽吟社

健一報

糸切れた風が天女に会いに行く

継続を信じる僕の力瘤

今日は雨ゆつくり煙草の輪と遊ぶ

隠し絵も明日になれば見えますか

第二の人生亀の歩幅に切り換える

利用価値無いから誰も付いて来ず

勇気という宝を我が子に見せてやる

勲章を欲しがる錆ついたレール

おしゃべりなバラが裏口から入る

真顔で話す悪い冗談

故郷を出るときの台詞忘れたホームレス

肩書きがとれてうなずくことばかり

人生を光らす傷がまだ足りぬ

七輪が山の話の聞いている

忘却を背負って歩く夕焼ける

ホトトギスキょうは朝からかしまし

花言葉褒めれば引き金抜いていた

用水が水と幸せを流している

出る釘が打たれ世間を教えられ

誕生日誰も気にせず七十五

善人は善人らしく見せるもの

ふと醒めて思い出つきぬ事ばかり

移動なり大トラ小トラ帰還する

片減りの靴をいままさら裏切れぬ
サークル檸檬

小林

嫁った娘の厨僮びつ葱刻む
炎天の暑さを知らぬ床の壺
酷暑にも自論は曲げぬ蟻の列
炎天の蟻に神話を聞かされる
追い越した大きな船の波に揺れ

弘治
夢之助
澄子
十四郎
紫香

わたつみの声が君には聞こえぬか
声とどく地球の向こうに不思議な
信じたらずつと信じることにする
間違ひ電話とても可愛い声だった
生きている実感窓に鳥の声
ズボン吊る世捨てごろの黄昏に
謎が解け一度にバツと灯がともる
夏椿やがてのことは思つまい
踏切の向こうに赤い花が咲く
盗聴法うっかり声も出せないぞ
あいまいに笑って傷を浅くする

拓治
一夫報
正坊
雅子
智恵子
みつ子
澄子
薫
いわゑ
希久子
房子
靖巳
楓楽

梅雨模様じゃの目と下駄の似合う女
アメダスにせかさされ老いの鉄をふる
こだわりは夜半の雨に流したい
雨だれの音がリスムの譜面描く
夕立に流せぬうそが疼きます
雨あがり虹の彼方に夢をみる
許すにも時間がかかる傷のあと
孫達よゆるして地球温暖化
許そうと思つ気持がぐちとなり
しかるより許す勇気が和をつくる
許すまでせめぎあつた胸の内

余史子
寿子
正子
秀子
泰良
ふじ子
静子
悦子
登生
俊路

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

人目引く水着の女泳がない
上半身裸でパソコンを叩く
ご無沙汰を甘い言葉で叱るママ
控え目な蜜が翔べず胸に住む
満月の死角で影がもつれ合う
伸びきったゴム紐になる炎天下
ありがたやつがなく暮れ極楽日
うす陽さす部屋に波紋がまだ残り
金魚売りの声もなつかし炎天下
街を行くあれは水着かおしゃれ着か
波風をたてずに逝つた母の海
一筆を加えて思いしたためる
炎天にギャルの神輿の玉の汗

江美
和歌子
満寿蔵
正治
鹿太
幸子
龜与子
イサミ
モトコ
哲嗣
まさ
美智子
勇次郎

母の星どの子も憎いはずがない
シヤブシヤと星降る山を知っている
天の川流れを止める星二つ
星屑を集めて夢の万華鏡
鍋底でおんなの愚痴が煮え詰まる
湖の底に沈んでいる神話
底のない袋に夢を詰めている
底抜けの明るさがある海女の市
心の底に今もあの日のさくら咲く

義子
比ろ志
哲子
諷云児
たず子
武庫坊
富喜子
いわゑ

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

母の星どの子も憎いはずがない
シヤブシヤと星降る山を知っている
天の川流れを止める星二つ
星屑を集めて夢の万華鏡
鍋底でおんなの愚痴が煮え詰まる
湖の底に沈んでいる神話
底のない袋に夢を詰めている
底抜けの明るさがある海女の市
心の底に今もあの日のさくら咲く

義子
比ろ志
哲子
諷云児
たず子
武庫坊
富喜子
いわゑ

底にあるそのやさしさに気付かない
底辺の暮しに慣れた茶をする
夫婦茶碗の底から水が洩れはじめ
労働歌も景気の底か声もない
情熱も失意も吸った日記帳
深呼吸しても上ずる第一声
森林へ香気を吸いに握り飯
森へ来て薬と思ひ吸う大気
CTスキャン命吸われていく心地
吸いかけて消したタバコの物思い
用意ドン走る児転ぶ児親の顔
用意した薬も要らず旅終る
結納まで用意したのにまだ一人
老いの坂越える用意をしておこう
用意した雨具もいらぬ良い旅路
コンピュータも泥縄ですね二〇〇〇年
傾けた傘で噂をやり過す
対峙して答えはくれぬ石の庭
見たいとこ素通りをするバスツアー
ベビー靴片方落ちてゐる 真昼
用意したメモと歯車噛み合わず

京都塔の会

松川

杜的報

能子 房子 晴美 嘉代子 澄子 てる 松煙 貴代子 文 絹子 春蘭 鹿太 波留吉 トミエ 江美 求芽 美智子 周信 正坊 みつ子 萬的

ごみ焼場からタイオキシンが化けてくる
炎のうさに渦巻く彼であるけれど
お土産をやたら詰め込む帰郷り
空腹でやたら買い込み腐らせる
避けている話やたら炎えながら
金魚売り幼い夢を巻き戻す
夫婦げんかする度服が増えてゆく
制服を脱いで我が家の父となる
モーニング俺の虚像が出来あがる
手応えに胸躍らせてリール巻く
久しぶり孫の育ちに舌を巻く
恋を巻き込んでいくわたしの炎
軍服にカイゼル髭のある遺影
七十の姉にピンクの服勧め
マネキンと孫だぶらせる子供服
謙遜をやたらされたら嫌になる
人生観変える私の赤い服
上ル下ル自在に京へ燕来る
花好きの母へ届いたバラの花
沈む陽が明日への活力をくれる
暮れなずむ街角少女なを売る
コーヒーマのむ口許大にみつめられ
さくら餅好きだった人思ひ出す
身の周り棄てたいものが棄てられず

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

求芽 磯 波留吉 満子 女 風云児 宏子 正坊 吉之助 庸佑 英一 欣之 だし 福子 典子 和歌子 百合子 春蘭 笑女 達子 年代 美穂 水客 武庫坊

ちよつと待て前に大きな落し穴
ちよつと待て毒味は誰もしていない
流れゆく時間を追って今日も暮れ
早いほどいいと言うから酒になり
日足のびろ眼鏡を取りかえる
信号の黄に気が騒ぐちよつと待て
マリオネットのままで終るか日本よ

二人でドライブ青い海目指す
朝の占いで一日が決まる
おふくろの元氣な顔がある畠
畠行くたのしみがあり朝を食べ
春闘もボーナスもない畠仕事
老婦人畠を趣味に鉄を振る
畑仕事唯生き甲斐の亡母だった
ちよつと手を抜き畠から小言くる
長生きのくすり畠で四季を摘む
地にこもる鐘の音村を捨てきれず
釣り仲間朝が一番元氣です
仲間がいると元氣が出てくるよ
若い仲間夏帽子が良く似合う
政治家と仲間にならぬ冷や奴
毎日が日曜々と居る距離よ
不況風よそれに仔犬の元氣過ぎ
散歩好き元氣は宝朝の晴れ
こんなに元氣頂上で伸びをする
カラ元氣出しても見抜く妻がいる
ニハオ元氣に育つトキの声

竹原川柳会

時広

一路報

好栄 ちよえ 鈴江 博利 清泉 白汀 史子 高千枝 蘭幸 房子 喜美子 孝枝 貞舟 笹居 青朽 不子 笑喜 夏枝 一夫 節美 汎美 淑子 喜久枝 栄恵 正宏 勲

お父さんお元気ですか茜雲
リストラの夫暇です元気です
日暮から元氣になつてくる妻よ
支持率へ総理につこりして元氣
ありがたし元氣が生んだ豆ごはん
握り拳の中に小さな元氣持つ

川柳塔なら

坊農

柳弘報

失意の友笑いの渦に誘い込む
金扇をきりりと帯に祝い席
御無沙汰を記念切手で詫びて来る
海こえて切手楽しいお国柄
イラッシャイ九官鳥が客を呼ぶ
笑われているとも知らぬ自尊心
若芝に鹿と寝る児のはよせて
決断の腹決め切手やつと貼る
銀行に仇討ち定期取り崩し
忘却の彼方に置いて古切手
人に泣き人に笑つてひとが好き
返信の切手も入れて老母の文
煩惱が空で羽ばたく籠の鳥
笑わない目をした人が笑わせる
ネクタイを外して花月の席にいる
出家商俗界浄化京和解
腹決めた切手ポトンと夕焼ける
断りの手紙に足らぬ切手代
華やかな笑いの中に嘘がある
森を忘れた鴉都會の渦に果て
梅雨最中妻は車を買えと言つ

白狐 力 蝸牛 静風 千年枝 一路 久峰 民子 幸代 さと美 季世恵 たけし 春蘭 悟郎 高栄 良一 美和子 茂雄 真理子 ますみ 天狗 とし子 絹子 孝子 直子 満江

ライバルの切手の裏にある闘志
おしどりの夫婦も過去に傷の跡
ある決意切手斜めに貼つて
消印は美人切手を容赦せず
切り札を握り男の目が笑つ
企みの笑顔貧しさ透けて見え
まっ白い夢のからすが吉とて
ニッポンの梅雨稲穂の秋へ虹かける
鶴の舞う切手百枚買つ佳き日

川柳大阪 坊農 柳弘報

齒車を合わすあなたは聞き上手
どっちみち腹に入れば同じ物
両輪に人生かけた今日がある
泣く孫も泣かない孫も心配だ
飲みつぱりに予算案じる幹事さん
人生をがらりと変えた怪我ひとつ
傷薬効かぬハートの深いキズ
新車より早くローンが追つて来る
老い故に小石に挫く散歩道
待ち合わせ地下鉄で行く確実さ
君のこと案じています午前二時
定年の未だ見ぬ老後知る怖さ
車間距離とつて夫婦のいい会話
案じてた田畑を継ぐと子が掃島
人並みの歩幅きつち朝を出る
嫁の荷に車と免許乗せてやる
怪我したのママのおひさはボクの席
いいあしたの見ろよと父の肩車

道子 眞生夫 洋子 萬的 秋雄 和夫 隆盛 卓 美千子 芳香 高圭 信醉 隆司 雅功 雅巢 かよこ いづみ 喜楽 照月 青道 川童 美花 鉄心 洛醉 敏 柳昌 一風

怪我をする覚悟のバラを抱きしめる
デコのコブ覚えていない二日酔い
子の絵から消える緑を案じてる
怪我よりも負けた悔しさ両こぶし
母の荷は大八車まだ余裕
性転換天意を何と心得る
口車母さん乗ったふりらしい
案じてる通りやつぱり音痴です
若い芽が育つ案じることはない
老人医療見直しますは値上げです
不倫かも知れぬ帰つて来ない猫
車椅子介護の母に紅を差す

川柳塔鹿野みか月 土橋

爆音へ仰向く日など要りませぬ
仰向けば私みつめる星ひとつ
川柳せんりゆうとて寝た間も夢消えず
三歳児なんでどうして質問攻め
青い鳥信じて余生生き抜こう
力学がないから蟻の列にいて
爺さんの嫁に来たんじやありません
このへんで酒をぶつたり止めないか
ぶつたりとしていると孫も寄つてこぬ
摒越えた毯がぶつたり戻らない
ぶつたりと切れたか今日の恵比須顔
緊張がぶつたり切れた深呼吸
夢枕ぶつたり切れた筈なのに
ぶつたりと切られてならぬ影ふたつ
ぶつたりと絶交しました贅沢と

朝子 まつお 希久志 比呂志 一步 本蔭樺 ダン吉 笑風 金太 三十四 重人 柳弘 喜与志 幸枝 初子 弘子 明美 隆風 是るお 茂 八重子 くに子 保子 久枝 かつ乃 富久江 武子

ぶつとりと黒髪切つて道を説く
巻き過ぎた振子がぶつとり切れちゃった

脇役の欄にぶつとり名が消えた
寡婦として先祖を守る荷が重い

船歌と聞いて錨は目を覚ます

底無しこのころに届かない錨

生きのびて消毒済みの戦中派

ちくちくと消毒針で刺を抜く

膝小僧親の唾つばきで消毒し

老醜の消毒薬を買つてくる

消毒をしても実らぬ種ばかり

火傷する屋根を伝つて布団十す

皺の奥バイキンマンが笑つて

消毒をするように拭く観音さま

クレゾール石鹼液に指反らせ

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

王将戦六十六手の秒を読み

あじさい寺の雨によろこぶ仏たち

見通しはありあり次は読んである

句会すみ打率三割良ししよう

呆けぬうちに延命拒否を書いておく

すずらんにちよつぱり泣いて今日の家事

うたた寝に間違ひ電話夢を裂き

産みの親知らぬ人ありトキも亦

救急車ドラマも乗せてひた走る

何時もより優しい夫と不思議がり

案の定やっぱり総理嘘をつき

些細な事でも楽しかったと母は言い

野草

みさ子

盛桜

房子

智恵子

風人

節子

睦子

公子

和香

沼子

実満

孔美子

きみ子

螢

喜寿の坂天地無用を旗印

川柳高知

川竹

松風報

火渡りの素足平気な筈がない

情熱の龍馬無念の京に散り

一目惚れ余熱いつまで続くやら

気は逸る体のついてこぬ米寿

少子化の論議埋まらぬ世代感

少子化も食い止められぬ世紀末

つまづいて人の情けが身にしみ

軽い気でかけた情けにしばられる

カラットで釣った愛情だつてある

悶々の未だ情熱は消えず居る

法律の無情汗など考えず

Uターン村の情けの中に居る

恵まれて情けを知らぬ子が育ち

そして今人の情けに生きて老い

振り返る瞳にはつきり見る慕情

遺言を読みかみしめる親心

人情の溢れる里に居て長寿

盲人の杖へ一声かけてやり

はまゆう川柳会

中後

清史報

試歩の幅延びて笑顔の夏帽子

オクターブ下げて内緒に重みつけ

褒められて怠けておれぬ自尊心

怠けるようにで核心つかんでる

きりぎりすにも蟻にも同じ夏だけ

一人だけ内緒にされた不快感

正剣

佳風

英夫

駿作

竹萌

朱坊

てるみ

功

菊野

快風

酒仙

京子

孝雄

幸

愛宏

かず子

正五郎

千鳥

松風

学業を怠けたつけが今の俺

夏バテに老人力が立ち向かう

本心は内緒で丸いお付き合い

心臓に怠けられたらどうしよう

はげむ子も怠けてる子も皆可愛

携帯は男の内緒知っている

内緒事直ぐにばらすは酒の所為

水色の絵具買ひ足す夏の海

夏の浜カラフルなことピカソの絵

明るさだまされ起きる夏の朝

衣替え客の目を引くアロハシャツ

怠けてはいません僕はのろまで

やる気をば不快指数が怠けさせ

手抜き分顧客信用零れ落ち

内緒事耳に手を寄せ孫の息

内緒だと言つた後味まといつく

隠してもいつかはばれる内緒ごと

岸和田川柳会

長谷川呂万報

日本の意見聞こえぬGセブン

しびれすぎ立てず聞いているだけのこと

飲みすぎを意見しながら注ぐ女将

母さんの意見をじわと後で効く

踏み絵踏む羽目にもなつていた意見

こびを売る女がこわいネオンの灯

そのうちに臓器売りますノミの市

売りの上手に先に人を売る

売り言葉ゴメンと言えば済むものを

懐かしの演歌がひびく湯舟から

雄造

平和

苗子

佳子

悦子

五男

サト美

清史

華水

まゆみ

美佐子

利ぼん

雅視

公治

さだ代

たけし

比斗志

基

蛙城

一齋

辰郎

萬的

信博

美智子

東吉

路子

東雲

女一人演歌唄ってたえている
不景気の穴を大きくする政治
大穴の当る夢見て馬券買う
大穴あけて公的融資あてにする
大穴も保険も混ぜて安く買う
焼却場大穴あけたタイオキシン
人生の大穴夫とのめぐり逢い
オゾン層大穴あけたのは人だ
風にまで輝きを見た退院日
不相応な指にダイヤは光らない
ルーキーの眼が輝いている朝の駅
フィナーレは輝きたいね思いきり
新人の輝いた目に託します
ひもじくて輝いていたことがある
恋せねばあんな輝く目は持たぬ
善人だ目の輝きを信じよう
砲火やみ少年の目が輝やける
競いあう技に輝く明日がある

川柳ささやま

酒井

靖子報

鹿太郎 和歌子 昭二 俣子 呂万 けい子 富志子 金太 洋 白光子 盛之 みつ江 苑子 すみえ 洞庵 甚一 ダン吉 狸村 恵美 純子 多美子 美智子 末野 かほる 八重子 素水 とみ子

情熱を抱く幸せなしつけ糸
寿と書けばペンにもある温み
ペン先で真心通う友が居る
下手ながらペンを持つのが楽しくて
ご先祖の返事でしようか灯がゆらぐ
雨三日友へのペンは話好き
野イチゴに亡妹偲ぶ夜のしじま
分身のように持つてる父のペン
義理でする返事と分かるかたい声
ペン持てば跳べない私出てしまふ
孫一歳我が家で一番よい返事
母ちゃんのタクトへ一糸乱れない
充電をしつつ余生のペン握る

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

つや子 かつ子 富代 君美 芳郎 ヒサ子 泰子 美沙子 房江 穂子 可住 靖子 千里 ダン吉 度 美弥子 柳宏子 萬的 弥生 雅文 賢子 朝子 湖風 愛論 恭昌 信治

善人の顔した詐欺を見破られ
絶交をしても会いたい罪つくり
禅寺へ過去の自分を消しに行く
前歴が邪魔になりだす二度の職

川柳会梨花(前月分) 石上 悦子報

種馬を信じ交配(名馬だす
犬と猿交配させた夢をみる
学者より上手く交配する娘
交配の成果見るのは来世紀
交配にチンパンジーがやつて来る
交配で風に耐える花が咲く
しあわせは際限がないお月さん
不況風吹いても飢餓でない平和
一分でステキな化粧できました
へそくりを隠した場所もすぐ忘れ
今からすぐ試さないといのまれた
腹がたつすぐに間に合う子があらぬ
保険がすすぐ嗅ぎつけた出産日
刑務所はすすぐそこですよ見てごらん
僕の部屋勉強中と札がある
連休に父が寝ている部屋の隅
此の部屋は母に捧げる南向き
風抜ける部屋が無心にくれる
どの部屋も旅館のようだ何もない
寝太郎の部屋に朝陽が邪魔をする
二子山部屋に西日が差している
醗酵のできない部屋で病んでいる
封印をしても雀はすぐ破る

文秋 としを 晋吾 とみを 多哥由 一夫 和歌子 美恵子 よしえ 輪多朗 蝨 忠良 弥生 幸子 きみ子 蟹郎 玲子 かつみ 行男 睦子 高栄 ただし 悦子 節子 石花菜 ひろ子 典子

愛と愛確と封印しておこう
捺印は神になったり鬼になる
しあわせの印でしようか笑い皺

三幸川柳教室

三宅

保州報

真ん中へ誰も座らぬ大広間

この広い胸はわたくしだけのもの
ワンルームと思えば広い金魚鉢

眼も耳もみんな広がり持つている
広い世に俺とお前を通る仲

広っぱの餓鬼大将にもう会えぬ
花の咲く広場さびしい足が向く

娘の抜けた穴が広くて埋まらない
顔広くなって家計は火の車

列島は広いと思う花便り
バージンロード娘と歩む父の顔

西方へ歩く功德を積みながら
遅くとも蟻の歩みにある例え

路地裏を歩いた票で得たバツジ
真ん中を歩いて凌ぐ四面楚歌

七転八倒するたび変えてきた歩幅
家中を笑顔にさせて孫歩く

上向いて歩いては世間丸く見え
立派すぎる父が重荷のランドセル

立派に変身ペットボトルの服を着る
口惜しさを超えて称えるから立派

弓なりの背骨立派に生きている
眩しくも寂しくもあり息子の背

和枝
東雲
完司

美寿子
かず子
桂香

めぐみ
正嗣
町子

朱夏
百合子
登美代

保州
健三郎
当代

碧
鉄治
利治

秀男
伸二
豊太郎

みね
美子
千秀

さち子
初子
和子

ボン菓子鳴った横丁友恋し
別腹ですグイエットでもまんじゅうは
ビスケット一つでお手もチンチンも
大福餅鈴木その子に負けませぬ
三つなら売れる不思議な串だんご
岩おこしどれも私に似て頑固

川柳塔おっぱひ吟社

木村あきら報

親の背を越してすくすく孫の丈
波風を立てない言葉さがして

あの時の一言耐えて今日がある
赤飯もバックに入った祝い膳

冷や飯も食い人間になつてゆく
聴く耳を持つ簡単な事なのに

運動会課長の子だけは追い越さず
追越せぬ父の歩んだ広い背な

蚊が刺した位効いたか振興券
涙して嬉しく笑う情けくれ

今晴天来島海峡澄み渡り
親の背を越えた息子ほくそ笑む

越えて来た節目ふしめがある人生
捨て子大惚れつばいのが悩みです

氷河期を越えた兆しに湧く猛虎
船舶の検査一つが脅威なり

奥の手に頼り結局失敗す
天に運任せ検査の結果待つ

碧く澄むあの日の空よ原爆碑
澄んだ声母親ゆずりと誉められる

急がぬと言いつつ上手に急かす人
抱楽

起世子
和代
正一
公子
嘉平
章子

治延
マツエ
文仙

ひかり
あきら
かおり

吟笑
まさる
坊太郎

輝夫
放任
チカエ

いさむ
勝
くに子

正雪
なみ子
よしみ

はつ恵
寿々女
抱楽

楽しげに追いつ追われつ風の舞
川柳塔みぞくち
小西 雄々報

念入りの介護がやがて実を結ぶ
やがてくる幸せ信じ生きてゆく
さつと受けやがて来るべき老いに勝つ

やがて来る老いへ悩みも多くなる
返事待つやがて向こうが来るだろう

清流をたどればやがて母の海
やがて咲く花は未来の星を生む

佐渡の島米驚誕生でドラマ生む
触れ合いがやがて大きな輪になった

やがてなど言っではおれぬ老後策
好景気来ぬまにやがて新世紀

ポケットへやがて眠らす赤い夢
高槻川柳サークル卵の花

先斗町へ鎧を落としに行つてくる
道草も脱線もした我が一生

蟬の一生激しく鳴いただけの事
間違いました一生一度の高島田

久々にストレスとばす虎フアン
ストレスへしきりに咽喉が乾きます

それだけに言えば貴女ストレスないでしょう
北半球にはかりストレスがたまる

傍受法あなたも盗聴されている
ラッシュアワーで先走りする黄信号

危ないがそれより強い愛がある
五段階介護保険の評価額

貞月
弘子
鈴枝
公美枝
静江
信敬

正光
康女
和代

智恵子
豊枝
久子

雄々
おさむ
吉之助

紫香
稲子
義一

萬的
スミ子
求芽

半蔵門
一笛
満寿蔵

治三郎

炎の匂い蜜の匂いで誘う薔薇
血圧が敬遠をする娘の車
核実験地球の息が荒れてくる
口数が少なくなった娘の挙動

(惣)恵美子

重人

傘寿越しもう運転は止めなはれ
いらいらがハツりするパンの焦げ
いらいらをなだめて妻が茶を入れる
いらいらの妻が包丁持っている

武庫坊

時々はいらいらしますかたつむり
いらいらが落けるワインの澄んだ赤
失恋を優しく癒す花菖蒲
さらさらとお茶漬け罪のない音で

光穂

死神とやがて視線をあわすだろ
梅雨雲を泣かすとシャツが乾かない
何となく家出しました初夏の風
正体を隠そう白い旗あげて

秀夫

こみあげる涙ベン先から流す
馬鹿な意地通して男とは悲し
いずも川柳会

波留吉

活恵

百合子

晴美

握夢

佐藤

治代報

博子

玲子

満江

青湖

あきら

昌枝

多賀子

喜子

風鈴の音にひと夏癒される

夏雲や立派に跡を継ぐ話

何処から温い光を出す灯台

何処にでも跳んでいきたい古帽子

何処にでも地球見ている宇宙人

何処にでも居るよな人を好きになる

ストレスを何処に散らそう葱坊主

何処にでもある顔だけど愛してる

人形は抱かれた母のひざを恋う

大切に抱いていたのは泡でした

大声はよして爆弾抱いている

抱く孫の小さなぐうに夢あふれ

母さんが弾むと家も笑い出す

ドタバタと弾む二階の下にいる

ともだちをはじめて友が病んでいる

止水栓開けると弾むように出る

テル子

町紅

蘭水

久子

茂美

昭二

育子

多喜

きみえ

弥恵

安子

美江子

ちかし

草丘

章峰

陽子

犬にだけ秘密を明かす旅帰り

クラス会濁した過去を取り戻す

価値観の違いの溝が埋まらない

ナポレオンよりも茶碗の濁り酒

子に残す父の厳しき温もりと

世渡りのうまさ偏差値とは違う

受話器からボトリと秘密こぼれ出た

掛け違うボタンの穴に親と子が

濁っても泣くまいいつか水は澄む

録画撮りしときたかつた今朝の夢

はじめての臓器移植にわく議論

写真とは違う素顔が好きになり

資産など無いが自由は余る程

場違いの席であじわう孤独感

資産切れ闇魔が用はないと言う

合掌の無心へ風の詩を聞く

高栄

寿美子

ただし

はじめ

ひき乃

道子

千里

順三

あやめ

睦子

あい子

一枝

志華子

白峰

とし子

昭子

— 115 —

喜怒哀楽皆のみこんで海しずか
海鳴りに貝風鈴の鳴り止まぬ
埋め立てた海は他人の顔をする
リストラに迷う故郷に海がある
安息の海母の手に抱かれる
手に汲めば無色となりぬ青い海
上がろうか三階までは階段を
投げキッスしてから階段駆け上がる
階段の手摺りを頼る年になり
深呼吸してから上る長い階段
目標へのぼり下りのはずだった
螺旋階段登り私は雲になる
紫陽花の苗をあげます角の塀
謎めいて無縁仏の灯がちよろり
七夕の絆は脆い紙こより
種なしの枇杷に出合ったことがない
どしやぶりの雨が石段降りてくる
流れ星くらきところに遊女塚
自転車父を追いつくクラクション
しあわせな枕で満月をあびる
若いつもり女性匂わすサロンプ
トンネルを抜ければ過疎の蟬時雨
サーカスの跡に咲いてる月見草

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

愛 義芳 沙置子 日出男 歌子 比ろ志 正子 紫香 千恵 和子 久子 武庫坊 昭三 静 富美子 年代 キク子 弘治 恵子 光穂 一笛 芳子

宇宙ゴミいずれ回収しなければ
回収のゴミの山から疑問湧く
六道の辻で回収する渡銭
母の愛回収などは期待せぬ
富柳会 池 森子報
思い切り買物したよ百円ショップ
森の鳥訪ねてこない樹をゆする
恩一つ返せぬままに逝き給う
愛憎の風をひきずる欠け茶碗
改札を通れば迎え風が吹く
口づけは五月生れのわたくしと
口喧嘩しながら旅は続いている
少子化に社会福祉が音を上げる
欠点はやっぱり金のない事さ
ほろほろと月も欠けてる負けいくさ
欠点が笑くぼに見えて五十年
同じ花に寄り添う蟻の白と白
少子化に風化してゆく子守唄
十人産んだ祖母が少子化嘆いてる
きつとまた笑顔で通る同じ道
少子化の波をロボット受け止める
五人位で出来る野球を考える
飾るだけ飾って素顔のない帽子
挑戦状に負けて眠るのときしり
あこがれのスターと同じ街に住む
同時代に生きた絆がいとおしい
同じもの食べて妻だけなゼタル
ホタル飛ぶやがて旅立つ子を案じ

香住 欣史子 喜美子 能子 夕花 夕太 信博 勝子 東雲 三和子 たかし ひろこ 治恵 文子 花梢 昭水 紅紫朗 義清 扶美代 アキ 登子 けい子 和子 石舟 秋雄

誰にでも笑って薔薇の浮気性
一抜けて二抜けて寒いかごめの輪
職安で薬一本を探してる
少子化に縁ない豚の子沢山
同じ服街で擦れ合う超待働
すぐ逢える距離で逢えない日がづく
同じ木に止まる虚飾など捨てて
翠洋会 児玉
流暢な弁解へわく不信任感
金の鞍付けたことなどないラクダ
トラ負けて罪ない私叱られる
童話のラクダの鞍の金と銀
世界にひとつこの星に満足をする
空元氣出そう入道雲がわく
鏡拭けば拭くほど湧いてくる疑惑
ご返事は沸点過ぎてからにする
沸いてきた風呂もそら耳阪神戦
サーカスのラクダの荷物俺も居る
月を背に對のらくだのシルエツト
ラクダ聞く王子王女ラブの声
仕来りの世界に生きる舞扇
知恵がわくこれなにこれは？孫三歳
日の丸を出し変人と思われる
動物園ラクダは夕陽に思い馳せ
春炬燵ラクダのシャツが汗をかき
月の砂漠ラクダは檻でねむってる
世界から見れば日本はお金持ち
梅香漢のゆれる湧き水富士の裾

晴美 欣之 冬虹 一慧 春蘭 森子 蛙報 楓楽 周信 伽羅 真砂 春 さと美 喜美子 靖巳 絹子 宣司 志華子 照子 澄子 蕉子 義 恭昌 正雄 蛙 千梢 会美

原爆忌世界平和を祈る列

愚痴るまい何時かいい句が湧くまでは
哲学者彷彿とするラクダ君

コンクリート降るからみんなヘルメット

君が代にそっぽ向く人歌う人

大ロマン波に手紙を運ばせて

金借りる時だけ顔を出す男

倉吉川柳会

松本よしえ報

部屋という海底で見る月光菩薩

よろよろと老いてゆく道とおる道

三度目の浮気よろよろなどしない

タレントの人氣はどうせ浮き沈み

炎の恋の忠告どうせ届かない

それからはメダカは海のスクールへ

海釣りに行って父さんそれつきり

けんかして海の向こうに家出する

どうせ灰生きているうちに火を燃やせ

汚染され鯨も死ぬる海ですか

どうせ負けなら妥協する手もあったんだ

子の帰る海はいつでも風いている

結婚はどうせ駄目でもせまりたい

荒れ狂う心の海をもてあます

宝くじどうせ捨てた金だと思ふ

よろよろと月に一度は御前様

突っかい棒欲しいお方と住んでいる

四畳半の荒れる海から抜けだせぬ

羊水の海で名曲聞いている

よろよろと福祉の杖も先細り

久峰

日の出

叔子

東雲

正坊

舞夢

鬼遊

菊枝

菩句

喬水

小生

雄々

次男

智子

賀寿恵

克枝

喜美子

ゆり子

康子

久子

喜美子

かつみ

ちよ子

節子

幸子

和枝

悠子

ちっげなストレスだった広い海

海に來い林や川は蛸ぶよが刺す

異作りどうせかからぬもぐら取り

仏さんに幸せですとひとり言

どうせ死ぬんだ有り金全部使いきる

よろよろと仏の前にふて寝する

しあわせと言ったお顔に嘘がある

里帰りどうせひと月戻るまい

砂漠が海か海が砂漠か蝶一つ

川柳塔打吹

米田

幸子報

古希の髪艶も力も逃げて行く

昔綺麗な肌をしていたおはあちゃん

恋文が念入りにしまわれている

さらさらの浴衣を着ても身は燃える

人肌の温もりにふれ夏ボタン

若者の血はさらさらと音がする

ストレスをさらさらと流す処世術

今で良い金も名譽もなくていい

念入りに仕舞った場所を蟻に聞く

念入りに五体の隅を調べてる

爺ちゃんの窓にかつらが干してある

人間は百年計の砂時計

髪切って一つの紙を断ききった

さらさらと手紙に書いたさようなら

匙加減知りつつ口ははさまない

一進一退もつ臆面でいられない

念入りに粧って芋の花が咲く

念入りに堪忍袋縫い合わせ

よしえ

石花菜

陸子

きみ子

季芳

螢

和歌子

一夫

明美

和枝

季芳

芳光

しろう

順子

京子

貴恵

セツ子

信子

善江

よしえ

石花菜

きみ子

一夫

和歌子

玲子

克枝

博丈

念入りにおしっこかける焚き火跡

そばよりも肌の綺麗なうどん食う

肌脱ぎも恥ずかしがらぬ母になり

觀光の囷に蔵が化粧する

念入りに家を見ているのは誰だ

さらさらとのど越しよくて肥りそう

ボランテイア肌の色など言うてれず

つめ寄られさらさら嘘をならべ立て

念入りに女に化ける化粧する

さらさらと白状すれば飛び火する

どっかりと菖蒲が庭に根をおろす

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

生真面目さだけが取柄の子を案じ

リングむくナイフへ会話よく弾む

手の小さな房の藤の花

生まじめに生めよ殖やせよ管制下

借金と追えばお金は逃げて行く

談合でねじれた受託ビルが建つ

不真面目な所もあつて今日を生き

大真面目何言いたいか手を売って

黒白をつける真面目を疎まれる

席かてつみたがやっぱり蚊にさされ

案外にまじめな人がかかる異

真面目さで財積む城を孫つぶす

三億のくじに真面目な顔の列

ナイフより鋭く妻が問い詰める

子と同居迷ったあけく決めました

完司

睦子

孝恵

次男

玲泉

雄々

喬水

かつみ

松盛

節子

幸子

春子

一風

幸枝

隆盛

寿代

信子

司

友甫

朝子

一道

ますみ

トシエ

まさと

いつふみ

春江

真面目さに惹かれたはずが窮屈に
流行の水着でプール練り歩く
朝顔の咲く頃配達終ります

知佐子
美代子
民子

投棄を真面目に飲んで副作用

明

朝顔はよく起きてとせきたてる

八寿子

待ち合わせ五分前にはきつと来る

宏

まじめだと言われてずっと平社員

剛治

なりたない明るく真面目ユーモアで

ミツ子

縄文のくらしが匂う木のナイフ

道子

満ち足りて朝顔も夕顔も好き

和歌子

パチンコ屋まじめに遊ぶ大人たち

鬼遊

うぶみ川柳会

宣子報

上田

健一

寒風に向かい通して風が止む

くにお

エリートが加減乗除で昇進し

睦子

大切な要にコブが二つ三つ

華子

失敗の灰が加わり色冴える

天雀

交渉が好転酒を追加する

葉士人

麦の穂は明日を信じた空を向く

あづま

手加減に応じて甘い蜜を吸う

和歌子

四季の味冷凍庫にはたとある

孝男

四季の花植えて花回廊が開く

螢

春夏秋冬一番好きな夏になる

奈

どんどん錆びてくる脳という要

黙光

心の友と加えた筆のその重み

洋々

凡人に向くと仁王も鬱になり

静生

要にはしっかり者の妻が居る

雅女

どっち向いてもライバルに囲まれる

雅女

要領の良さが近頃目に余る

登美枝

よしよしと握りこぶしに言い聞かせ

雄人

ハードルを下げてよしよししてしまふ

ひろこ

霊長類ヒト科は四季を選ばない

石花菜

動転し要点言えぬ一九

ユリ子

野次馬の加勢に敵の足が浮き

天人

要するに切腹できぬ風見鶏

一夫

向き変えてごらん自分が見えるから

宣子

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

少しずつ歩幅が狭くなる旅路

昌枝

思い出に浸る鈍行一人旅

静恵

お茶漬の味が恋しい旅の空

茂美

地図のない旅が待ってる二十の娘

知恵子

旅先で観る満月は物哀し

和歌子

胃薬がカバンに残り旅終る

たけし

逆転の感動テレビからもらう

邦代

虫のいい逆転を待つ懐手

多賀子

裏切った池に波紋を投げかけた

みえ

ヒゲ面のくせに頭に髪がない

義良

人生に逆転劇が二つ三つ

草丘

極楽のまわりの草を抜いてやる

登美子

極楽へ今日も扉を拭いておく

章峰

極楽で神秘的恋をする蜜

芳枝

極楽へ行く近道は教えない

桂子

極楽の位置にハンモックをつるす

博子

極楽で寝転んでいる足の裏

久枝

貧乏神ある日我が家で立ち止まる

与根一

ある日から忘れられない人がいる

ひふみ

ある日突然手術をすると嫁が言う

静江

ある日から耳に栓してあつからかん

友江

世紀末ある日何かがありそうだと

注湖

風向きが或る日変わったのも知らず

すみこ

九十になっても意地が捨てられぬ

米子

道端の草にも強い意地がある

午朗

喉元の意地がなかなか出て行かぬ

太泡

重たいと感じる雨に意地がある

哲雄

意地張って入道雲に叱られる

煩悩児

青リンゴには負けられぬ老いの意地

町紅

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

勝つたなと思う地声を出してくる

しげお

抜け目ない妻の一声釘をさす

萬的

声に出すと消えゆく思慕よ夏祭り

希久子

歳やなあつい声に出るヨッコラシヨ

正三郎

物思い部屋の時計が止まっている

諷云児

念願の城に自分の部屋がない

計光

友達部屋に貸し物は捨てた本がある

紫香

世に針代は捨てずに持っています

落児

千人針だけは捨てずに持っています

杜的

戦中派捨てたい物がたんとある

知香子

うちよりもええもんがある粗大ゴミ

重人

捨てられた女洗濯ばかりする

寿美子

使い捨ててうまい娘に負けている

慶子

屋上杉の机で嘘は書きにくし

楓楽

たわむれの記事書きちらし夕刊のデスク

薫

デスクから元気な足が覗いている

和歌子

昇進の度に立派になるデスク
窓際が残して行つたデスクかも
一期一会亡母がそうしてきたように
嬉しくてたんと手紙を書きまじした
大空で今度は孤独に耐えるトキ
携帯を迷子札にと持たされる
落日を見送りに月昇つて来
紛失の手帳と消えたスケジュール
一言に意外な妻の怒りよう
汗流し身を粉にしている男居る
もくせいも人も香りし十五年

岩美川柳会

石谷美恵子報

辞書を手をやつと会話が通じ合ふ
辞書繰って嘘もまことと糧にする
辞書開き女ごころを問うてみる
辞書繰って見ても死ぬ日が出てこない
私の辞書に不倫や嘘はない
美しい言葉尋ねて辞書を繰る
インテリ一方書を片手に闊歩する
辞書の靴が時方だけと日本語だ
執念の靴が時方だけと日本語だ
席順が不足か急に黙りこむ
鉛筆ばかり尖らせている恐い席
欠席と委任状出し母見舞う
追い風が味方するとは限らない
ときめきをくれる真夏の海が好き
人生のゲームセットは花で埋め
鈍行の果てにも青い海はある

庸 佑 一 笛 きく子 求 芽 肋 骨 英 子 正 坊 シマ子 悟 郎 みつ子 単 車 大 漁 季 芳 主 一 郎 静 生 蟹 郎 忠 良 和 歌 子 睦 子 公 乃 一 京 一 瑶 明 美

追い風に乗って私を見失う
今一度夫婦という字辞書を読む
ふる里に兎を追つた山がない
席のない古巣へ客で招かれる
追うほどの男性でなかった軽い傷

川柳やがわ

江口

母さんが洗濯すると暗れてくる
妻の天気に一喜一憂する吾が家
食欲も少し戻つた梅雨晴間
都合よく相合傘となりました
雲悠ゆう恥ずかしくなる嘘ひとつ
真夜中の雨に川沿い眠れず
駆け足で追い越してゆく上天気
寺総代頭悩ます奉賀帳
代表の名刺がひとり歩きする
代表の椅子へ熾烈な水面上
見せしめに右代表で叱られる
肝心な時に代表あくびする
切腹を覚悟代表引き受ける
代表を覚悟と手強く筋通す
診断書のコピーがたとと要る不幸
運動会ババのコピーがびり走る
コピー機は正直です誤字脱字
ひまわりのコピーのようなお母さん
コピーした女心の色変る
流行は目に入らない母もんべ
この夏も流行るといねきミソール
流行を追わずに個性磨きたい

芳 江 節 子 裕 子 た ぬ 美 恵 子 度 報 三 千 子 礫 光 子 かすみ 一 風 恵 子 とし子 高 栄 博 泉 庸 佑 洋 良 知 時 弘 亜 成 文 秋 重 三 あやめ 朝 子 順 三 日出子 仁 清 忠 央

流行をつかず離れず追いかける
流行のかけらも追わず山が好き
笹舟を流すと小川澄むのかも
車洗うと雨になるからやめてんか
夫には強いが子には弱い妻
花道は自薦他薦が揃い踏み
あじさい寺でばつんと咲いている女
父の日に子に再婚許される

堺川柳会

河内 月子報

見たことはないコロンボのおカミさん
スリルより安全ばかり選び生き
主婦達の集うお洒落なレストラン
隅すみに程度越している几帳面
素うどんに天かすナルトきざみ葱
新幹線コンクリートの落下さけ
ストレスが適当にあり気分よし
充実の気合を画布にぶつつける
母ちゃんのお合がなと動けない
自動ドア気合を合がなと動けない
初デート気合を入れて歯を磨く
スリル慣れた山葵が効き難い
すばらしいテナーのひびき聞き惚れる
入れすぎの気合に負けたかやくめし
凄目の鉄火女の気に入られ
リストラに気合忘れた労働歌
ベテランの主婦で手抜きも一流で
スランプにそつと気合をくれる友
エプロンにちよつと贅沢しています

勇 太 朗 小 路 度 冬 葉 一 途 弘 一 茜 波 留 吉 千 代 梓 靖 雄 小 雪 彰 東 雲 春 蘭 勇 太 舞 夢 日 の 出 ア キ つづや 八 千 代 冬 虹 朋 月 健 吾 伽 羅 ちや子 五 月

静かなる気合漂う老いのペン
 寄る年の気合するするから回り
 愛として渡すスベアキースリル
 花道はなかった主婦の市場がこ
 凄まじい低気圧だな聞き流そ
 ポケットの中の辞表にある気合
 人間ドックちよっぴりスリル味わいに
 糠床に主婦のブライド漬けてある
 夕ぐれ風の風がこさばい露天風呂
 好きな人手も握らずに消えてゆき
 のし袋男の気合入れてある

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

どんな生きかたえらぶだろうか蕾たち
 終点が近いゆつくり立ちあがる
 夏祭 金魚掬った若き日よ
 大臣を待つ公用車光らせて
 生きている証背伸びもしたくなる
 太陽をあびてみかんが太りだす
 緋せぬようおんなの彩をたしていく
 ビーポーが止まった事故が近いかも
 ここまでおいで私は綱を持ってない
 背もたれの椅子をみつめてホッとする
 梅雨晴れ間野鳩の一羽巣立ちする
 艶やかひと日を惜しむ沙羅双樹
 八月の暑さあの日夾竹桃
 捨て石になっても泳ぐ世の流れ
 胃袋がちそうさまと合図する
 午後からはソフトなお茶を召し上られ

半銭 文 楓 美子 里つえ 美代子 泰子 かりん 紀美女 深雪 天笑

玲子 瑞枝 すみえ 春枝 ふみ 寿々子 蘭

節々が警告音を出している
 忿怒仏ちの歩幅が速くなる
 川柳会梨花 石上 悦子報
 島根ワイナリー七番がイチ好き
 貴婦人が嫌いワインは尚すかん
 一杯のワインで心天国へ
 安いけどジゲのワインはハツカ水
 ワインは千円ワイングラスは五千円
 赤ワイン夫婦喧嘩は止めました
 自画自賛楽しい夢に老い知らず
 目線の位置変れば開く自閉症
 川の字の真ん中母の城がある
 うれしいときも哀しい時もある涙
 針穴のカメラも歴史知っていた
 見合写真駄目ならそつと返してよ
 写真ではもつと美人に見えたのに
 我が娘カメラ片手に燃えています
 写真では何時もニコニコ仲が良い
 一歳のヌード写真を飾ってる
 二度目ですバツイチですと豪語する
 二度目には開き直って借りに来る
 われながら二度目の嘘はすららと
 バツイチが初心に還り井戸を掘る
 二度目には大胆不敵野良の猫
 二度と顔出さぬ雨ふりお月さん
 二度目です若い妻です元気です
 種かえて二度も時いたに芽を出さぬ
 カーテンを開けてイエスという合図

日枝子 荒介 美恵子 和歌子 久子 石花菜 完司 忠良 多哥由 高栄 かつみ 螢 行男 輪多朗 一枝 一雲 典子 幸子 節子 求芽 玲子 和枝 勝見 睦子 よしえ

第13回 堺市民芸術祭川柳大会 とき 9月12日(日)午後1時開場 ところ 堺市立梅文化会館3階 宿題 イメージ 続く 走る たつぷり 凄 念力 餅 席題なし・締切2時・千円・各題2句	第7回 和歌山県川柳大会 とき 9月5日(日)午前11時開場 ところ ガーデンホテル・ハナヨ (田辺市文里2丁目36-40) 会費 1500円(軽食・記念品・発表誌呈) 兼題 「甘い」 「伸びる」 「叱る」 「器」 「脇役」 「マスコミ」 中後清史選 森かほる選 中村重治選 木本朱夏選 寺本つねお選 川上大輪選	カーテンをはがされ獣里へ出る カーテンをひいても音は洩れている カーテンの奥で悪魔が囁いた カーテンは閉めていますが生きてます 悦子 蟹郎 一夫 きみ子
---	---	---



柳 恩 (本田恵二朗先生を偲ぶ)

田 辺 灸 六

一九九九年七月七日、七夕の日に清音村の江口有一朗さんから本田恵二朗先生の訃を知らされ、一瞬啞然として耳を疑いました。

昨年五月、私達柳社の創立四十周年記念大会にそれは元気で参加して下さいと、橘高薫風主幹をはじめ久し振りに友人知人ともにこやかに握手を交わし、歓談して旧交を温め再会を喜ばれたばかりなのに、こんなに早くお訣れするとは、本当に残念で堪りません。

今年になってから私自身の入院生活があった、先生との連絡も途絶えお見舞も出来ず済まないことでした。どうぞお許し下さい。とお詫びしたあとでよく考えてみると先生が羨ましく思われて来ました。人間一度は近く運命にあつて九十二歳の天寿を全うされ、七夕に飄々と天国の織姫と逢う旅発ちは、先生の風流とロマンに満ちた生来の人徳がもたらす業で、私達もあやかりたく思います。

私と先生のお付合いは昭和五十八年柳社創

立二十五周年大会を終ってから始まりました。

柳誌を編集するようになって毎月例会の課題吟原稿を清書、無記名で先生に送り選評を返送してもらって発表となるのですが、その原稿返送の早いこと、発送してから三日後にはきちつと選評が届きます。先生は原稿が着いたら必ずその日に選評をして返送する習慣にしていたそうです。このやりとりは昭和三十三年柳社創立以来昨年の創立四十周年まで丸四十年間途絶える事なく、而も無報酬で続けられた実績は本当に頭が下がりに誰にでも出来るものではありません。私達に有難い道しるべを見せてくれた先生に厚く感謝しています。平成二年四月十五日満開の桜の中で大原ユ一モア川柳大会が土居耕花さん追悼として開催されましたが、その時先生から大原は僕の生れ育った所だから参加するなら同行しよう。案内するからとの話が出てそれなら私の車を運転して江口有一朗さんと三人で参加しま

した。車中、能弁の先生から学生時代のことや川柳についての話等沢山聞かされました。

その中の一節。「君柳恩の言葉知ってるかい、これは僕の造語で川柳をやっておれば色々な人とふれあい、楽しく生きることが出来るようになる。これが川柳から貰う恩、即ち柳恩と僕は名付けているんだよ」と話された先生の言葉を忘れることが出来ません。

全く同感であり、肝に銘じて生きています。大原では先生の生家を始め武蔵の里を隅々なく案内され歴史、文化について詳しく説明を受け思い出深い旅になりました。殊に前夜祭で小林妻子、矢内寿恵子、山本玉恵の三人を紹介され賑やかな宴席に先生も大満悦でした。

この席で河内天笑、月子御夫妻とふれ合いを持ち楽しくナツメロ大合唱で意気投合した一幕があり、今日の柳交を得た柳恩でした。

私達の例会が七月八日で告別式に参加出来ませんので有一朗さんに弔詞を依頼し柳社一同告別式開始の午後一時岡山のエバホールに向けて黙祷を捧げ御冥福をお祈りしました。四十年の柳恩本当に有難く深く感謝します。

「足跡を残そう砂のある限り」 恵二朗
法名 清明院寛字恵響居士

「足跡を偲び恩師の徳慕う」 灸六
どうごかゆつくりお休み下さい。 合掌

柳界展望

新同人紹介

岸 田 知香子

— 薫風・寿美子・正坊・みつ子推薦

北 野 哲 男

— 薫風・正雄推薦

吉 本 川 柳

第6回 「女」 選評 河内 天笑

投句先 54275 大阪市中央区難波千日前11-6

〒0075 吉本文芸館(06-66643-7799)

投句締切 9月10日 便箋に3句以内・80円切手5枚同封

没句評句会 9月24日(金) 午後6時 吉本文芸館

好敵手迎える腕が鳴って 各題秀句は次のとおり。

くる 小林 妻子 本當のことを知ってる裏

〈鳥取市長賞〉 池 森子 表紙 池 森子

〈新日本海新聞社賞〉 お昼まで眠った富を大切に

徳田ひろこ 八月の空から過去が落ちてくる

★第17回夜市川柳大会は、 中井 アキ

7月31日、堺市総合福祉会 兵隊の位のままでいる墓

館で開かれた。本社同人の

★川柳あしなみ500号記

念川柳大会は7月11日、N

TT姫路しらさぎ会館で開

かれ、事前投句124名、

当日出席80名。本社同人の

受賞は次のとおり。

母も女で迷いはじめる塩

の道 矢内寿恵子

死ぬまでの大地を這って

縄になる 池 森子

血のにじむ羽根で翔んだ

よ亡父の峰 池 森子

五分間の落差でシナリオ

が変わる 池 森子

百万の味方に勝る妻がい

る 川島諷云児

信念を曲げず左遷にあま

んじる 川島諷云児

★7月18日、第4回大砂丘

川柳大会が85名の出席者に

より、鳥取県福部村砂丘セ

ンターで開かれた。本社同

人の秀句は次のとおり。

信号を待たせ自力の松葉

杖 清水 潮華

歳月を重ねて節にたまる

柳 林 荒介

モンタージュ記憶をつな

ぎ合わせ出来 菱田満秋

背伸びしたツケどっさり

と世紀末 河内 月子

脳みがく辞書はあれこれ

持っている 澤田 千春

熱風が描く風紋はバラに

なる 藤田 泰子

なお、藤田泰子さんの句が

最優秀句となった。

★7月20日、尼崎川柳大会

が園田学園女子大学図書館

で137名の参加を得て開

催され、本社同人の受賞は

次のとおり。

ロッキングチェア雲と話

をしています 奥田みつ子

万馬券当たった男が花を買

う 松尾柳右子

★「みづつみ」第7回誌上

川柳大会(うぶみ川柳会)

の賞が決定した。本社同人

の秀句・受賞は次のとおり。

余興する背のペーソスを

思い遣る 徳田ひろこ

あり 桶高 薫風

男結びさえも阿吽の呼吸

秀句を薫風主幹が受賞。

選の特別宿題「男結び」の

新津市で開かれ、大野風柳

集「男結び」出版祝賀一が

大会―長谷川冬樹エッセー

★7月11日、柳都全国川柳

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

なお、総合2位新家完司、

し 新家 完司

鮎二匹お酒は二合文句な

は次のとおり。

川柳文芸大会が鳥取共済ヒ

ル5Fで開催。出席69名、

投句40名。本社同人の秀句

★7月4日、第2回鳥取県

川柳文芸大会が鳥取共済ヒ

ル5Fで開催。出席69名、

投句40名。本社同人の秀句

は次のとおり。

鮎二匹お酒は二合文句な

し 新家 完司

帆をあげる潮時いつも間

違える 植田 一京

なお、総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

集「男結び」出版祝賀一が

大会―総合2位新家完司、

4位鈴木公弘、5位倉益一

瑶の諸氏が受賞した。

★7月11日、柳都全国川柳

大会―長谷川冬樹エッセー

</

標 播本 充子

八月の真ん中辺にある軍 定・会費4500円(昼食

歌 榎原 公子 懇親宴共)・欠席投句拝辞

干潮も満潮もない母の海 窓口は〒683-0836

川上 大輪 米子市花園町53川柳塔きや

笑ってはいないあきれて らばく事務室

いるのです 榎本日の出 ★鳥取県没句川柳供養大会

★第35回川柳塔きやらばく は12月12日午前10時から鳥

忘年句会は12月12日(日) 取共済5階大ホールで開く。

午前10時から米子市観光セ 題と選者は敗者復活吟川

ンターで開く。題は頭・玩 島風云児・淡い森山盛桜

具・貸す・魚・広場・像・ 手形最上和枝・もつすぐ

飴・ダンボール(各題2句) 大原雅女・浮気山下山蟹

第十五回国民文化祭・ひろしま2000

プレ国民文化祭 第九回県民文化祭文芸祭

とき 10月17日(日)午前10時開場(12時半締切)

ところ 大竹会館講堂(アゼリアホール)

JR山陽本線大竹駅下車徒歩10分

事前投句 印象 石原伯峯 柱 定本広文

当日投句 形 角本華峰 動く 八島白龍

各題2句・応募料無料・9月10日締切(消印有効)

応募先 〒739-0692大竹市小方1-11-1

第十五回国民文化祭大竹市実行委員会

事務局「文芸祭」川柳大会係

郎・手きぐり小谷はるみ

成仏山本鐘道・はつきり

猪川由美子・税金岡崎

彰夫・各題2句・11時半締

切・参加費4500円・欠

席投句は11月末日までに1

000円を同封して〒68

0-0033鳥取市二階町

3-102植田一京宛

▽出 版△

■合同句集『もくせい』Ⅲ

もくせい川柳会は結成十五

周年を記念して刊行した。

会員・会友五十四人の九百

六句を収録(B6判176

ページ)。非売品

■田中正坊参予は、川柳句

文集『ペンシル』を刊行。

四六判・ビニール装・24

0ページ。橋高薫風序文・

東野大八跋文。頒価200

0円、葉文館出版刊

▽人事往来△

■7月11日、新津市の割烹

「新森」で開かれた柳都全

国川柳大会に薫風主幹は同 人多数と参加して、「ディ

空港」で開かれた第3回川

柳展望全国大会で講評を担

当した。

▽同人消息△

■櫻庭順風氏(弘前市)は

永年の教育功勞により、勲

四等瑞宝章の榮譽を受けら

れた。5月11日、国立劇場

で伝達式の後、皇宮参内。

▼訂正とお詫び▲

■6月号P10(川柳塔)

上段20行目九十の詩「八十

■7月号P18(川柳塔)

下段16行目飄々飄々

■P21(川柳塔)下段16行

目春未だ春未だ

■P113(各地柳壇)な

んべんも釘をさされる浮気

癖の句の作者賢子朝子

■8月号表紙②(兼題選

者)原章峯・原章峰 森井

善居・森井善居

■表紙④(鳥取県川柳大会)

17行目参加賞・参加費

■P105(住句地十選)

6句目の作者賢子朝子

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城北 川柳会	18日(土)午後1時から ゆうゆう・ルーム・炎天・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳会 梨花	18日(土)午後1時から パッチリ・ふくろ・騒ぐ・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
岸和田 川柳会	18日(土)午後1時半から うやむや・援助・憶測・楽屋	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	19日(日)正午から 成果・サッカー・映画・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半から 互選「人妻」・過信・波紋	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	20日(月)午後1時から 地球・ポート・ほとほと・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	22日(水)午後6時から むかつく・無臭・娘・群れ	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京都 塔の会	23日(木・祝)午後1時から 突く・乱・やつれる	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前10時から 旗・菊・チャンス	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔 ふくべ	25日(土)午後1時から 月・工夫・反省・決める・「無情」	福部村中央公民館2F研修室 〒689-0115 鳥取県岩美郡福部村細川16-3 村上信子
東大阪市 川柳同好会	25日(土)午後6時から 淋しい・情け・プロ・天	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川柳 ふうもん社 吟	26日(日)午後1時から それでも・キリスト・腹	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
はびきの 市民 川柳会	26日(日)午後1時から 月・すっぱり・エゴ・「行事」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳塔 みぞくち	27日(月)午後7時半から 影・家	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太（0724-43-4889）へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木)午後 2 時から 元氣・色・突く	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	3 日(金)午後 1 時から 台風・時計・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	4 日(土)午後 1 時から 笑う・結果・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	4 日(土)午後 4 時から 秋の空・踊る・厳しい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	5 日(日)午後 1 時半から 野・出会い・願う・雑詠	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
堺川柳会	9 日(木)午後 1 時から まさか(折句)・探す(共選)・堂々	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	10 日(金)午後 6 時から 形・増す・萩・ビタミン	八尾市文化会館 4 F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 打 吹	11 日(土)午後 1 時から いそいそ・肉・彼方(あちら)	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	11 日(土)午後 1 時半から 凡人・定員・主役	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 わかやま	12 日(日)午後 1 時から 腕・焦点・パネ・「滝」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13 日(月)午後 1 時から 空気・迷う・様子・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	14 日(火)午後 1 時半から 顔・案山子・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘北口から 市バス⑧番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほ たる 川 柳 同 好 会	14 日(火)午後 1 時から 男・誘う・泣き虫	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池駅西へ150米 〒560-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
高槻川柳 サークル 卵 の 花	16 日(木)正午から 視野・カード・その後 やんわり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児

編集後記

い合間にちよつとめくつて
瞳の保養にしてください」
とか、「ちよつと時間が取
れた時にでも読んで、疲れ
をとって欲しいと念じて」
と添え書きをして、星野富
弘の花の詩画集と、柳澤桂
子・赤勘兵衛の歌画集を送
ってください。

★今、一番欲しいものとはと
問われたら、時間と答える。
したい事、しなければなら
ない事は山ほどある。第一
句を作る時間がない。じつ
くり考えて作句したい。本
は買ったまま積んである。

★そう言いながら、ポツと
時間が空く、暇ができた時
に一生懸命、句を作るか、
本を読むか。答はNO。結
局、欲しい、したいと思ひ
続けながら日を送っている
方が、いいのかも知れない。
何でも満ち足りることは墮
落につながりやすい。

★フランスの思想家ルソー
の言葉に「子供を不幸にす
る一番確実な方法は、いつ
でも、なんでも手に入れら
れるようにしてやることで
ある」とあった。

★周りの友人たちが「忙し
加お待ち申します。(み)

ひよこ

淋しき哉すばらしき哉

「あれからは寝ない兎にある余
裕」の賀状と、高田姉の追悼文を
傍に、美房先生(ご本人には叱ら
れましたが)を偲んでおります。
先生とは、初歩教室で一度だけ
ご指導を頂いたご縁で、面識もご
ざいませぬ。それも直接電話下さ
り「あれでいいですよ」だけで、
あとは同年配であること、終戦時
私の隣町に駐屯していたことなど
先生残念でした。(桑名 孝雄)

旧友と語るが如くで、高知でのご
案内役まで約束いたしました。実
現はしませんでした。一本の電
話がそれ程強烈だったのです。
初心者で不慣れた私への、お心
遣いであつたかと、今更ながら、
有難く感謝している次第です。
こんな心のふれあいによるご指
導があればこそと、川柳塔のすば
らしさも再認識させて頂きました。

▼酒には、甘・酸・辛・苦
・渋の五味があることは、
以前書いた。ではよく言わ
れる、甘口・辛口の酒とは
何を基準にしているのだろ
うか？

▼普通、原材料やアルコー
ル度数、出荷年月等は表示
されている。しかし「日本
酒度」というのは、あまり
知られていないのではなか
ろうか。

▼この「日本酒度」という
常に複雑なもので、体調や
松島「は十20。(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（11月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

第五回川柳塔まつり

きりとらせん

〔平成11年10月10日(日)〕

ホテル・アウィーナ大阪

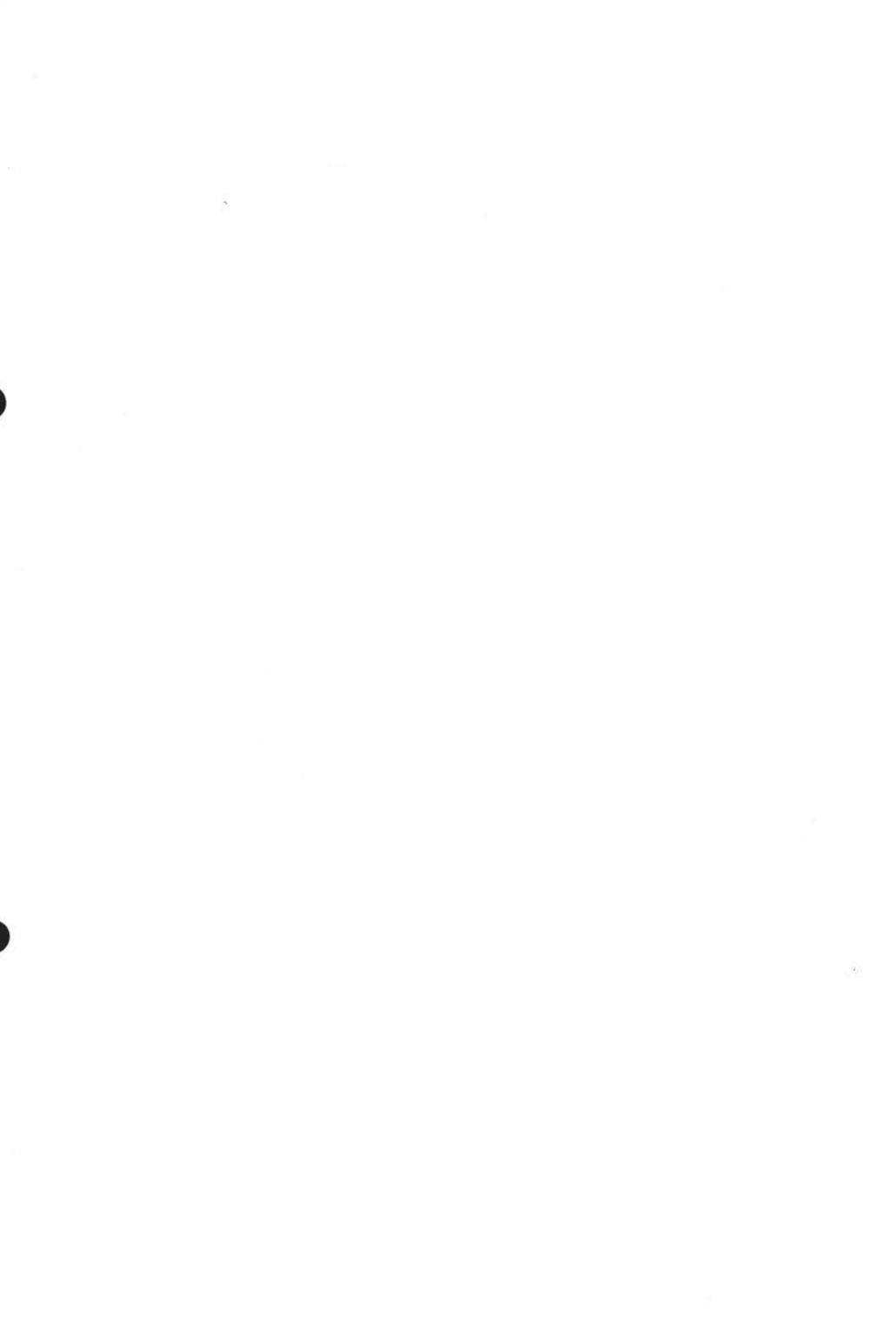
懇親宴 7,000円 会席料理 不参加 参加		NO.	
		〒	
宿 泊 ホテル アウィーナ大阪 シングル 朝食付 8,000円 当日泊 前日泊		氏名 ふりがな	住所
◎ 懇親宴・宿泊の代金のみ同封の 払込用紙で御送金ください。 ◎ 句会費は当日いただきます。		男・女	
		TEL	

事前投句「追う」

橘高薫風選

(8月31日締切 出席者に限る)

NO.	



作品募集

11月号発表(9月15日締切)

川柳塔(8句)	橘高薫風選
水煙抄(8句)	河内天笑選
渺湖抄(3句)	八木千代選
茴香の花(3句)	宮西弥生選
課題吟(3句)	宮本かりん選
「出会い」	高田美代子選
「願う」	池田善守選
初歩教室「声」(3句)	吐田公一担当

12月号
課題吟「間」「絆」「とりあえず」
初歩教室「終り」

本社9月句会

とき 9月7日(火) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題「残る」 吉村一風選
「予定」 桜井千秀選
「カクテル」 高須賀金太選
「目立つ」 河内月子選
「丸い」 橘高薫風選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 500円 投句料 400円

本社10月句会は、第5回川柳塔まつり記念句会として開催いたします。

夜市川柳募集

第4回「風」 高田美代子選
ハガキに3句 9月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 渺湖抄・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)

平成十一年九月一日発行

編集兼 発行人 橘高薫

印刷所 美研アート

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1446

振替 〇〇九八〇一五二二三八番

第6回 鳥取県民文化祭主催事業

第23回 鳥取県川柳大会

と き 10月10日(日) 午前9時半開場 11時開会
ところ 倉吉シティホテル(☎0858-2616111)
(JRR山陰線の倉吉駅から南へ徒歩8分)

講 演 葉文館出版株式会社社長
兼題と選者

「近い」 齊藤俊輔氏
「けむり」 谷口次男氏
「住所」 角田千秋氏
「家」 小築雨学氏
「包む」 小島蘭幸氏
「影」 土居千寿氏
「やがて」 森中恵美子氏
「鳥」 橋高薫風氏

出句締切

午前11時50分(各題2句・席題なし)

賞

鳥取県知事賞 倉吉市長賞 ほか

参加費

2000円(昼食・発表誌呈)

欠席投句

投句料 1000円(発表誌呈)

投句締切

9月20日必着

前夜夕食会

10月9日(土) 午後6時 6000円

宿泊

8000円程度(朝食代込み)

夕食会・宿泊ともに倉吉シティホテル・要予約

申込締切

8月31日

連絡先

(欠席投句先・夕食会・宿泊申込先)

〒683-0105

米子市葭津1712-1 門脇かずお宛

☎0859(8)8078

FAX 0859(8)8086

主催

鳥取県川柳作家協会・鳥取県文化団体連合会・鳥取県倉吉市・新日本海新聞社 ほか

田中正坊 川柳句文集

ペンシル

序文——橋高 薫風
跋文——東野 大八
四六判・二四〇頁・上製
定価二〇〇〇円(送料別)

立志伝溺れたこともある河童

恥ずかしい国だがやはり僕の国

老犬の蹠蹠として行く枯れ野

裏話書いて乱れた世を稼ぎ

万年青の実 日中友好二千年

新世紀生きる「十年日記」買う

泣き笑いペンシル抱いて五十年

◎川柳塔社事務所でも取扱います

発行所

葉文館出版

〒556-0003

大阪市浪速区恵美須西二-18-11
TEL 〇六・六六三四・五五四八